シャニマス×ノクチル×ポケモン

malco

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シャニマスの世界にポケモンがいたらという話しです。

主にノクチルと幼馴染み達の事が大好きな主人公の話しとなります。

目次

普通の日常 1
幼馴染み 6
調査 12
スカウト 16
面接 21
宣材写真 27
ファン1号 33
バトル施設 38
登校 46
ツイスタ 53
横浜カップ（前編） 62
横浜カップ（中編） 75
横浜カップ（後編） 84
買い物 106
重大発表 117
将来 126
居残り練習 138
家族会議 148
通学路 161
２８３プロにて 172
お祝い（前編） 176
お祝い（後編） 182

普通の日常

ポケットモンスター、縮めてポケモン。この世界に住む不思議な生き物。

人間とポケモンは長い年月をかけて共存を可能としてきた。ポケモンと家族として共に過ごす者、一緒に仕事をする者、ポケモンを研究する者様々な形で人とポケモンは共にある。

そして、多くの人とポケモンが熱中している競技がある。トレーナーがポケモンをゲットし、育て技を磨き上げ、ポケモン同士を闘い合わせる競技。ポケモンバトルだ。

「サイドン、『アームハンマー』！」

「ゲッコウガ、『まもる』！」

「くそ、だったら『ストーンエッジ』だ！」

「『アクロバット』で回避だ！」

『真田選手のゲッコウガ、攻撃技であるはずの『アクロバット』の軽やかな動きでサイドンの技を次々に躱しています！サイドンは攻撃を当てられない！』

サイドンは大分、疲れてきてるな。だったら

「『かげぶんしん』で相手を撹乱しろ」

「くそ、ちょこまかと動きやがって！サイドン『ストーンエッジ』で全部の分身に攻撃しろ！」

サイドンは指示通り、『ストーンエッジ』を放つが体力の限界が近く、全ての分身には攻撃を届けることができない。

次で決める。

「ゲッコウガ、『みずしゅりけん』！」

本体と残った分身が両手に『みずしゅりけん』を構え、サイドンに向かって投げつける。

ゲッコウガの放った『みずしゅりけん』がサイドンに直撃し、サイドンはそのまま仰向けに倒れ目を回している。

「サイドン戦闘不能！勝者、真田選手！」
ワーーー!!観客席より大きな声援が響く
『決まったーーー!!真田選手、この決勝でもポケモンを一匹を失うことなく勝利しました!!これで中学に続いて高校生リーグにおいてもチャンピオンの称号を獲得です!!』
「ゲッコウガ、戻ってくれ」
お疲れさん。表彰式が終わったら、みんなで祝勝会だな。
ゲッコウガをボールに戻し、片手を上げて声援に応える。
声援が響くなか、俺は観客席にいる大事な幼馴染み四人を見つめる。
四人はそれぞれ俺に対して親指を立てる、小さく微笑む、ボロボロに泣きながら拍手、両手を上げ笑顔を見せる。それぞれ違った形ではあるが俺の勝利を喜んでくれていた。
頂点に立てた事に対する喜びはもちろんある。だけど一番うれしいのは俺の勝利を心から喜んでくれる彼女たちの存在だ。

ピーピーピーピー
目覚まし時計の音が響き、目を覚ます。
「・・・夢か」
もう何日も前の出来事だが、こうして偶に夢で思い出す。
いやー、あの時は嬉しかったな。何が嬉しいって、皆喜んでくれたし、祝勝会が始まったら幼馴染みたちが俺にプレゼントまで用意してくれてたんだもん。
あまりの嬉しさに全員にハグしたら、おじさん達がすごい目で睨ん

できたっけ?そう言えば、彼女達は顔を赤くしながらも受け入れてくれてた…ひょっとして脈あるのかな?だったら嬉しいけど

あんまりのんびりしてる時間もないし急ぐか。俺はベッドから起きて、トレーニングウェアに着替える。彼女達からプレゼントでもらったネックレスを着け、そのまま近所の公園までランニングだ。その後、一時間程ポケモン達とトレーニングを行う。

・・・偶に夢中になりすぎて、何度か学校に遅刻していることを除けば、上手くやっていると思う。トレーニングを終えると一旦、帰宅しポケモン達に専用のポケモンフーズを与えると俺も朝食を食べて学校に向かう。ここまでが基本的な朝のルーティンだ。

「おー透、円香、小糸、雛菜おはよう」
「あー、おはよう」
「・・・おはよう」
「あ、丈くんおはよう!」
「やはー、丈先輩おはようございまーす!」

学校に向かう途中で幼馴染みたちに出会う。

上から浅倉透、樋口円香、福丸小糸、市川雛菜、幼い時から一緒に過ごしてきた俺にとって世界一大事で可愛い幼馴染みたちだ。

「雛菜今日は珍しく早いな」
「うん~なんか今日は早く起きちゃったから、少し早めに出たんだ~。雛菜がいるの見たら、先生たちきっと驚くと思うよ~」
「もう、雛菜ちゃん!いつもこの位に来ないと駄目だよ!」
「ふふ、小糸ちゃん真面目」
「・・・騒がしい」

そんな会話をしながら、久しぶりに全員で登校していく。

「おう、真田おはよう！」
「真田先輩、おはようございます！」
「真田君、おはよー」
　学校に着くと先生や後輩、同級生たちが挨拶してくる。俺は適当に返事をしていく。彼らは俺のバトルを見てファンになった人たちだ。応援してくれるのは嬉しいが、はっきり言って

「・・・面倒くさい」
「有名人は大変？ミスターチャンピオン」
「その呼び方辞め…正直言うと面倒だし朝から疲れるかな」

　いや、本当に校門から下駄箱までに何人と挨拶したんだ？しかもほとんど名前も知らないやつだし

「っ丈くん。駄目だよ、そんな事言ったら」
「本人たちには、言わないからいいだろう？おまえたちの前でしか言わないから秘密にしといてくれ」
「で、でも」
「それにほら、俺たちだけの秘密って、親友感あっていいでしょ」
「し、親友・・・うん！そうだね！任せてちゃんと秘密は守るから！」
「あは～、小糸ちゃんちょろーい」
「・・・確かに、悪い奴に騙されないかちょっと心配になるな」
「心配になるのは分かるけど、小糸を騙す悪い奴って、あんたのことでしょう？」
「おー、丈一郎悪人認定？」
「俺は小糸をからからことはしても、傷付けたりはしないから例外だ」
「も、もう！みんな怒るよ！」

俺は真田丈一郎。ポケモンリーグ高校生チャンピオンだ。この日本の高校生達の中で最強のポケモントレーナーとなった。

自分で言うのもなんだがもうチャンピオンになり割と有名人になってしまった。だけど、そんな俺と以前と変わることなく接してくれる彼女たちと過ごす時間は何よりも大切だと胸を張って言える。

だが、そんな日常は終わりへと近づいていた。まさか、彼女たちが芸能界という非日常に飛び込み色々と厄介ごとに関り、そして俺自身もその厄介ごとに首を突っ込んでいくことになるとはこの時は、予想すらしていなかった。

幼馴染み

放課後、俺は都内にあるいくつかあるポケモンバトル専用の施設でポケモンバトルを行い帰宅していた。
時間つぶしがてらスマホに手を伸ばすとチェインにメッセージが届く。
「ん？雛菜か？」
『やは～♡おいしいパフェのあるカフェ見つけた～♡』
そんなメッセージと一緒にパフェと雛菜、それと小糸も映った写真が添付されている。あの子は本当にいつでも楽しそうだな。
「今度は俺も一緒に連れて行ってっくれ、と」
メッセージを送り返し、スマホをしまう。

Ｐｒｒｒｒ・・・

電話だ、また雛菜かな？・・・お、透か。
「はい、もしもし？」
『あ、丈一郎？今、なにしてる？』
「今、家に向かってるとこだけど？」
『そっか、じゃあ話したいことあるから部屋で待ってる』
「ああ、もうすぐ着くから透の部屋に行くよ」
『え？丈一郎の部屋だけど？』
・・・まぁ、いいか。俺の部屋は皆の溜まり場だ。見られても困るものは置いていない。
『そういえば、さっきから変な音聞こえるけど何処にいるの？』
「え、空だけど？」
『・・・え？』
今、俺は手持ちメンバーの一匹、ボーマンダの背にまたがり空を飛んでいる。
『何で飛んでるの？電車使えばいいのに』
「いやー今日のバトルでボーマンダ使ってあげられなかったからさ。

軽く運動してもらおうと思って」
　ごめんな、ボーマンダ明日は使ってあげるから
『…丈一郎って常識がないよね？』
　…まさか、こいつに言われる日がくるとは
「…とにかく、もう少しで着くから待っててくれ」
『りょーかい』ピッ
　透がチェインではなくわざわざ電話してくる辺り割と重要な案件かもしれない。少し急ぐか
「ボーマンダ、少し飛ばしてくれ」
「ギャアオ」

＊＊＊

　その後、１０分程で自宅に到着し部屋まで行くとベッドに腰かけ雑誌を読んでいる透がいた。
「あ、おかえりー」
「ただいま、待たせたかな？」
「ううん、ちょっとここ読み終わるまで待ってて」
「おーう」
　しかし、透もそうだが、他の幼馴染たちも平気で俺の部屋に入るよな。あの子たちは皆、俺の部屋か透の部屋をたまり場にしてる傾向がある。逆に彼女たちの部屋に行くこともたまにあるが、数は少ないな。
　まぁ、俺の部屋に勝手に入るのはもう慣れたからいいけど…
　しかし、俺一人では幼馴染たちの部屋には行かない、というか行けない。透や雛菜は部屋に入っても気にしないようだが円香と小糸は少し気にしてるみたいだし、何よりおじさん達が入れてくれないのだ。高校生リーグのハグ事件以降、警戒が強くなってる。昔は、もっとフレンドリーだったのになぁ。
　全くそんなに心配しなくてもいいのに。あの子たちに手を出す時が来るとしたらそれは、しっかりと責任を取る準備ができた時だ。そ

れまでは絶対に手を出さないと決めている。…ハグくらいは許してくれないかな？
　ちなみに、おばさんたちとは昔と変わらず良好な関係だ。たまに「またお母さんって呼んでもいいのよ？」とか言ってくる。俺も何度か悪ノリで「お母さん」と呼んだら幼馴染達が顔を赤くしていたな。特に真っ赤になりながら円香はすごい目で睨んできてたっけ。…円香の特性は威嚇、誰か図鑑にそう登録しておいて

　　ぎゅっ

「おぉ！」
　考え事をしていると後ろから抱きしめられ、思わず変な声を出してしまう。ハグ事件以降、透と雛菜は不意打ちでハグしてくることが多い…背中の感触がやばい、いつの間にこんなに成長したんだ…
「…丈一郎？」
「ああ？ごめん、考え事してた、読み終わった？飲み物出すよ」
　そう言って、俺は透から離れる。ふー、落ち着けよ俺…
「うん。ああ、そうだ、冷蔵庫にあるミックスオレとサイコソーダもうなくなるよ」
「あれ、まだ結構あったのになぁ」
「一昨日、皆で集まって、お菓子食べてたからその時飲んじゃった」
「…まぁ、この部屋の冷蔵庫は透たちが好きに使っていいけど」
　そう、俺の部屋にある小さめの冷蔵庫はポケモンの大会の優勝賞金で買った物で、この部屋をたまり場にしている彼女たちの為に飲み物やお菓子などを入れている。だから構わないが
「俺のいない時にそんな楽しそうなことしてたのか？」
「フフ、ガールズトークの内容気になる？」
「…別に」
　めっちゃ気になる！中学生辺りになってからたまに俺だけ団体行動から外されることがあるのだ。昔は何でも一緒に行動してたのに、ここ数年疎外感を感じることが多い。いっそ、皆男だったらよかった

のに…
…やっぱ嫌だな。あの子たちは女の子の方がいい。毎日、顔を合わせるだけで幸せな気分になるのはあの子たちが可愛い女の子であることも重要な要素になっている。
「これ言うの何度目か忘れたけど、仲間はずれにされるのが多くないか？」
「そうだっけ？」
「そうだ、そうだ」
「じゃあさ、下着買うときとか、いやらしい目で見ない？」
「…ミナイヨ」
「ダメじゃん」
…うん。仲間外れにされても仕方ないね。でも俺は悪くない。思春期なのが悪い。
「…まぁ、そこは男女の違いってことで、どうかよろしく。…ところで話って何？大事なこと？」
「うん。あのさ、アイドルやることにした」
この子なんて言った？
「…アイドル？あのステージで歌って踊るアイドル？」
「そう、そのアイドル？」
「…何でまた急に？」
「今日さ、あのお兄さんにあったの」
お兄さん？俺の記憶の中で透と関わりのあるお兄さんというとあの人しか思い当たらないけど
「それって、ジャングルジムのお兄さん？」
「ああ、やっぱり覚えてたんだ。丈一郎の数少ない…唯一男友達みたいなやつだもんね」
「やかましい！」
昔から、透たちといたせいかどうも小学生の同級生の男子から目の敵にされていた。中学以降はチャンピオンになって、近づいてくる奴もいたが、友達というより取り巻きになろうって感じで好きになれなかったっけ。

それはそうと、どうやら、当たっていたようだ。そうか、俺と透が昔、一緒に出会ったあの時のお兄さんと再会したんだ。
「へーあの人か？懐かしいな。お兄さん、芸能プロダクションで働いてんの？」
「プロデューサーだって」
「プロデューサーね。どういう仕事？」
「…分からん」
だと思った。はい予想通りの回答です。
「まぁ、それはいいか。それでアイドル目指すの？」
「うん、スカウトされたし」
スカウトか、この子は顔もスタイルもいい、今まで何度かそういうことがあったけど大抵は断ってきた。まぁ、隣に威嚇の特性を持ったあの子がいたからっていうのもあるんだろうけど
「…それに」
「？」
「ううん、何でもない。」
何だろう？俺の事見つめてたような気がしたけど、まぁ、いいや。それにしても
「そっかー、俺も会いたかったなぁ」
俺がそう言うと、透がクスリと笑う
「言うと思った。じゃあ、はい」
透はポケットから一枚の紙きれを出す。
「…名刺？」
名刺には２８３プロダクションとプロデューサーの名前が書いてある。
「そう、プロデューサーの」
「え、貰っていいやつ？」
「いいんじゃない？それにプロデューサー言ってたよ。アイドルだけじゃなくて公式戦に出れる強いポケモントレーナーも探してるって」
「そっかー。じゃあ貰っとくわ」
あのお兄さんがいるなら話だけでも聞いてみたいな。でも、透はも

うアイドルやる気みたいだし、そうなると厄介な問題が浮上してくる。
「このことって、もう皆に話した？」
「ううん。でも今日、樋口がうちに来るから、その時話そうかなって」
「…そうですか」
　これはめんどくさい事になりそうだ。あの身内を何よりも大事にするあの子がこれを無視するは筈がない。
「うん、取り合えず名刺ありがとう。どうするか考えとくよ」
「りょーかい。じゃあ、今日は帰るね」
　そう言い、透は部屋から出ていく。俺も玄関まで見送った後、部屋に戻りスマホで２８３プロの事を調べる。…一応ね、変な事務所じゃないか念のために調べよう。
　ふーん、イルミネーションスターズ、アンティーカ、放課後クライマックスガールズ、アルストロメリア、ストレイライトね、アイドルに詳しくない俺でも知ってる名前がある。でも、バトル関連のは検索しても出てこないなぁ

　ピコーン

　チェインに通知が来る。

『明日の夜、時間作って』

　あぁ、やっぱりか。透がアイドルになると知ってあの子が何もしないわけがない。…まぁ、俺も気になってたし一人で調べに行かれるよりはいいか。

　ごめん、ボーマンダ。明日もバトルはお休みみたいだ。

調査

とある喫茶店にて俺と幼馴染の円香は向かい合って座っている。
この喫茶店は透がスカウトされたアイドル事務所２８３プロダクションのすぐ近くにある店だ。
「…それでどうする？」
「さっき説明したでしょ？もう忘れたの？」
「いや、２８３プロを調べるのはいいよ。俺も気になったし、だけどもうちょっと具体的にどうするのかを決めないと」
そう、先日２８３プロにスカウトされた俺たちの幼馴染、浅倉透。彼女が所属する事務所が変な所じゃないか調べるというのだ。
「だから、浅倉をスカウトした事務所の人に会う」
「その後は？」
「取り合えず、事務所から出てくる人に適当に話しかける。アイドルに興味がありますとか言えば話くらい聞けるでしょ」
なるほどね、今回は結構真剣みたいだな。けれど、ないとは思うが危ない事務所だったら、円香にも結構なリスクだ。
「了解。円香は綺麗な顔してるからな、きっと食いつくぞ」
俺だったら絶対に食いつくもん。
「…別にお世辞とかいらないから」
「本心だって、鏡みてみる？顔面偏差値高めの子がそこにいるよ」
「…もういいから」
円香はそう言って紅茶をすする。あら、照れてる可愛い。耳赤いですよ、円香さん。口に出したら、怒られるから言わないけど
「それで、どこで話聞くんだ？事務所の中？」
「…ここに呼ぼうと思ってる。事務所の中は流石に不安だから」
まぁ、確かに円香の心配は杞憂だと思うけど、あれから何年も経っているし、あのお兄さんが悪い人になっている可能性はある。…そう考えると、やはり一人で来させなくて良かった。一人で行って何かあったらなんて想像したくもない
「そうだ、真田、名刺持ってる？」

「?ああ、持ってるよ」
「貸して」
俺は持っていたお兄さんの名刺を渡す。
「…うん、ありがとう」
受け取った名刺を睨みながら見ている。
「…そう、この人が」
円香は口調などに厳しいものはあるが、本当に身内を大事にしている優しい女の子だ。だからこそ、透をアイドルにスカウトして俺たちの関係を変える切っ掛けを作ってしまったお兄さんの事が気に入らないのかもしれない。

だけど

自然と手が円香の頭を撫でていた。
「ちょっと!」
「大丈夫だよ」
「…何が?」
「透がアイドルになっても何も変わらない」
「っ!」
「透は円香を置いてどこかに行ったりしない」
「…でも」
「透はそんなやつじゃない。分かってるだろう?」
「…うん」
そう、透は俺たちを置いて行ったりしないだろう。むしろ、知らない世界で困って今まで以上に頼ってくるかもしれない。
…なんか心配になってきたな。大丈夫かな?あの子結構考えなしで行動したりするし
「まぁ、確かに透の事心配になるのは分かるよ。事務所自体は安全だったとしても芸能界全体は違うだろうし、誰かにころっと騙されるかも」
「でしょう?」

「ああ、透には俺たちがついてないとだめだめなんだって思っておいた方がいいかもな」
「なにそれ？小糸の真似？本当に似てない」
　円香はそう言い、先ほどより少し頬を緩める。
「・・・手そろそろどかして」
「ごめん、ごめん」
　…髪サラサラだったな、もっと触っていたかった。どんな風に手入れしてるんだろう？
「じゃあ、そろそろ行ってくる」
「了解。俺はここから見てるから強引に事務所に入れられそうになったら、叫ぶなり、手を挙げるなり、少し大きめのリアクション頼む」
「ん…この子も一緒だけど、もしもの時はお願い」
　円香は、自分のモンスターボールをみた後に俺に言う。円香のポケモンも結構強いから問題ない…はずだ。
　いざとなったら、俺と俺のポケモンたちがいる。俺のポケモンに勝てる相手はそうそうはいないはずだ。それに俺自身、伊達に普段からうちの格闘ポケモン相手に組み手をしていない。
　…そう言えば、最初の頃は俺が勝ってたけど、最近は手を抜かれているし、あいつの方がサンドバックを持ってくれてたりする。あれ？ひょっとして俺の方が育ててもらってる…ま、まぁとにかくそこらの自称空手王程度なら余裕で倒せる程度の武力はある。

　円香が事務所の傍でスタンバイしたので、俺もいつでも出られるように準備する。お金もテーブルに置いてあるし、ポケモンもいつでも出せる様に準備してある。これでいつでも行けるな。

　すると事務所から出てきた男性に円香が声をかけているのが見えた。あれ？あの人見覚えがあるな。あの時のお兄さんかも。その男性と円香は少しその場で話した後、こちらの店に向かってくる。取り合えず、突撃はしなくてよさそうだな。

二人は店に来ると、俺の近くの席に座る。近くで見て確信した。この人があの時のお兄さんだ。久しぶりに会えて俺的にはラッキー、でもお兄さん的にはアンラッキーかも。円香、一応にこやかに話聞いてるけど相手の名前聞いてないのかな？聞いたうえであの態度なら問題ないけど

事務所の説明が終わったのか最後に名刺を貰っている。しかし、貰って名前を確認した瞬間、空気が凍ったのを感じた。

名前聞いてなかったのかーお兄さんドンマイ。その後も少しだけ二人は話していたがよく聞こえない。だが、話し自体は終わったのか円香は立ち上がる素振りを見せている。

まぁ、平穏に終わってよかった。そう思ったのだが、お兄さんが円香に何か話しかけている。

うん？何だろう？円香の表情が少し厳しめになったな。

「は…？ふざけないでください近寄らないで」

円香はそう言い、俺の方を見てくる。これって合図かな？仕方ない行くか

「すいません、少しよろしいですか？」

「！あ、あなたは！」

あ、やっぱりお兄さんだ。懐かしいけど今は円香優先で行こう

「すいません、彼女の知り合いでして、何かありまし「高校生チャンピオンの真田選手ですよね！宜しければ、お話を聞いていただけないでしょうか！」…はい？」

話を遮ったつもりが、逆に遮られてしまった。どうしよう、これ？

スカウト

「成程、つまりあなたは、円香から何か光るものを感じたのでアイドルに正式にスカウトしたいというんですね」
「はい！出会ったときにすぐわかったんです。ダイヤの原石だと…」
　俺はお兄さん、いやプロデューサーさんから詳しく話を聞いている。俺とも話をしたい様だが、まずは円香の事だ。
　円香は俺の横で話を聞き、何とかしてくれと目で訴えている。任せておけ
「プロデューサーさんでしたね？言いたいことは一つです」
「な、何でしょうか？」

「あなたは見る目がある！」

「…は？」
「ですよね！私としては是非とも既にスカウトしたご友人の浅倉さんと組んでいただきたいと考えています」
「…ちょっと」
「それいいですね！二人は家が隣同士で、それこそ幼稚園に行く前からの付き合いでして、俺も二人とは長い付き合いなんですが、そんな俺から見ても二人は本当に息ぴったりなんですよ！」
「…いい加減に」
「おお！そんなに長い付き合いなんですか！いいですね、それを武器にしていけばきっと」

「本人を置いて話を進めないで！」

　ドンッとテーブルを叩く。いかん、夢中になって円香の事忘れてた。怒ってるなーどうしよう？
　あ、店員さん大丈夫です。スマホ置いて通報しないでください
「あーごめん、円香」

「し、失礼しました。でも、先ほどの言葉は本当です！あなたから確かな可能性を感じた。是非、うちの事務所でアイドルをやってみませんか」
「……」
　悩んでるな。そうだなぁ
「いいんじゃないか？やってみれば」
「…でも」
「透と組む方向で行くんですよね？」
「ええ、是非」
　うん、面白そうだし
「透と組めるならどんな仕事をするのか円香も把握しやすいだろう？本来の目的も果たせるし悪くないと思うぞ」
「…分かりました。そういうことであれば」
「！ありがとうございます」
「…よろしくお願いします」
　浅倉透に続き、樋口円香がアイドルになりました。
「あの、真田選手にもお話を聞いてほしいのですが、宜しいでしょうか？」
　あ、そうだった。俺にも何かあるんだっけ？
「はい、いいですよ」
「…私、帰ろうか？」
　隣で円香がそう囁いてくる。うーん
「いや、一緒に聞いて行って。どうせ後で話すんだし、いいですよね？」
「はい。こちらは構いません」
「…そう言うなら」
「じゃあ、お願いします」
「は、はい！真田選手には是非、２８３プロ専属のプロポケモントレーナーになって欲しいんです」
　プロポケモントレーナーとは、読んで字のごとくプロのポケモントレーナーである。ポケモンリーグは小学生の部、中学生の部、高校生

の部、大学生の部、社会人の部、そしてプロトレーナーの部と分かれている。前の四つは一定の年齢を超えてさえあれば、だれでもエントリーできる。
　ただし、プロトレーナーの部は違う。ここに入るためには、企業や事務所から正式にスカウト、オーディションで合格し所属した者しか参加できない。言うなれば実力を認められたものだけが参加できる。その為、プロトレーナーの部を上位リーグ、それ以外を下位リーグとも呼んでいる。
　中学生リーグと高校生リーグを制覇してから、そういう話は俺にも来ている。正直、最初は嬉しかったが色々と条件を出してくることが多いのだ。俺が高校生ということもあり、少し足元を見ているとしか思えない様な条件を出してくるところも多い。
「…やはり、そういう話ですか」
「はい、是非お願いします！」
「いくつか確認させて貰いたいんですが、２８３プロの事は俺も少し調べました。でも、特にプロのポケモントレーナーのことは書かれていませんでしたけど？」
　そう、透に名刺を貰った後、軽く調べた感じではアイドルメインの事務所でバトルとは無縁そうだった
「ええ、今まではそうだったんですが、２８３プロでも昨今のバトルブームに影響を受けて、本格的にバトル部門を作ろうと決まったんです。しかし、まだ、作ったばかりで、専属のトレーナーは一人もいないんです」
　本当にただ作っただけっぽいな
「ですので、我々と一緒にゼロから始めてくださる方を探しています。何分、出来たばかりで色々と至らない点はあると思いますが、どうかご一考して頂けないでしょうか」
「では、所属した場合の条件の様なものは？」
　一番大事なのはこれだ。以前来たスカウトには企業のマスコットにしているポケモンをメンバーに加えて欲しいとか、自分の会社で作った道具を持たせてバトルして欲しいとかバトルに口出ししてく

るところが多かった。
　一番の問題は俺のバトルスタイルだ。世間では、ポケモンバトルとは力と力の真っ向勝負という風潮がある。高校生リーグの決勝でも、相手がパワーファイトばかりしてきたのもそれが原因だ。
　俺のエースであるゲッコウガはスピードと多彩な技と特性の変幻自在が武器だ。そのために、時には攻撃を回避し続けて隙を狙うこともする。この戦法が一部の層からの受けが悪いらしい。
　２８３プロはどうなのか
「いいえ、特にございません」
　…え、ないの？
「先ほど樋口さんにも説明しましたが、２８３プロでは、本人の資質と希望に合わせた活動を行ってもらうことをモットーにしています。ですので、真田選手は好きなポケモンで好きなようにバトルしてください」
　・・・・・・・・・・
「私自身、真田選手のバトルを何度も見たことがあります。変幻自在で常識に縛られないバトル、真田選手は今のまま、余計なことを気にせずにバトルしてこそ輝く！そう確信しています」
　……きゅん
　いや、きゅんじゃねえよ。そっちのケはねーから、まじで。俺の心はとっくに幼馴染みたちに奪われてるから
「詳しくはこちらの資料をご覧ください」
　そう言って、プロデューサーはカバンから資料を取り出す。
「どうか、よろしくお願いします」

＊＊＊

　そうして今日は解散となり、俺と円香はカフェを出て家に向かっている。
「…どうするの？」
「専属の件か？結構前向きに考え中かな？」

条件なしというのは魅力的だ。
「…そう」
それに何よりも
「それに専属になれば、俺も二人と一緒にいられるし」
「…まぁ、何かあったときの為にボディガードが居てくれれば楽だけと」
円香は本当に小さく微笑みながら言う。長年の付き合いの俺には些細な表情の変化さえも読み取れる。あれは、割と喜んでる顔だ！
「ふふふ、そういうことにしておいてやろう」
「は？調子に乗らないで？」
「…すいませんでした」
俺って、彼女達の前になると本当に弱いなぁ

面接

プロデューサーに会いスカウトを受けた次の日の放課後、俺の部屋で幼馴染み会議が行われていた。
「透ちゃんと円香ちゃんがアイドルやるの？」
「え～いいな～雛菜もやってみたい！」
「うん、ガチのアイドル。イェーイ」
「まぁ、成り行きでね」
確かに成り行きでだけど、プロデューサーさんは本気みたいだったし。この子らキャラが立っていて面白いと思う。
「真田も専属のバトルのトレーナーやるんでしょ？」
「え、丈くんもなの？」
「ああ、まだ返事してないけど引き受けようと思う」
あの後、資料を読んだが、２８３プロは近くにある施設と契約していて、そこでポケモンたちの特訓することができる上にポケモンの食事代の負担、大会参加のための移動費などの特典も多かった。
「透先輩と丈先輩もいるなら雛菜もやる～」
「…わ、わたしは」
「？小糸ちゃんはやらないの？」
「…い、いいのかな？」
「小糸が決めることでしょう？」
「ああ。でも、いてくれたらうれしいよ」
無意識に皆を引っ張ってる透、それに乗っかる雛菜、皆のサポートをする円香、必死に追いかける小糸、それぞれが役割があるから、このグループは纏まってるんだと思う。
…え？俺の役割？ボディガード兼稼ぎ頭かな？こうして俺の部屋で集まるときの飲み物とかって、俺が買っておいた奴だし
あれ？ひょっとして俺って皆にとってただの金づる？
「！も、もう、本当に私がいないとダメなんだから！」
「おー、来ちゃう？」
「じゃあ、プロデューサーに相談してみるか？俺、専属の件の返事する

し、二人の事も聞いてみるよ」
「お願いしま～す」
「あ、ありがとう！丈くん」
「…結局、いつもの流れ」
　そのいつもの流れが好きなくせに円香ってば本当にツンデレなんだから
　ギロ！
　ひぃ、心読まれた？
「丈一郎って、バトルの時以外は結構顔に出るよね」
「…どうせ馬鹿な事考えてたんだでしょう？」
「あは～丈先輩の顔面白ーい」
「あ、あはは」
　散々な言われようだ。顔面白いは余計だっつーの、えーっと、プロデュサーの番号はと…

「というわけで、俺たち全員の面倒見てくださいな」
『…分かった。でも、その子たちとも直接会って判断したいんだ。』
　まぁ、そりゃそうだな。
　その後、プロデューサーさんと話し、次の休みの日に二人は面接を受けに行くことが決定する。透、円香、俺も契約書のことなどで話があるらしいのでついでだから同じ日取りにさせてもらった。

＊＊＊

　そうして数日後、面接の日がやってきた。
「い、いよいよだね」
「あは～そうだね～」
「小糸緊張しすぎだから、…雛菜は気を抜きすぎ」
「ご、ごめんね円香ちゃん」
「え～雛菜はいつも通りでいいでしょ～ねぇ、透せんぱ～い、丈せんぱ

～い♡」
「ふふ、いけるっしょ」
「ああ、いざとなったら、俺が泣きわめいてごねまくって合格にしてもらうきっと大丈夫だ！」
「…その年で泣きわめかないで」
半分は冗談だけど、半分は本気です！
でも、そんなに心配はしていない。面接が決まってから、面接練習とかもやったしね。雛菜はいらなそうだが、小糸はきっちり予習しておいた方がちゃんと力を発揮できるタイプの子だ。
そんな訳で、２８３プロに到着したわけだが、前に見た時も思ったが、結構普通の建物だよな。建物は３階建てで１階にペットショップ・クリーニング店・靴屋・書店なんかがある。２８３プロの入り口はペットショップの横の階段から行くみたいだけど、あれ、ペットショップにめり込んでない？
「うーん、約束の５分前についたな」
「５分前行動は社会人の基本だよ！」
「別に社会人になったわけじゃないでしょう」
「あ、そ、そっか。で、でもアイドルになれたら一応働く訳だし」
「学生アイドルってその辺どうなんだろうな？バイトの延長感覚？」
「うーん。分からん」
「言うと思ったよ」
俺たちは階段を上り、扉を何度かノックするとプロデューサーさんが出てきた。
「お、時間通りだな。２８３プロにようこそ！」
この人、明るいよなぁ。円香風に言うならミスター好青年かな。
「それで、そっちの２人がアイドルの志望者かな？」
「…よ、よろしくお願いします！」
「お願いしま～す♡」
２人の姿は良くも悪くも、いつも通りと言えるか
「取り合えず、中にどうぞ」
事務所の中は、何というかアットホームな感じでフローリングに

カーペット、座卓にソファの近くにはテレビもある。事務所っていうから、もっと仕事場みたいな感じだと思ってたけど居間みたいだな。
「さて、まずは面接から始めさせてもらっていいかな？」
「ひゃ、ひゃい」
「は～い」
「じゃあ、こっちのテーブルでやろうか。三人はソファで待っていてくれ」
そう言って、プロデューサーさんは自分のデスクに座り、二人もデスクの前にある椅子に座る。
「「・・・・・・・・」」
俺たち？ソファに座って聞き耳立ててるよ

「それじゃあ、福丸小糸さん、市川雛菜さん。まず、アイドルの志望理由から聞いていいかな？」
「は～い。透先輩がアイドルやるって聞いて、すっごくいいな～、雛菜もやりたいな～って思ってきました♡」
「…あ、あの私も…その皆と一緒にアイドルやりたいなって」
この辺、小糸は練習の時、色々考えてたけど面接で嘘はよくないから本当の事を言った方がいいと言っておいた。
「事前に聞いてはいたけど、皆本当に仲いいんだな」
「…！そ、そうなんですよ！私たち本当に凄い仲良しなんです！」
「…はは、そうみたいだな。丈一郎と円香には話したけどみんな一緒のユニットで活動出来たらいいなって考えてるよ」
「やは～♡それ楽しそう～」
「…わぁ」
よし、雛菜はいつも通り。小糸も幼馴染関連の話から少し、肩の力が抜けてきてる。
「うん。それで次の質問だけど二人はどんなアイドルになりたい？何かやりたいこととかはある？」
あ、やっぱりこの質問来たか。
「う～ん？雛菜はどんな時でも笑顔で楽し～く、しあわせ～でいたい

だけだし、それ以外は特に考えてないかな～」
「…はは、そっか。確かにファンはアイドルに笑顔を見せてもらいたいからね」
「でしょ～雛菜そういうの得意なんだ～」
うん。雛菜らしいね、雛菜の笑顔は本当に力になる。１０年以上力を貰ってる俺が言うんだから間違いない！さて、小糸は
「…わ、私は、皆と一緒にいたくてここに来ました。…だから、なりたいアイドルとかはまだ…ないです」
そう、小糸にはというかここにいる全員だが具体的に目指すアイドルの姿はない。小糸がここに来たのも皆に置いて行かれたくないからというのが一番の理由だ。
…まぁ、置いて行かれたくないっていう理由でここに来たのは多分、小糸だけじゃないと思うけど
「…だ、だけど、その、私には皆がいないと駄目だし、皆にも私がいないと駄目なんだって思うんです。だ、だからお願いします」
そうだ、誰か一人でも欠けちゃだめだ。俺たちには小糸は絶対に必要だ。
「…そうか」
プロデューサーさんは少し、ソファから聞き耳を立てている俺たちを見る。俺と透はプロデューサーさんに頷き、円香は無視しているがどこか嬉しそうな顔をしている。
それを確認すると、プロデューサーさんはゆっくり息を吐く。
「繰り返し言うけど、君たちは本当に仲がいいんだな。その仲の良さはきっと強い武器になると思う。…でもアイドルをやる以上、目標は必要だと思う」
「・・・・・・・・」
「だから、アイドル活動をやっていく中でどんなアイドルになりたいか考えてくれるかな？」
「…え？」
「それが、最初の課題だ
これから、よろしくな小糸、雛菜」

「！……はい！」
「やは～♡、よろしくお願いしま～す」
福間小糸と市川雛菜がアイドルになりました！
その後、俺たちは契約書を貰ったのだが、契約書は俺たちだけでなく、小糸と雛菜の分も用意されてた。
まぁ、俺たちと同じ日に面接をセッティングしてくれた辺り、よっぽどのことがない限り合格にするつもりだったのかも。何はともあれこれで皆で同じ事務所に所属できた。これから、色々大変なこともあるだろうけど、皆一緒なら乗り越えられる筈だ。

宣材写真

「宣材写真？」
　めでたく２８３プロに所属する事になった俺たち５人は、今日プロデューサーより、初仕事を申し付けられる。
「そう。今後の活動の為に、まずこれを撮らせて貰いたいんだ」
「おー、いいね。タレントっぽい」
「俺は違うけど、皆タレントでしょ？」
「やは～初仕事～」
「か、頑張ろうね！」
「…言われたとおり制服で着ましたけど、いいんですね？」
「ああ、「同じ学校に通ってる幼馴染み」を前面に出していきたいんだ」
　まぁ、確かに幼馴染みで尚且つ同じ高校に通ってる人って世の中にそんな多くないだろうな。…ふふ、やっぱり、俺たちの関係って人から見たら珍しいのかもな

＊＊＊

「うーん、表情が堅いなー」
「す、すいません…」
　撮影スタジオに移動して早速撮影を始めたのだが中々上手く行かず、一旦、休憩を入れることになった。
「ご、ごめんね。私のせいで…」
「え～そんな事ないと思うよ～。丈先輩の方がひどかった～」
「ふふ、丈一郎ずっと無表情だったもんね」
「一番カメラなれしてる筈はなのにね」
「…く、返す言葉がない！」
　実際の所、俺が一番ひどかった。確かにカメラ慣れはしてるけど、バトルに集中してる間に勝手に撮られてるだけだから気にしたことなんてなかった。
　まさか、俺だけを見てるカメラにあんなに緊張するとは…

スタッフさんと相談をしていたプロデュサーが俺たちに声をかけてくる
「少し、遊んでみるか？」
「…は？」
「緊張ほぐした方がいいだろう？ポケモン達との撮影もあるんだ。今のうちに出して少し遊んでも構わないってさ」
「やは～雛奈賛成～」
「りょーかい。家以外で出すの久しぶりかも」
「…う、うん」
「…よし！」
俺達は自分のモンスターボールからポケモンを出していく。
俺のパートナー、しのびポケモンのゲッコウガ
透のパートナー、いつくしみポケモンのミロカロス
円香のパートナー、ドラゴンポケモンのキングドラ
小糸のパートナー、あわはきポケモンのシャワーズ
雛奈のパートナー、みずうさぎポケモンのマリルリ
いや、改めて全員揃うと壮観だなぁ。俺たちのパートナーポケモンはタマゴから孵化したポケモンたちだ、それこそ生まれた時から知ってるからこうして見ると立派になったなとしみじみと感じてしまう。
…ひょっとしてこれが親の感覚なのかな？

ざわざわ、ざわざわ
彼女達がポケモンを出すと、周りのスタッフやプロデューサーが驚いている。
「あれ？全員は駄目だった？」
近くに来ていたプロデューサーに確認する
「い、いや問題ないよ。…ただ、彼女達のポケモンに驚いてしまって…特にミロカロスなんて実物を見たのは初めてだ…」
まぁ、気持ちは分からないでもない。全員もれなく最終進化のポケモンたちだ。しかも、ミロカロスはその美しさや数の少なさのために

滅多に見られることのないポケモンだ。…ふふふ、皆驚いてるな
「…とても、新人アイドルたちが持っているポケモンじゃない。…もしかして、あのポケモンたちは丈一郎が」
「いや、進化させるための手伝いはしたけど、正真正銘彼女達のポケモンだよ」
そう、進化に必要な道具などの調達はした。…と言っても都内で開かれていた小さな大会の副賞で手に入れた進化に必要な道具をプレゼントしただけなんだよね。
だがミロカロスの進化は全員の成果とも言える。俺がとあるポケモン研究家の論文で見つけたヒンバスの進化方法を教えて、全員でポロック、ポフィン作りを頑張ったからこそ進化できた。
しかも、彼女たちのポケモンたちは全員最終進化ということもあり、それなりにレベルが高い。リーグ戦に出る前はたまに俺のポケモンたちとトレーニングしていたから実戦にも慣れてる。
「ミロー」
「ドラ！」
「シャワ」
「ルリルリ」
家以外の場所で全員集合は久しぶりか、さて、何しようかな？
「バレーやろっか？」
「やる～」
「ちょっと待て、どこから持ってきたそのボール？」
「え、そこにあったけど？」
そりゃスタジオの備品だろ。
「と、透ちゃん。ちゃんと確認しておかないと駄目だよ。」
「え、だめ？」
「はぁ、確認して来るから待ってて」
こういう時に矢面に立つのはやっぱり、円香なんだよね。
その後、スタッフさんから許可が出るとそれぞれのパートナーと組んで半分ルール無用のバレーを行った。

＊＊＊

今、このスタジオ内で新しく２８３プロに所属する５人とそのパートナーポケモンたちがバレーをしながら遊んでいる。
初めての撮影ということで緊張している様子が見られたから、少し肩の力が抜ければいいかなと思って提案したけど、思っていた以上に皆楽しんでる。
…しかし、彼女たちのポケモンは予想外だ。素人目に見てもレベルが高そうなのにトレーナーである彼女たちの指示にきちんと従ってバレーボールを自在に扱っている。
（…これだけの事ができるんだ。今後の彼女たちのプロデュースをしていくときはポケモンに関する仕事なんかも積極的に取りに行くことも考えておいた方がいいかもな）
「いやー、あの子たちいいですね」
「…はい。丈一郎はともかく、彼女たちまであれ程のポケモンを持っているとは予想外でした」
「ああ、そっちではなく」
「？」
「あの子たちの表情の事ですよ。さっきの撮影では緊張していた真田君と福丸さんですけど、肩の力が抜けていい表情をしています。他の３人もさっきの撮影でも十分よくできていましたが、今の表情の方がずっといいです」
…言われてみれば確かに
「…はは、本当ですね」
「まぁ、気持ちはわかりますよ。あれ程のポケモンを出されてはついつい目が行ってしまう」
「…でも、それ以上に」
「ええ、あの子たちが本当に仲がいいんでしょうね。そうでなければ、あんな自然な笑顔にはなれないですよ」
彼女たちにはできるだけユニットでの活躍の場を用意してあげたい。もちろん、ソロの仕事もあれば積極的にやって欲しいとは思うけ

ど、今のあの子たちの笑顔を色々な人に見てもらうにはユニットでの仕事の方がいいはずだ。

＊＊＊

「ふぅ、結構疲れたな」

ミロカロスの守備範囲の広さがやばい、どこに打っても返されるんだもん。キングドラも陸上とは思えない早さで動く。シャワーズはボールに正確に水鉄砲当ててくるし、マリルリは尻尾をスプリングみたい利用して大ジャンプしてアタックを決めてくる。ポケモンの力を侮っていたな

そんな中、ゲッコウガが活躍出来ずに拗ねていた。君、人間と似た体の構造してるからね、動きが早いだけで割と普通だって言ったら、こうなった。後で好きなポロックやポフィン作って機嫌とっておかないと

バレーが終わる頃には、いい感じに肩の力が抜けて無事に撮影を終えられた。

結局、最後まで俺が足を引っ張っていたが…まぁ初めてだしこんなものだろう…そう！この失敗はきっと俺の経験値となるはずだ！そう信じよう！

＊＊＊

撮影が終わり、俺たちはプロデューサーの車で２８３プロへの帰路についていた。

「皆、今日はどうだった？」

「楽しかった～」

「だね」

「うん。久しぶりにポケモンたちとも遊べたし」

「ていうか、ほとんど遊んでただけでしょう？」
「ははははは」
　それも俺たちらしいとも言えるかもな
「…そうか、初仕事だし楽しんでもらえたなら良かったよ」
「ね～プロデューサー、アイドルってこういう楽しいお仕事がいっぱいあるの～？」
「…そうだな。楽しい仕事ばかりとは言ってあげられないかな？」
「え～～～」
「？…そうなの？」
「……」
「え、えっと…」
「うん？」
「この先、アイドルをやっていけば辛いレッスンや期待外れの仕事もあるかもしれない。…だけど、今回みたいな撮影やポケモンと一緒にやれる仕事もどんどん取っていくつもりだ。だから、今日みたいな楽しい日がこれから何度でもある、俺はそう思うよ」
　…プロデューサー、この人はあの時のお兄さんのままだな。だけど、何というか
「結構遠回しな言い方するんだな、プロデューサー」
「ふふ、本当それ」
「やは～」
「……はは」
「口では何とでも言えますからね。…暫くは様子をみさせてもらいます。」
「…はは、そうか」
　こうして俺たちの２８３プロでの初仕事は、無事終了した。

ファン1号

初仕事、宣材写真を撮り終えた俺たちは簡単なお疲れ様会も兼ねて近くのファミレスで食事を取っていた。
「ら、来週から本格的にレッスン開始だね」
「そう言ってたね、プロデューサーが」
「となるとその時は、俺は完全に別行動になるな」
ちょっと寂しいな、俺もアイドルをやればよかったかな？……ないな。想像したけど絶対ない。
「え～丈先輩、雛菜たちの練習見に来てくれないの～？」
「うーん、どうかな？」
みんなは事務所内にあるレッスン室を使用する。一応何時までという決まりはないみたいだし、俺よりも遅くまで練習することもあるのかな？
「あぁ、でも俺のバトルの特訓は公共施設でやるものだから時間限られてるし、終わったら事務所まで様子見に行けると思うよ。」
特訓後にボーマンダですっ飛ばせば、そんなに遅くまではかからないと思うしね。施設を使えない日もあるだろうから、その時は練習見に行ったりできるだろうし
「でも雛菜、あんまり遅いと帰ってるかもよ～」
「自分たちの事を優先していいって。俺の為に遅くまで待たせられないしね」
この辺は、実際に活動し始めてから少しずつ探っていこう。ああ、そうだ活動と言えば
「それで、四人の活動方針とかは決まったの？」
「雛菜、まだ何も聞いてないよ～」
「わ、私も」
「まず、レッスンを通して私たちのレベルを見るつもりなんじゃないの？知らないけど」
「おーなるほど～」
「そっか。でも、まぁ何かやるって決まったら教えてくれ。必ず見に

行くから」
「…別に無理してこなくていいけど」
「俺が行きたいんだよ。なんせ俺は君たちのファン第1号なんだから絶対行くぞ！」
　ちなみに、ファン2号はプロデューサーだ。1号の座は絶対に譲らないぞ
「えへへ、丈くんがファン1号…」
「ふふ、私らデビュー前からファンができちゃった」
「…こいつが身内だからでしょう？」
「・・・・・・」
「…何？」
「いや…円香が俺の事身内って言ってくれたの初めてかもって思ったから」
　円香は透、小糸、雛菜の事はよく身内って呼んでるけど俺の事は今まで呼んでなかったはずだ。少なくとも言われた記憶がない。
「あれ？そうだっけ？私らの前だと結構言ってるような気がするけど」
「ほ、ほら、円香ちゃんって丈くんのいない時にしか、そういうこと言わないから」
「っ！」
「やは～円香先輩、顔赤い～」
「雛菜うるさい！」
　…なんだ、俺のいないところではちゃんと身内って扱いしてくれてたんだ。…うん、悪くない。
「…なに？……馬鹿っぽい顔」
　おっと、表情に出てたか？
「いーや？何でもないよ」
　何だかいつもより切れが悪いな。まぁ、顔を赤くしてる円香を見てるのは楽しいけど、からかいすぎると円香に溜まった怒りとストレスが俺に向かって発散されることになるしこの辺にしとくか
「ははは、まぁ俺だけじゃなくて皆の親たちもライブとか見に行きた

がるだろうしね。その辺の連絡はちゃんとしておかないと」
「っ！」
何だろう？可哀そうになるぐらい分かりやすく動揺してる子がいる
「小糸？どうかした？」
「っ！な、何でもないよ！」
これは１００％何か隠してるな。そもそも、小糸は本質的に嘘をつくのが向いていないみたいだ。
「「「……」」」
うん。こりゃ、俺以外の３人も小糸が何か隠してる事に気づいてるな
「そ、そういう丈くんは、どうなの？」
「……」
何かあからさまに話題を変えようとしてるな……まぁ、小糸が話したくなるまでは待ってあげるか。
「丈くんは次のポケモンリーグに出るんでしょう？」
「…まぁね。来年のポケモンリーグには出るつもりだよ」
「雛菜また応援に行ってあげる～」
「また、日程組まないとね」
「…日程が色々決まったら、まず私に教えて…浅倉に日程決めさせたら行けるものも行けなくなるから」
「…そうするよ」

ポケモンリーグは年に１度春に行われる。
まず、最初に行われるのが県予選だ。
ここでは、それぞれの所属している学校、企業や事務所などの本拠地である県でトーナメント戦を行う。一度でも敗北してしまえば、そこで終わりとなる厳しいルールで行い、上位四名のみが通過し、次のステージへと進める。
次に行われるのが、地方予選だ。
ここでは、各地方で県予選を勝ち残った者たちで、総当たり戦を行

い、北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州沖縄の８つの地方で、最も戦績のよかった四名の代表を決める。
　そして、最後に行われるのが、各地方の代表者たちによって行われるポケモンリーグ全国大会決勝だ。そこで、予選と同じくトーナメント戦を行い最後に優勝したものがポケモンリーグ〇〇の部チャンピオンの称号を手に入れることができる。

「じゃあ、それまではずっと練習だけやるつもり？」
「いや、実践感覚なくさない為に大会には参加していいって」
　今までは移動が面倒とか、お金がかかるとか、日帰りできないと学校休まないと行けないとかの理由で都内の大会しか出なかったけど、大会参加のためなら、事務所が移動費とかを出してくれるらしい。まだ、未定だが都内以外で開かれる地方の面白そうな大会やプロデュサーがお勧めする大会に参加することも検討している。
「ふふ、それ今までとあんま変わんないじゃん」
「いやいや変わるよ。参加する大会の数も増やせるし、活躍したら雑誌の取材とかもあるだろうって話だったから」
　正直、取材とかは面倒だが事務所に所属した以上、ある程度は仕方ないかなと思ってる。好きなことでお金を貰えるうえに条件もかなり緩くしてもらえたんだ。少しずつ恩は返していきたい。
「なんか…丈くんやる気だね？」
「やることが増えて嬉しいの？ミスターチャレンジャー？」
　チャンピオンからチャレンジャーに降格か…だけど、正直その方が落ち着くかも。だけど、何より嬉しくて楽しみなことがある。
「ああ、嬉しいよ。…それに、これから先は俺がみんなの事を応援できるし」
「「「！」」」
「皆は、ポケモンリーグで何度も俺の事応援に来てくれたんだ。だから、今度は俺の番だ。ライブとかには必ず駆けつけて応援しに行く」
「おー流石ファン１号だね、応援に来てくれるの？」
「もちろん、いつだって最前列で応援するよ」

何なら、学校サボってでも応援に行きたい。彼女たちの大事な仕事の時は大会とか取材とか入れないようにプロデューサーと相談しておこう。
「う～ん、丈先輩って～そんなに雛菜たちのこと好きなの？」
「ふふ、どうなの？」
「……」
「ひ、雛菜ちゃん！透ちゃんも何聞いてるの！」
全く今更、何言ってるんだこの子は、俺はずっと昔から
「もちろん、俺は皆が大好きだよ」
「ぴぇ！」
「…ふふ、やばい…それ照れるね」
「やは～♡雛菜も丈先輩大好き～♡」
「…バカ」
そう、この子たちが本当に大好きだ。この先もずっと一緒にいたい。こんな楽しい日々をずっと送りたい。その為にも頑張って結果を残さないとな。

バトル施設

俺は２８３プロダクションのソファで一人でプロデューサーを待っていた。
今、幼馴染みたちはプロデューサーと一緒に事務者のレッスン室にいる。今日から正式にレッスンが始まる為、プロデューサーとレッスントレーナーさんに挨拶しに行っている。
…俺？俺もそっちに行きたかったけど、流石に無関係な俺まで挨拶に行くのは変だし、この後、プロデューサーと一緒に今後お世話になるバトル施設へ挨拶に行くみたいだから、それまではここでスマホでも弄りながら待機してるよ。
「お待たせ、丈一郎」
「ううん、そんなには待ってないよプロデューサー」
…何かデートの待ちあわせみたいなこと言ってるな。
「早速、移動しよう。車出すから下で待っててくれ」
そう言うと、プロデューサーは部屋を出て行く。
俺が気にする事じゃないかもしれないけど、プロデューサー俺や幼馴染みだけじゃなく、他のユニットの担当もしてるんだよな。一人でイルミネーションスターズ、アンティーカ、放課後クライマックスガールズ、アルストロメリア、ストレイライト、そして俺たちの担当もしているとか…過労で倒れたりしないだろうな？

＊＊＊

現在、プロデューサーが用意してくれた事務所の車で２８３プロの契約したバトル施設までの移動中だ。
プロデューサーと二人だけだし、いい機会だから聞きたかったことを聞いておこうかな
「…ああ、そうだプロデューサー」
「どうした？」
「今更なんだけど、バトルのやり方とか変えなくて本当にいいの？」

「え？どうしたんだ突然」
「いや、一応ね…できたら、これは辞めてくれって意見があるなら聞いておこうかと思って」
透がアイドルになるって言った時にも事務所の事は調べたけど、実際に事務所の中を見て本当にアットホームな所なんだと感じた。
俺は何を言われようと構わないけど、俺のせいで２８３プロのイメージを落としてしまったら流石に少し申し訳ない。
「…はは、そんな事気にしていたのか。じゃあ、変化技を使わないでくれって頼んだらやってくれるのか」
「自分から切り出しておいてなんだけど、それは嫌だ」
「だったら、いいよ」
「…でも、俺結構、引くような戦法使ったりもするよ。具体的には相手を毒状態にしてからひたすら守ったりとか、相手の使用ポケモンが一体になったら道連れ使ってバトルを終わらせたりとか」
「…お、おう」
あ、ちょっと引いたな。
…結構前だけどフルバトルで相手が一体だけになった時に猛毒状態にして苦しめてから道連れでバトル終わらせたときは、軽くバッシングあったんだよな。あれは流石に良くなかったか。
「事務所のイメージ的に大丈夫？俺以外は全員アイドルが所属してるわけだし」
「……」
「これだけは駄目っていうのあれば、少しくらいは配慮もするけど」
「…必要ないよ」
「…本当にいいの？」
「ああ、もちろんだ」
…まぁ、そういうなら
「…それにな」
「？」
「丈一郎はちょっと自分の事を過小評価してると思うぞ」
過小評価？俺が？

「…そうかな？俺、結構バトルには自信あるけど」
「そっちじゃなくて、人気の方だよ」
「人気？」
「そうだ。丈一郎のバトルには確かに反発してる人もいるけど、それ以上に応援してくれてるファンが大勢いるんだ」
「……」
「その内、嫌でもわかると思うよ」
「…まぁ、プロデューサーがそう言うなら信じてみるよ」
「…そうか。…おっ見えてきたぞ、あそこだ」
「おー」
プロデューサーの車で移動すること数十分、目的地が見えてきた。
「あれが、丈一郎が今後お世話になるポケモンバトル専用のトレーニング施設、バトルスタジアムだ」
プロデューサーに言われ、前方を見ると大きなスタジアムが見えてくる。ポケモンリーグの決勝戦を行った東京ドーム程ではないけど結構大きい施設だな。あれなら、結構面白い設備とかもあるかも
「いいね、早く行こうプロデューサー！」
「はは、落ち着いて、まずは施設のオーナーさんに挨拶してからな」

＊＊＊

車を駐車場に止め、施設の入り口まで移動すると、初老の男性が俺たちを迎えてくれた
「２８３さん、お待ちしてましたよ」
「本日はお時間を作っていただきありがとうございます。…丈一郎、この方がこの施設のオーナーさんだ」
え？わざわざ、オーナーさんが出迎えてくれるのか？
「初めまして。真田丈一郎と申します。本日はよろしくお願いします」
「知っていますよ。真田選手ですね。前回のポケモンリーグは私も見ていました」

やっぱり、結構色んな人が見てるんだな。…さて、この人は説教ないしありがたいアドバイスをしてくるタイプかな？
「見事なバトルでした」
お？
「世間では色々な意見がありますが、私はこの施設のオーナーとなり、色々なトレーナーのバトルを見てきました。ポケモンバトルにはトレーナーとそのポケモンに適したバトルがある。…だから、世間の一部の声など気にせず、あなたのやりたいバトルを見せてください。一人のポケモンバトルのファンとしてのそれを願っています」
「…ありがとうございます」
「おっと、立ち話が長くなってしまい申し訳ありません。応接室まで案内いたします」
「はい、お願いします」
…いい人だな。あの人
「…な。丈一郎の事を応援してくれてる人はいっぱいいるんだよ」
「…うん」
やれやれ、結局プロデューサーの思い通りに進んでる気がするな

＊＊＊

「それでは、まずは施設の説明をさせて頂きます」
「よろしくお願いします」
「お願いします。オーナーさん」
俺たちは応接室まで移動するとオーナーさんにこのバトルスタジアムの設備について説明してもらっていた。
「まず、このバトルスタジアムでは、通常のバトルフィールドの他に水のフィールド、岩のフィールド、氷のフィールドといった複数のバトルフィールドを使用したバトルが行えます。また、トレーニング用のスペースやポケモンの回復施設なども当然用意されてあります」
「四つのバトルフィールドですか。より実践的な特訓ができそうですね」

「はい。ただし、通常のバトルフィールドは基本的に開放していますが、それ以外のフィールドを使用されたい場合は事前に予約をしていただく必要があります」
　あ、やっぱり予約は必要か
「ですが、２８３プロダクションさんとは年間契約を結ばせていただきますので、優先的な予約が可能となります」
　凄いな、年間契約って結構お金がかかる筈だけど。…バトルは変える必要ないって言ってくれたし、それに見合う位の結果はちゃんと残さないとな。
「大まかな施設の説明は異常となります。…それでは、バトルフィールドやトレーニングスペースなどを見学されていきますか？」
「あ、是非お願いします」

＊＊＊

　その後、施設内をオーナーさんに案内してもらったけど、ここは本当に凄い。今まで、俺が個人的に使っていたバトル用の施設には通常のバトルフィールドしかなかったし、正直ここことは施設のレベルが比べ物にならない。水、岩、氷のフィールドを使っての特訓は今後参加することになるかもしれない大会の時なんかに役に立ちそうだ。
「施設はどうだった丈一郎？」
「良い所だったよ。オーナーさんもいい人そうだし」
「はは、そうか。予約が必要なフィールドを使いたいときは事前に相談してくれ、こっちの方で日程調整して予約入れておくから」
「そうなの？ありがとう」
　何から何までやってもらってなんか悪いな
「あ、事務所の皆のレッスンってもう終わった？」
「いや、まだやってると思うけど？」
「じゃあ、差し入れでも買っていきたいから、ちょっと寄り道してもらっていいかな？」

＊＊＊

２８３プロに戻ると、俺は幼馴染みたちがいるレッスン室に向かった。こっそり、部屋の外からレッスン室をのぞいてみるとそこにいたのは

「ふぃ～～」

「雛菜疲れた～～」

レッスン室の床に仰向けに倒れている透と雛菜だった。

「と、透ちゃん！雛菜ちゃんも駄目だよ床に寝たら汗が床についちゃう！」

「…小糸ほっといていいから。…浅倉、雛菜、ちゃんと二人で床拭いておいて」

あらら、大分お疲れご様子だ。まぁ、レッスンも終わってるみたいだし、入ってもいいだろう

ガチャ

「よ、お疲れー！」

「あ、丈一郎」

「あ～～♡丈一郎先輩～♡」

「ほら、差し入れのアイス持ってきたら二人とも起きて」

「わぁ、丈くんありがとう」

「…ありがとう」

さっき寄り道して買ってきたけど、正解だったな。皆、結構汗かいてるみたいだし我先に…あれ？雛菜辺りが我先に貰いに来ると思ってたのに皆でレッスン室の隅に置いてあったバッグに手を入れてごそごそと何かを探している

「…あれ？いらないの？」

「ううん。いるよ」

「ちょ、ちょっと待っててね」

「……すぐ行くから」

「シューしてから行くから待っててね～」
　ああ、成程ね、そういう事か。やっぱ、女の子はそういうの気にするんだな。
　スプレーをした４人がアイスを受け取りに来た。
「雛菜、チョコアイスがいい～」
「ちょっと、勝手に取らないで」
「え～～～」
「バニラ、チョコ、苺、抹茶２つずつ買ってきたから、喧嘩すんなー」
「おー、あざーっす」
「じゃ、じゃあ私苺で！」
「じゃあ、私も」
　俺も余り物から一つ食べよう。残りは事務所の冷蔵庫にでも入れておこうかな。確か、ご自由にお取りくださいとか書いておけばいいんだったけ？後でプロデューサーに聞いておこう。
「それでレッスン初日はどうだった？」
「雛菜疲れた～」
「初日だから、軽めだって言ってたでしょう」
「あー、言ってたかも」
「…でも、皆ちゃんとできてたよ」
「…小糸もでしょう」
「…うん、でも、もっと頑張らないと」
　うーん。小糸はちょっと自信なさげだよな。…ああ、ひょっとしてプロデューサーには俺もこんな風に見えてたのか？だったら、確かに少し過小評価って表現も分かるかも
「小糸はよく頑張ってるよ」
　俺はそう言いながら小糸の頭に手を置き、撫でる。
「…で、でも」
「今日は初日なんだし、そんなに焦らなくても大丈夫だよ」
「…うん」
　…ふぅ、これから先も少し気にしておいた方がいいかもな
「丈せんぱ～い！」

「うん？」
「雛菜も頑張った～」
…全く、しょうがないな
「はいはい、雛菜も頑張ったなー」
「やは～～～♡」
「丈一郎ー、私と樋口も頑張ったー」
「ちょっと、浅倉、巻き込まないで」
「よし！じゃあ、次は二人だな」
「ばちこーい」
「ちょ、ちょっと私はいいから！」
この後、何とか円香の許可をとって、透と円香の頭も撫でていたけど、その場面をプロデューサーに目撃されて円香がめちゃくちゃ不機嫌になり、家に着くまで口きいてくれませんでした。

登校

「はぁ、はぁ、はぁ」
…過去にここまで追い込まれたことはないかもしれない…だけど、諦めない。
勝率が０．０１％でもあるなら、それで充分じゃないか。勝ち目が低いことは諦めていい理由にはならない。
下を向くな、前を見ろ、自分を信じるんだ！

ピッ（信号が切り替わる音）

・・・・・・・・・・・・・・ふぅ
あぁ、もう無理間に合わない、遅刻決定だ。ここからは歩いて行こう。
いやーやらかしたなー
今日も何時もの様に朝練をしていたんだけど、ちょっと調子が良かったから、色々試していたら何時の間にかこんな時間になっていた。
ぐうーー
「…腹減ったな」
結局、朝飯食べ損ねたし、どっかでコンビニ寄っていこうかな。
え？急いで学校に行けって？だって、もう遅刻しちゃったんだし、今更走っても間に合わないんじゃあ意味ないじゃん。だったら、食べ損ねた朝食食べながらゆっくり行った方がお得に感じるよね

タタッタタッタタッ
そんな事を考えながら歩いていると後ろから誰かが走ってくる音がする。
「丈せんぱーい！」
あー雛菜か。あの子、本当に遅刻ばっかりだな
「おー、雛菜おは「どーーーん！」ぶべ」

振り返って挨拶をしようとすると、雛菜は俺に向かって思いっきり飛び込んでくる。何とか雛菜をキャッチするとその場で二回転程して勢いを受け流す。
「やは～ナイスキャッチ！」
「こらこら、危ないぞ」
本当にちゃんとキャッチできなかったら、怪我してるかもしれないぞ
「え～だって丈先輩はちゃんと雛菜のこと受け止めてくれるでしょ～」
…これも一つの信頼が出来ていると思えばいいのか、それとも甘えられてるだけなのか
…どっちにしろ嬉しいと思ってる自分は割とやばいのかもしれない。
「まぁ、いいけど。あんまり、危ないことはしないようにな」
まぁ、この忠告にあまり意味はないかもしれないけど念の為ね。
「え～平気だよ～」
そう言うと、雛菜は俺から離れ悪戯っぽい顔をしながら言う。
「だって、雛菜は誰にでも抱きついたりしないも～ん」
「…そっか」
「そうだよ～丈先輩だから抱きついたんだ～」
…やばい、何か嬉しいような恥ずかしいような上手く言えない感情になってきた
「ふふふ～」
雛菜はニヤニヤしながら、こっち見てる。なんか俺の感情見透かされてないか？
「…雛菜って結構意地悪だよね」
「え～雛菜こんなに優しいのに～？」
昔からそうだが、やっぱり、幼馴染み最強の称号は彼女のものだ。雛菜の前では高校生チャンピオンの称号も霞んでくるな。
「…まぁいいや。コンビニ寄っていくけど雛菜はどうする？」
「雛菜もいく～おやつ買っていきた～い」

よし、じゃあ行くか。

＊＊＊

コンビニで俺は朝食用のおにぎりと雛菜のおやつを買わされました。

…また、やってしまった。いや、別にお金はいいんだけど、雛菜に上目遣いで頼まれると結局ＯＫしちゃうんだよね。まいったなー円香からあんまり雛菜を甘やかすなって言われてるのに…また、円香に怒られるな。

…まぁ、過ぎたことは仕方ないか。朝飯食べながらゆっくり学校まで行こう。

「あ、そうだ雛菜」

「うん～？」

「ツイスタのやり方教えてくれない？」

「え？丈先輩、ツイスタやるの～？」

「ああ、プロデューサーにやってみないかって言われてさ、雛菜が詳しいから聞いたらどうだって」

「いいよ～雛菜に任せて～」

＊＊＊

「…これでいいのか？」

「うん～」

雛菜に説明されて数分後、ツイスタのアプリのダウンロード、アカウントの作成まで行えた。

「アイコンはどうしようか？」

「好きな物でいいと思うよ～、雛菜はユアクマちゃんだし」

「ああ、雛菜の好きなガラルヤドキングみたいな設定のある人形か」

「もぉ～～～ヤドキングじゃなくてユアクマちゃんだってば～～！」

ユアクマとは、雛菜が好きな人形だ。見た目的には人間が熊の服を

着ている様な姿をしている。
「いや、だってなー」
以前、興味本位でどっちが本体なのかって聞いたら雛菜も詳しくは知らなかった。
それで、疑問のままだと気持ち悪いから開発会社にまで問い合わせをしてみた、帰ってきた返答を大雑把に纏めると
『ユアクマちゃんの正体は謎であり、一説によると人間が熊の着ぐるを着た際に、不思議な現象が起こり着ぐるみが知能を持ち人間の体を操っているのかもしれない』らしい。
この説明を聞いて、素直に怖いと思ったが、それと同時にあるポケモンの事を思い出した。
それは、イギリスで見つかったリージョンフォーム（ポケモンが住む地方の環境に適応した姿）したヤドキングの事で通称：ガラルヤドキングだ。
ガラルヤドキング・・・進化のショックと毒素によって、シェルダーの知能が上がりまくりヤドキングを操るようになった。
シェルダーは元々、生物だし知能もあったから前提が違うとは思うけど、何か本質的には似てる気がする。
「…やっぱ、ガラルヤドキングじゃん」
「だから～～それは一説なの！ユアクマちゃんは正体が人なのか熊ちゃんなのか謎に包まれた可愛い存在なの！」
随分、フワッとした説明だな。
「いい丈先輩！そもそもユアクマちゃんはね～……」
あーまずい。雛菜のユアクマちゃん講座が始まってしまった。
…こうなると長いんだよなー
「もぉ～丈先輩！ちゃんと聞いてるの～？」
「…はいはい、聞いてますよ」

＊＊＊

雛菜によるユアクマちゃん講座は数十分程で終了した。

…もう二度とガラルヤドキングとは呼ばないように注意しないといけないな。
「そういえば～」
「？」
「丈先輩の遅刻って久しぶりだよね～」
ああ、その事か。まぁ、雛菜はいつもこの時間だから知らないか
「…それが…実はそうでもないんだ」
「？」
「今までは、遅刻しそうになるとボーマンダに乗って学校の近くまで行ってたんだけど…」
「…ボーマンダ、どうかしたの～？」
俺からの雰囲気で何かあったと察知して雛菜はいつもより真剣な表情で聞いてくる
「…実は、今まで遅刻しそうになるたびにボーマンダに乗って近くまで登校していたことがばれて…学校から、次ポケモンで登校したら停学処分にするって通達されてるんだ」
「え～～厳しい～～」
「だろう！」
「そうだよ～最初からそんなに厳しくする必要ないのに～」
「？いや、初めてではないよ」
「え？…何回位注意されたの？」
「えーと、月に１０回位かな？」
全く、たかが月に１０回位しかボーマンダに頼ってないのに、いや確かに前々から注意はされていたけど、そこまでしなくてもいいじゃないか！
「……」
…何だろう？雛菜が今まで見たことない程のジト目でこっちをみている気がする。
「…な、何かな？」
「ううん～丈先輩って、やっぱり馬鹿だな～って」
「うぐ！」

そういうストレートな罵声は結構きついからやめて欲しいな。
「雛菜も人の事言えないけど、そんなに遅刻してたら留年しちゃうよ～」
「…留年か」
透たちと別の学年か…ちょっと嫌かな？てあれ？待てよ…
「…そうすれば、雛菜たちと同級生か」
「！やは～それいいかも～」
「そうなったら、先輩呼びは終わりかな」
「やは～丈く～ん！」
雛菜はそう言いながら、再び俺に飛び込んでくる
「こらー危ないってば」
「あは～」
全く俺が本気で注意しなければ辞めないんだろうな。いや無理だな、俺がこの状態を楽しんでる以上止めても無駄だ。
…まあ、いいや。俺がちゃんと受け止めればいいだけか、そうすれば、雛菜は怪我をしないで済むわけだし
「よし！」
「どうしたの～」
「この先もずっと雛菜の全てを受け止める覚悟ができた所だよ」
「…え？」
…何だ？雛菜の顔がさっきより赤くなってる様な気がする。
「…雛菜？」
「や、やは～なんでもな～い」
「…まぁ、いいか。でも俺が留年しても雛菜が留年したら結局先輩後輩のままだよね」
「それなら雛菜進級できる様に頑張るよ～」
「そっかー頑張れー」
「だから丈先輩も頑張って留年してね～」
頑張って留年してね～って斬新な言葉だな。普通逆だろ。まぁ、冗談抜きにこのまま遅刻が連発してテストでやばい点取ったら本気で留年もありえるかも

…さっきは勢いで留年してもいいかもみたいなこと言ったけど、冷静に考えると駄目だな。流石に親も怒るだろうし、円香にちくちく小言を言われ、小糸に涙目で怒られる未来が見えてくる。…でもなぁ

「ふ～んふんふん」

鼻歌歌いながら、そんな未来を楽しみにしてる雛菜を見るとそれはそれでありかもなんて思えてくる。

…よし、決めた！何にも考えないでいつも通り暮らしていこう。その結果留年だったらそれはそれで楽しみが増えたって事にしよう！

「…そんな訳で留年もいいかなって思ってるんだけど、どう思う？」

「は？」

「ふざけてるの？」

「…ごめんなさい」

休み時間に世間話し程度の感覚で今朝の事を二人に話したら、めちゃくちゃ怖い顔で睨まれました。

ごめん、雛菜。また、おやつ買ってあげるから留年の件は無かったことにして下さい

ツイスタ

いつものように朝のトレーニングを終えた後、俺は自宅に戻り自室でスマホを弄っていた。今日は、休日で学校もないし、のんびりするつもりだ。

プロデューサーに進められて始めたツイスタだが、今は割と楽しんでいる。アンチもそこそこいるけど、いい反応を見せてくれる人も結構いて楽しい。

「……」

何だ、またか。最近、ｄｍを送ってくる人が多いんだよな。別に嫌ではないけど…

「…丈一郎？」

最初の頃、調子に乗ってポケモンに関する質問に答えていたら、いつの間にかその手の質問ならＯＫみたいな流れができてしまったみたいだ。

「……」

「おーい」

「…うん？あれ、透？いつの間に来たんだ？」

スマホから目を離すといつの間にか透が来ていた。

部屋に入って、目の前に来るまで気付かないって、いくら何でも夢中になりすぎだったかもな。

「今、来た。…ところで何やってたの？」

「あー、ちょっとメールの返事してた」

「ふーん。樋口？」

「いや」

「じゃあ、小糸ちゃん？それとも雛菜？」

「違う」

「え？じゃあ、プロデューサー？」

「残念」

「…もう丈一郎が連絡する相手いないじゃん」

「…君も結構失礼だね」

確かに俺のスマホの連絡先にはそのメンバー位しかいないけども…ちょっと悲しくなってきたな。
「ふふ、ごめんごめん」
「…まぁ、いいよ。俺も君たちと連絡さえ取れれば満足だし」
「えへへ…そっか」
まぁ、実際の所、透、円香、小糸、雛菜としか連絡とってないし、後は両親とプロデューサーと連絡取れればそれで問題ないんだよね。
「で？誰とメールしてるの？」
…あれ？話しそことに戻すの？
「うーん？内緒」
「誰とメールしてるの？」
「内緒だって」
「誰とメールしてるの？」
「いや…だから」
「誰とメールしてるの？」
「……」
うーむ？ひょっとしてこれ、俺がちゃんと答えるまで話進まないのかな。
「誰とメールしてるの？」
「あー分かったから…実は女の人から相談受けてるんだ」
「……女の人？」
「…どうかした？」
何だろう？凄い間があったし、透の顔色がさっきより良くないように感じる。
体調でも悪いのかな？
「…ううん。何でもない」
「そう？」
「うん。それでさ、その…」
「うん？」
「メールの相手、私の知ってる人？」
「知らないと思う」

「…そうなんだ・・・・どこであったの？」
「いや？会ったことはないけど？」
「え？」
「え？」
　…うん？何だろう？
　会話がかみ合ってない様な気がする
「…彼女じゃないの？」
「…彼女な訳ないじゃん」
　何だ、俺に彼女でもできたと勘違いしてたのか
「そもそも、俺に彼女なんて出来るわけないだろう？」
「でも丈一郎って、結構モテるし」
　まぁ、中学、高校でチャンピオンになったわけだし、ステータス目当てで告白してくる奴は何人かいたけど
「…やっぱり、無理だよ」
「なんで？」
「だって、彼女作ったらお前たち４人よりも優先しなくちゃいけないだろ。俺、お前たちより大切にしたいって思える女子に今まで会ったことないし」
「・・・・・・・・・そっか」
「うん、そうだ」
「ふふ」
　何だろう？何か凄い嬉しそうな顔してる。
「…じゃあさ」
「ひぃっ！」
　え！何だ！さっきまで笑顔だったのに、突然何かを思い出したのか無表情になって、こちらを睨んでいる。
「そんな何よりも大切にしたい幼馴染みの一人の私をほったらかしにしてメールしてる相手って誰？」
「怖い怖いよ！その無表情辞めて！そういうことで怒るのは円香の役目じゃなかったか？」
「…そうだね。じゃあ、樋口に連絡するから」

「待って！それは辞めて！」
　な、何する気だ、この子は！この手の事が円香にバレたら俺が一体どんな目に合うと思ってるんだ！
「何？問題あるの？…それともさっきの言葉は嘘なの？」
「いやいやいや！本当だから！」
「じゃあ、話して」
「あ、ああ。最近、プロデューサーに言われてツイスタを始めたんだ」
「知ってる」
「そ、それで、そこに男女問わず質問がｄｍで来るんだよ。さっきのはその返事をしてて」
「…質問ってプライベートなこと？」
「そういうのもあるけどそれは無視してる。答えてるのはポケモンに関する質問とかだけだよ」
「ポケモンの事？どんなやつ？」
「あー、そうだな例えば」
　Ｑ：私のミツハニーなんですけどいつまでたっても進化しません。何か特別な道具が必要なんですか？（画像付き）
　Ａ：ミツハニーは雌しか進化できません。残念ながら、あなたのミツハニーは雄なので進化できません
　Ｑ：タマンタを進化させたいんですが、なかなか進化しません。どうしたらいいですか？
　Ａ：まず、テッポウオをゲットしてください。手持ちにテッポウオを入れた状態でタマンタのレベルを上げてください
「こんな感じのどうすれば進化できるのかっていう質問が多いかな」
「へー皆、自分のポケモンの進化方法とか知らないんだ？」
「そんなもんだと思うよ。透だって俺が偶然、進化の方法が書かれた論文見なかったらヒンバスの進化方法知らないままだったかも」
「あー、かもね」
　実際、自分のポケモンの生態や進化方法について詳しく知らない人は多い。一緒に生活をするだけなら、そのポケモンに必要な食事の用意だけしておけば、寝床はモンスターボールに戻すだけで済むから

ね。
「俺としては、もう少しバトルに関する質問とか来てほしかったんだけど」
「あんまり来ないの？」
「ああ。そっち方面はまだアンチも多いかな？」
「…そっか」
　おっと、ちょっとネガティブな会話になっちゃったか。透も少し暗い顔になってるし
「そんな顔するなって、アンチなんかは好きに言わせておけばいいんだよ」
「…でも、ちゃんと結果も出してるのに」
「まぁ、それは下位リーグだしね」
「そうだけどさ」
「それにさプロで結果を出せば、文句を言う奴もいなくなると思うよ」
　まぁ、そうなった場合、アンチがいなくなると言うより、嫌だけど認めざる得ないって状況に変わるっていうのが正しいかもしれないな。
　俺に対してアンチ意見を出してる奴の主張は主に
『小手先の技ばかり使ってもプロの世界で通用しない』
　って感じだ。
　プロで結果を出せば、その手の文句をつけてくる連中も黙るしかない…はずだ！
「…まぁ、誰かの意見や世間の風潮に合わせてバトルしても楽しくないしね、俺は俺のやり方で頂点を目指すよ」
「…うん。丈一郎はそれでいいと思うよ」
「それにさ」
「？」
「透との約束もあるしね」
「え？」
「あれ？覚えてない？ほら、子供の時にジャングルジムでした約束？」
　思い返してみると、随分前にした約束だ。

俺と透は、偶然出会ったお兄さん、プロデューサーとジャングルジムで遊んだ。
当時の俺たちには、そのジャングルジムは高くなかなか登ることが出来なかったが、二人で協力して何とか頂上まで登り切ることができた。
その時の達成感と見た景色は今でも覚えてる。その時に透としたポケモンバトルでチャンピオンになり、てっぺんの景色を透たちに見せるっていう約束だ。
「…覚えてたの？」
「忘れる訳ないだろう？あれは、俺にとっては原点みたいなもんだし」
「…ふふ、そっか。…覚えててくれたんだ」
「…透？何か顔が火傷状態みたいに赤いけど大丈夫か？」
「あ、うん。大丈夫だから、すぐ回復するから近づかないで」
「いや、でも」
「本当！大丈夫だから！」
「…はい」
程なくして、透は何時もの状態に戻ったけど、何だったんだ？
まぁ、本人に聞いても詳しくは教えてくれなそうだし、体調不良ってわけじゃなさそうだしいいか。
「…まぁ、いいや。それより透ちょっとミロカロス見せてくれない？」
「え、何で？」
「ツイスタにこんなの来てた」
『以前、誕生日に娘にせがまれてポケモンのタマゴをプレゼントしたのですが、そのタマゴが孵化してヒンバスというポケモンが生まれました。娘は初めてのポケモンという事もあり気に入っているようなのですが、正直あまり見た目のいいポケモンではないですし、学校などで虐められないか心配です。ヒンバスは何か魅力になる所はないですか？』
「あーこういうのあるよね」
「まぁ、幼稚園や小学生辺りだと見た目だけで判断されたりするからな」

実際、俺たちの時もそうだったな。俺たちが子供の頃も卵からかえったポケモンがストライクだとかアブソルみたいな見た目かっこよくて強そうなポケモンだとそれだけで偉そうな態度取ってくるんだよな。
「透や円香も当時のヒンバスやタッツーのことで弄られてたよな」
「…そうだっけ？」
「覚えてないんかい」
まぁ、こいつはそうだよな。当時からいつも飄々としてたし、円香は少し気にしてたみたいだけど
「まぁ、そんな訳でこの人の心配を解消するためにもミロカロスの写真と進化の方法を教えてあげようと思ってさ」
「うん、いいよ」
「じゃあ、外でやろうか。俺の部屋じゃ、ミロカロスも窮屈だろうし」
「りょーかい」

＊＊＊

そんな訳でミロカロスの撮影の為に外に出たんだけど…
「ミロカロスって改めてみると結構大きいな」
「うん。確か6メートル位だっけ？」
「ああ、確かそれくらいだったと思う」
このサイズだと家の中とかじゃあ、あんまり自由にできないだろうな。
「全身を映したいし、少し、離れたところから撮るよ」
「大丈夫？それ以上、下がると道路に出ちゃわない？」
うーん。確かに…仕方ないな、あいつに頼もう
「出てきてくれ」
俺はそう言い、腰のモンスターボールから一体のポケモンを出す。
「ロト！」
小さな丸い身体にとんがった頭頂部を持つ、プラズマポケモンのロトムだ。

「ロトム、スマホに入ってくれ」
「ロト！」
　俺の指示を聞くとロトムは俺のスマホに入っていく。ロトムはあらゆる電子機器の中に潜り込んで操作する事が出来るという能力を持っている為、こうしてスマホに入り込むことも可能だ。
「それじゃあ、ミロカロスの全体を映すように撮ってくれ」
　ロトムは俺が指示を出すと、宙に浮きミロカロスの全体が映る的確なポジションを探し出し、撮影を行っていく。
「便利だね。ロトムって」
「まぁな。フォルムを変えれば、色んな相手に対応できるし、変化技も結構あるから、バトルでも使いやすいよ」
　そう、俺が普段カバンに入れて持ち歩いているロトムのカタログを使用すれば、タイプの変更も可能だ。相手の情報が分かっていれば、対戦前に有利なタイプに変更してバトルもできる。
　透とそんな話をしていると、ロトムが写真撮影を終えて、こちらにやってくる。…うん、いい写真だ。
「さてと、後はこれを送ればＯＫだな」
「ポロックやポフィンの作り方とかも教えるの？」
「さすがに、文章でそれを伝えるのは無理だから、どうやったら進化するのかだけ教えておくよ。そこから、頑張って進化させるのも楽しみの一つだと思うしね」
「…そっか。ここからが大変だね」
「でも、楽しかったろ？ポロックやポフィン作り」
　そう言うと、透は過去の事を思い出したのか少し笑顔になる。
「うん。いっぱい失敗したけど楽しかった」
「ああ、俺たちも楽しんでたよ」
「ふふ、覚えてる？色々試してたら変な味のポロックができて、ヒンバスやケロマツが物凄い表情になったりしてさ」
「あったな、そんな事。失敗したの食べさせたら、その日一日中無視されたりしてさ…」
　透との過去の思い出話を終えると、俺はツイスタに写真と多少のア

ドバイスを書いて、返信する。
　まぁ、ポロックやポフィンを作って育てるとなると結構な時間はかかるけど、希望はある。それに綺麗な鱗という珍しい道具を手に入れることができれば、交換でも進化は可能だ。これで、あの親御さんの心配も少しは解消されればいいけど。
　…ああ、そうだ。
「透、折角だし、ミロカロスと一緒の写真撮っていい？」
「いいけど、何で？」
「うん、いい機会だから俺のツイスタに皆の事宣伝しておこうと思って」
「宣伝？」
「俺の一押しのアイドルグループだしね」
「おーデビュー前だけどやっちゃう？」
「その内デビューするだろう？」
「それもそっか。じゃあ、皆も呼ぶ？」
「もちろん、言ったろ一押しのアイドルグループだって」
「りょーかい」
　その後、透に召集されて全員集合すると彼女たちと彼女たちの相棒たちを纏めてロトムに撮影してもらった。撮った写真はツイスタに投稿して、その際に『同期で２８３プロに入ったデビュー前のアイドルたちなのでデビューしたら応援してあげて』とコメントも付けておいた。
　後日、プロデューサーにこの手の事をするときには事前に許可をとる様にと軽くお説教をされることになるが、この時は、まだ知らなかった。

横浜カップ（前編）

「…おーい…」
…誰かが…呼んでる？
「…おーい…丈一郎ー」
…なんだよ、うるさいな
「・・・・・・・・・」
「丈一郎！」
「…うん？あれ、寝てた？」
「ああ、ぐっすりだったよ」
…ああ、色々思い出してきた。プロデューサーに車で目的地まで送ってもらってたけど、車に長時間乗ってたら何か眠くなって、そのまま寝たんだった。
「ごめん、ごめん。なんか用だった？」
「いや、もうすぐ到着するって伝えたかっただけだよ」
プロデューサーに言われ、車の外の景色を見ると横浜スタジアム、通称「ハマスタ」が見えてきた。
「あーもう着いたんだ」
「ああ、あそこが目的地だ。…丈一郎のプロデビュー戦が行われる場所だよ」
現在、俺たちは神奈川県横浜市にある横浜スタジアム、通称「ハマスタ」まで来ていた。
先ほど、プロデューサーが言っていたように、ここで俺のプロになって初の大会に参加するためだ。

＊＊＊

遡ること数日前、俺はプロデューサーに呼ばれ、皆と一緒に２８３プロに来ていた。
「…えっと、呼んだのは丈一郎だけなんだけど？」
「まぁ、いいじゃん。大事な話って言ってたけど、どうせ後で皆にも伝

えるんだし」
「それとも、私たちに伝えられたら困る内容なんですか？」
「いや、そういうわけじゃないけど」
「だったら、いいじゃん。ねー」
「ねー」
「ね～」
「ご、ごめんなさい。…駄目でした？」
「い、いや問題ないよ」
　小糸の涙目によってプロデューサーの攻撃と特攻が一段下がったな。
　まぁ、仕方ない。俺も含めて、この場に小糸の涙目に勝てるやつは一人もいないし
「…じゃあ、改めて、丈一郎に大会からの招待状が届いたんだ」
「招待状？どこからの？」
「神奈川県の横浜スタジアムで開かれる大会からだよ。この大会は年に一度だけ開かれるもので神奈川県ではポケモンリーグの予選に次ぐ大きい大会だ」
「おぉ、何か凄そうだ」
「実際、凄いんだよ。…デビュー戦に相応しい舞台を探していたんだけど、まさか向こうから誘いが来るなんてな」
「それって、珍しいの？」
「俺も詳しくないけど、過去にその大会で優勝経験とかがない限りは珍しいらしいよ。…ただ、丈一郎がプロになったっていう宣伝はしてあったから、興味を持ってもらえてのかもな」
「じゃ、じゃあ、プロデューサーさんのお陰ですね」
「…恩着せがましいですね」
「い、いや、そんなつもりじゃあ…」
　うーん、円香の中でプロデューサーの好感度はまだまだ低そうだな。…いや、好感度が上がっても態度は変わんないかもな
「はいはい、分かってるから大丈夫だよ」
「そ、そうか、それでどうする？参加するか？」

「もちろん。面白そうだ」
「いいね。応援しに行こっか？」
「雛菜も応援に行く～」
「じゃ、じゃあ皆で行こう！」
「…まぁ、いいけど」
「おぉ！皆の応援があれば優勝間違いなしだな！」
「…ごめん。四人はその日レッスンだ」
「「「「えー」」」」
「こんな時だけ綺麗にハモるんじゃない！」
えー、何か一気にテンション下がってきたなぁ

＊＊＊

そんな訳で今回はプロデューサーと二人でこの横浜まで来ている。
まぁ、俺の為にレッスンサボらすわけにはいかないから、いいんだけどさー
「…丈一郎、まだ拗ねてるのか？」
「別に拗ねてはないけど…ちょっとテンションがね」
「じゃあ、テンションが上がるかもしれない情報を教えておくよ」
テンションが上がるかもしれない情報？
「何？優勝賞金のこと？」
「いや、違うけど…優勝賞金狙ってるのか？」
当然ではあるが大会で優勝すれば賞金が貰える、しかも年に一度の大会という事もあり、結構な金額だ。
さらに今回は招待選手という事で参加するだけでそこそこのお金も貰える。これもプロの特権だな。優勝できなくても、俺の財布は大分潤うことは決定している。
「もちろん賞金は欲しいよ。今後もポケモンたちや幼馴染たちと楽しい生活を送るためにもお金があって困ることはないからね」
「そ、そうか」
ちゃんと稼げるところではしっかり稼いでおかないとな。

「それで、テンション上がるかもしれない情報ってなに？」
「ああ、この大会には毎年、あるトレーナーが参加しているんだけどそのトレーナーはプロになってから２０年以上のベテランで、しかもプロリーグの県大会で優勝したこともある実力者なんだ」
　おぉ！県大会での優勝経験ありか。ならかなりの強さだ。
「へーなんて人？」
「確か、谷阿坤って名前の人だよ」
「…そっか」
　谷阿坤…知らない名前だな。
　まぁ、俺自身そんなにプロ選手に詳しいわけじゃない。それこそ四天王やチャンピオンクラスじゃないと名前聞いてもさっぱりだ。
「あれ？興味なかったか？」
「いや、そんなことはないよ」
　俺は全く知らない選手だけど、プロでそれなりに活躍しているなら今の俺の実力がプロで通用するのか試すにはちょうどいい相手かもしれない。
「丈一郎、そろそろ到着だ」
「うーい」
　プロデューサーと話している内に目的地に到着していた。谷阿坤選手について軽くネットで調べようと思っていたけど、後にするか。
「ちょっと早く着いたな」
「だったら、ちょっと散歩してきてもいい？」
　ずっと座っていたというか寝ていたせいで体がちょっとだるい。少し、歩いてスッキリしておきたいな。
「うーん…じゃあ、３０分だけならいいよ」
「りょーかい。いってきまーす」
　３０分となるとあんまり、遠くまではいけないな。スタジアム周りをぐるっとゆっくり一周してみるかな

＊＊＊

「真田選手！サインください！」
「僕にもお願いします！」
散歩に出て１０分程で俺は俺のファンだと言う人たちに囲まれていた。
あ、あれ？おかしいな？何でこうなってるんだっけ？

遡ること１０分程前のこと

俺はプロデューサーと分かれて散歩に出たんだが、食べ物のいい香りに誘われてそれに従ってスタジアムの正面ゲート付近まで来ていた。
「いらっしゃい！オクタン焼きいかがですかー！」
「トサキントすくいやってますよー！」
「はーい！チルット綿あめどうぞ！」
「ソルロック饅頭いかがですかー！」
おお！賑やかだな！
さすが、県で年に一度のポケモンバトルの大会だ。結構な数の出店が出てる、地元の人たちにとってはこの大会はお祭りの一種なのかもな。
「すいません。オクタン焼き一つ下さい」
「毎度ありがとうございます！」
そんな訳で、俺も一つ買ってみた。散歩のつもりだったけど、あのいい匂いには勝てなかったので近くにあったベンチで早速食べてみる…うん、おいしい。具材もいいし、焼き加減も絶妙だな！
※オクタン焼きとはオクタンの形をした食べ物で中に入っているのは普通のタコです。
「あ、あの？」
「うん？」
ベンチでオクタン焼きを堪能していると、目の前に小さい子供が立っていた。オクタン焼きに夢中になっていて気付かなかったな。
「どうしたの？迷子になっちゃった？」

「あ…そうじゃなくて…え、えっと」
何だろう様子が変だな？
「大丈夫だよ。ゆっくり話してみて」
「は、はい！真田選手ですよね？さ、サイン下さい！」
そう言うと、その子はペンと色紙を俺に差し出してくる。
え？サイン？俺の？
「・・・・・・」
「だ、ダメですか？」
驚いて言葉が出なかった俺の反応を見て、不安に思ったのか目の前の子はそんなことを行ってくる。
「ああ、ごめんごめん。サインね。大丈夫だよ」
「あ、ありがとうございます！」
あら、可愛らしい笑顔だ。本気で喜んでるなこの子
ペンと色紙を受け取ると、俺は慣れた手つきで自分のサインを色紙に書く
「はい、どうぞ」
「ありがとうございました！大切にします！」
「それ、俺が初めて書いたサインだから俺が活躍したらプレミア価値つくかもしれないし、お金に困ったら売ってもいいよ」
「う、売りませんよ！大事にしますから！」
「ははは、そっか。じゃあ、大事に取っておいてね。プレミア価値が付くように頑張るから」
「だから、売りませんってば！」
いい子だな～俺ならこっそり売るかもしれないのに…俺が汚れてるだけかな？
「あ、あの？」
「うん？」
サインを書いてあげた子の後ろにさらに別の少年たちが色紙を持って話しかけてきた。ひょっとして、またかな？
「サイン？」
「は、はい！」

「よっしゃ、いいよ」
２８３プロに幼馴染全員が所属するようになってから、透の提案でこっそり皆でサインの練習したかいがあったかもしれないな。
しかし、実際に書いてみてわかったけどサインって人の個性が出るよな。
透のサインはそのまんまだったし、雛菜のサインはあれは間違いなくユアクマちゃんをイメージしてたな。…著作権とか大丈夫だったかな？後でプロデューサーに聞いてみよう。
小糸のサインは透と同じで漢字だったけど、ウサギも書かれていて可愛かったな。円香のサインだけど、あれは何というか如何にもアイドルっぽいサインだった。何というか「こうしておけばいいでしょう？」みたいな感じを前面に出していた。なんせ本人が『サインなんてこんな感じでしょう？』って言ってたしね。
…予想通りすぎる返答に思わず笑いそうになったのは内緒だよ。
少年たちのサインを書き終え移動しようとすると
「真田選手ですよね」
あ、野生のファンがとびだしてきた！
って、野生のファンって何だよ。そんな馬鹿なことを考えていると
いつの間にそれなりの数の人間が俺を取り囲んでいた。

そして、現在に戻る

ああ、思い出した。俺が調子に乗ってサインなんか書き出すからこんなことになってるんだった。
しかし、何か俺のファンの人多くない？ツイスタでこの大会に出ること書いて投稿したからか？思ってたより効果あったみたいだ。
「おーーい！丈一郎！」
あ、プロデューサーだ。プロデューサーはファンの人たちの後方から、大声で俺を呼んでくる。おっと、約束の時間すぎてたか。
「すいません。もう時間なんで行きますね」
俺は、そう言ってファンの人たちの間を通り、プロデューサーと合

流する。
「丈一郎、ファンサービスも程ほどにな」
「ごめんごめん。まさか横浜にあんなにファンがいるとは思わなかったよ。…どうなってるんだ？」
「まぁ、ツイスタでもこの大会に出ること投稿したんだろう？それに大会の公式サイトでも丈一郎がデビュー戦として参加するって発表もしてるからな、ファンなら見に来ると思うよ」
　大会のサイトね、俺は基本的にそういうの見てないけど、案外客を呼ぶのに必要なのかもしれないな。
「さてと、そろそろ大会の主催者に挨拶しに行こうか」
「分かった」
　挨拶とかそういう面倒くさそうなやつはさっさと終わらせて集中したいしね

＊＊＊

　その後、挨拶を済ませた俺たちは大会のスタッフさんに案内された控え室に移動し着替えを行う。アマチュアリーグでは服装は自由だが、プロになると所属する企業や事務所オリジナルのユニフォームを着るのもプロの特徴だ。
「試着したときにも思ったがよく似合ってるな」
「そう？ありがとう」
　２８３プロのユニフォームは、全体的に白と青を基調とし右から左にかけて白地に青の波のようにすることで海を連想させる作りになっている。なんでも幼馴染み達の衣装と似たものをオーダーしてくれたそうだ。ナイスだね、プロデューサー！俺の好感度結構上がってるよ。
「丈一郎そろそろ時間だ」
　さて、そろそろ開会式か。移動しないとな

ピコーン

うん？チェインか？
『やは～♡ 丈先輩がんばってー』
『丈くん頑張って!!』
『がんばれー』
『ファイト』
はは、うん元気１００倍出た！頑張るぞ！

ピコーン
『丈先輩お土産もよろしく～♡』
そっちが本命か！…仕方ないな
「『何か甘いものでも買って帰るよ！』と」
結局、甘やかしちゃうんだよなぁ。

＊＊＊

「…であるからして…本日…このように…」
…あれ？雛菜の返事に甘いもの買っていくって返したけど、横浜の名物ってなんだっけ？雛菜って神奈川出身だったな。後で何か希望ないか聞いてみよう。
あ、そうだまだ会ってないけど他の事務所の人たちにも何か買っていった方がいいのかな？確か冷蔵庫にご自由にどうぞみたいな事書いて入れとけばいいんだった筈だ。日持ちするやつにしよう。
「それでは、これより横浜カップの開催を宣言致します！」
あ、挨拶終わった。開会式の挨拶って何度も聞いてるけど皆、同じようなことしか言ってないからなんか真面目に聞いてると眠くなるんだよ。校長先生の話しみたい。…そういえば、この間校長先生の話し中に居眠りして怒られたな…透が
「今回の大会のルールは1回戦から3回戦までは使用ポケモン1体、そしてそれ以降は使用ポケモンを3体に増やしてバトルをしていただきます」
「そしてこちらが本大会のトーナメント表となります」

司会が合図すると電光掲示板にトーナメントが写り出す。って、俺第一試合じゃん。…谷阿坤選手は反対側か、戦うためには決戦まで行かないと
「それでは、皆様、選手たちの熱いバトルをどうかお楽しみください！」

＊＊＊

フィールドにて開会式を終えると、他の選手がフィールドから控え室に戻る中、俺は一人選手入場口でスタンバイする。ちなみにプロデューサーは関係者席から見守ってくれている。
『皆様、長らくお待たせいたしました！これより年に一度の催し、ポケモンバトル横浜カップが始まります。それでは記念すべき1回戦の選手の入場です』
「それでは、真田選手フィールドまでお願いします」
スタッフさんからの指示に従い、バトルフィールドへと進む。
『中学、高校ポケモンリーグチャンピオンの真田丈一郎選手の登場だ！真田選手は本日がプロとしてのデビュー戦となります。ポケモンリーグで見せてくれた素晴らしいバトルを本日も期待したいところです！』

ワーーーーー！
俺の姿を確認すると、観客から声援が聞こえてくる。
「真田ー、プロでも応援してるぞー！」、「頑張ってー！」、「負けないでー！」、「わざわざ、東京から来たんだ。いい試合見せてくれー！」
あれ全員俺のファンなのか？すげー人数いるな。あ、さっき最初にサインした子発見！プレミア価値つくように頑張るよ！
「これより一回戦第一試合真田選手ＶＳ小林選手の試合を始めます」
記念すべきプロとしての一戦目か、先陣はこの子にしようかな
「両者、同時にポケモンを出してください」

「行ってこい、バシャーモ！」
「頼んだ、レントラー！」
『真田選手はバシャーモ、小林選手はレントラーでのバトルです』
　レントラーか、さてはゲッコウガ読みだったな。当てが外れたみたいな顔してる。でも、たしか特性は
「がぁぁぁぁぁ！」
『レントラーの特性、『いかく』が発動！これでバシャーモの攻撃が下がった模様です』
　やっぱり、『いかく』か
「…バシャ！」
　…あんまり効いてなさそうだな。まぁ、それでもバシャーモの攻撃が少し下がるな
「それでは、試合開始！」
「レントラー、『ワイルドボルト』だ！」
　いきなり強力な技で来たな。初っ端からパワー勝負にこだわる必要もない。着々と準備をするだけだ。
「バシャーモ、『みきり』」
　バシャーモは電気を纏い突撃してくるレントラーをぎりぎりの所で回避する。
『小林選手のレントラー開幕早々に強力な技で責めましたが、真田選手のバシャーモ華麗な『みきり』でそれを見事回避しています！』
　大技は外れると隙ができやすくなる。そこを突けばいい。
「そのまま『おにび』だ」
　バシャーモの両手から出た紫色の『おにび』がレントラーを襲う
「レントラー！」
『『ワイルドボルト』を外し体勢を整え切れていないレントラーを『おにび』が襲う！これは避けきれません』
　これでレントラーは少しずつダメージ追い、攻撃も下がる。
「一気に攻めるぞ！バシャーモ、『ブレイズキック』だ」
「くっ！レントラー『かみなりのキバ』で受け止めろ！」
　バシャーモの『ブレイズキック』をレントラーの『かみなりのキバ』

で受け止めようとするが、こちらは『いかく』で攻撃が下がっている、だがレントラーもやけど状態で攻撃が下がっている。
元々のレベル差もあり、レントラーは攻撃を受け止めきれず、大ダメージを食らってしまう。
バシャーモの蹴りの威力をなめるなよ！俺がサンドバックを持ったびに何度吹き飛ばされてると思ってるんだ！
『『ブレイズキック』と『かみなりのキバ』の対決は『ブレイズキック』に軍配が上がりました！レントラー吹っ飛んだ！』
「レントラー！レントラー頑張れ！」
「…がぁ…がぁぁ！」
レントラーはトレーナーの声に答えるようにフラフラしながらも何とか立ち上がる
「よし！まだここからだ！」
「……」
そろそろ来るかな？

ゴオオオオ
「レントラー!!」

よろよろと立ち上がった瞬間にレントラーの体から炎が巻き起こり、レントラーを包み込む。
「がぁ・・・ぁぁ」
『おっと！大ダメージを負ったタイミングで火傷の効果が発動してしまった、レントラー苦しそうです！』
この隙は逃さない。
「決めるぞ！もう一度『ブレイズキック』だ」
フラフラになっているレントラーにブレイズキックが直撃し、レントラーはバトルフィールドの外まで飛ばされていく
「れ、レントラー！」
「レントラー戦闘不能！勝者真田選手！」

審判のコールとともに先ほど俺の応援をしてくれていた人たちから歓声が聞こえてくる。
『決まったーーーー！真田選手とバシャーモ相手に付け入る隙を与えないまま、見事に勝利を収めました！』
まずは、一回戦突破だ。折角、応援に来てくれたんだし、ふがいない姿を見せるのも悪いな、最後まで気を抜かずに行こうか。

横浜カップ（中編）

横浜カップ、それは年に一度横浜にて開催されているポケモンバトルの大会だ。俺はこの大会に招待され参加した。そして…俺は今

「丈一郎、次のバトルまで少し時間がある。少し遅くなったけど今のうちに昼食を済ませておいてくれ」

「りょーかい」

お昼を食べようとしてます。

大会中とはいえ、腹は減る。食べられる時にちゃんと食べておかないとね。試合の影響もあり少し遅くなったけど、大会前にオクタン焼き食べておいたお陰で案外、ちょうどよかったかも。

俺はカバンの中から持参した弁当箱を取り出す。

「弁当持ってきたのか？」

「うん。あれ？だめだった？」

「いや、駄目じゃないけど…大会側が豪華な弁当を用意してくれてるぞ」

プロデューサーは控え室の脇にあるテーブルから二段の弁当箱を持ってくる。

弁当とかあんまり、詳しくないけど外観だけみても豪華そうなのは伝わってくる。

「おぉ、滅茶苦茶ＶＩＰ対応じゃん。プロになるといつもそうなの？」

「いつもとはいかないと思うけど、今回は招待された立場だからな」

招待されるって、いいこと尽くしなんだな。だけど…

「じゃあ、俺は少し離れるよ。また、作戦会議するんだろう？」

「うん？まぁね」

「じゃあ、試合前になったら迎えに来るから、何かあったら連絡してくれ」

プロデューサーはそう言って控室から出ていく。

さて、この豪華な弁当どうするかな？

「今日は、透たちが弁当作ってくれてるんだよなぁ」

透たちは俺が大会に参加するときに毎回、弁当を作ってくれてい

る。まぁ、大会の時以外にもたまに作ってくれるんだけど、大会の時は彼女たちの作ってくれた弁当を食べることが俺のモチベーションを大いに上げてくれている要素になっている。
　そんな訳で、用意してくれた大会側の人には悪いけど、これには手を付けないでおこう。プロデューサーが飯食べてないなら上げてもいいし、ダメなら持って帰ればいいか。
「ロトム、ヒートロトムにチェンジして弁当温めて」
「ロト！」
　ボールからロトムを出して、弁当を温めてもらう。やっぱり、ロトムって便利だよな。一家に一匹はロトムが必要だと思う。
「早く弁当食べて、次の対戦相手のデータ調べないとな」
　この大会にはプロの選手が多く出ている。俺の次の対戦相手もプロの選手だ。お陰でデータは大量に手に入る。ある程度の対策はしておかないとね。
「…その前に試合の経過と弁当の感想の連絡入れておくか」
　あ、でも彼女たちのレッスンの時間聞いてなかったな。電話じゃ出られないかもしれないしチェインでいいか。

＊＊＊

「はい！それじゃあ、少し休憩にしましょう！」
「「「ありがとうございました」」」
　ふぅっと軽く息を吐き呼吸を整え水分をとる。２８３プロに入って、それなりに練習を重ねた成果か初めてレッスンを受けた時と比べて私を含めた全員かなりスタミナが付いたと思う。最初はレッスン後、床に寝そべっていた浅倉や雛菜もそして一番スタミナの少なかった小糸も最後まで動けるようになっている。
　…まぁ、私を含めて全員まだまだ、できていないことの方が多いけど
「あ～丈先輩からチェイン来てる～」
「あ、本当だ」

休憩に入り、スマホを見ていた浅倉と雛菜のセリフを聞き私と小糸もチェインを確認する。
『レッスンお疲れ！大会は無事勝ち残って、次は準々決勝みたい』
「わぁ、丈くん順調に勝ち残ってるって！」
「まぁ、そう簡単には負けないでしょう」
実際、あいつがバトルで負けてる所なんてほとんど見たことがない。小学生の頃は偶に負けてたけど、それもゲッコウガ…当時のケロマツの特性を理解出来てなかったことが原因みたいだし
『それとちょっと遅くなったけど４人が作ってくれた弁当食べたよ。お陰で午後も頑張れそうだ！』
「…相変わらずお弁当程度で大袈裟すぎる」
…まぁ、これからもお弁当位だったら作ってあげるのはやぶさかでもない。真田も頑張ってるみたいだし、これくらいのサービスはしてあげてもいい。
『これから先もずっと４人の作ってくれるご飯を食べさせて欲しいかな』
「…ふふ」、「っ！」、「ぴぇ！」、「あは～♡」
あ、あいつは…本当に…どうしてこんなセリフを当たり前みたいにいつも…バトルの時は変化球みたいな事よくする癖に何でこういう…自分の好意をストレートな言葉しか言ってこないんだろう。
「見た？これからも私たちの作ったご飯食べたいって」
「う～ん、毎日ご飯作るの大変そうだけど丈先輩の為なら雛菜頑張るよ～」
そして、この二人も相変わらずだ。あのバトル馬鹿もそうだが、少しは自分の気持ちも隠すことをして欲しい。
「こ、これって…プ…プロポーズ？…で、でも、私たちまだ、高校生だし…でも、丈くんならお母さんも反対は…」
「小糸、お願いだから戻ってきて」
小糸、お願いだからあんただけは私と同じ常識ある人でいて…というか私を一人にしないで
「…真田、戻ってきたら覚えておいて」

…私がこんな思いをしてるのに、あいつはきっとバトルを楽しんでる。そう思うと何だか無性に腹が立ってきた。

＊＊＊

な、何だ？今、一瞬凄い寒気が…き、気のせいだよな。

『さー、真田選手ＶＳ野村選手のバトルもいよいよ大詰めだ。真田選手はこのバトル、ボーマンダ１体のみで野村選手を圧倒しています。野村選手のポケモンは後１体のみ、もう後がありません！さぁ、野村選手最後のポケモンは？』

そ、そうだ。バトルの途中なんだし集中しないと…今の所、順調だ。ボーマンダも調子がいいし、このまま３タテを狙ってみるか。

「まだまだ、ここからだ！行けエアームド！」

『おーっと！野村選手最後のポケモンはエアームドだ！エアームドＶＳボーマンダ！空中戦での勝負を挑む模様です！』

ふーん、エアームドか。バトル前に調べた時には特にエアームドをバトルで使用したデータはなかった筈だけど…まぁ、いいか。空中戦は少し久しぶりだし面白くなってきたかも

『野村選手のエアームドは、事前のインタビューによると今大会の為に新戦力としてゲットしたとのことですが、既に自分の持つポケモンの中で最強であるとコメントしています』

ほぉ、そこまで言うのか。ボーマンダと相性もそんなに良くないし、油断せずに行かないとな。

『さぁ、野村選手のエアームド意地を見せられるのか？それとも真田選手のボーマンダ見事勝利を納めるのか？いよいよバトル再開です！』

「それではバトル開始！」

「エアームド！『はがねのつばさ』だ！」

試合開始、早々にエアームドが翼を鋼色に光らせながら、突っ込ん

でくる。結構早いな、それなら…
「『ドラゴンクロー』で受け止めろ」
ボーマンダは両前足を変化させ、正面から突っ込んでくるエアームドの翼を受け止める。
『なんと！エアームドの『はがねのつばさ』をボーマンダ、『ドラゴンクロー』で受け止めた！』
確かに、普通のエアームドよりも素早い印象を受けたけど、純粋なパワーならボーマンダの方が上だ。
「この距離なら躱せないぞ、ボーマンダ！『ほのおのキバ』だ！」
ボーマンダの牙が炎を纏い、エアームドを噛みつく。
『これは距離を詰めたことがあだとなったか！エアームド、効果抜群の『ほのおのキバ』を食らってしまった！』
「ボーマンダ、まだ逃がすなよ」
ボーマンダの牙からエアームドの体に炎が伝わっていく。上手くいけば、火傷の状態にできるかもな。
「頑張れ！エアームド、『ドリルくちばし』だ！」
エアームドのくちばしがドリルの様に回転しながら、ボーマンダに迫ってくる。ボーマンダは咄嗟に回避しようとするが距離が近すぎて回避できずに攻撃を受け、エアームドを開放してしまう。
『エアームド、『ほのおのキバ』から何とか逃れることに成功しました。しかし、ダメージは大きいここからどう戦うのか？』
うーん…ダメージは与えられたけど火傷には出来なかったか。『おにび』と違って火傷に確実にできるわけじゃないし、仕方ないか。
「かなりダメージを受けてしまったか…ならば、エアームド『ねむる』だ」
眠る？体力回復狙いか？
『エアームド、眠ることで体力の回復を図る模様です。しかし、その間は相手の攻撃に対して無防備になっています。大丈夫なのでしょうか？』
何か意図が…運任せで『ねごと』を使うつもりか？…いや、ただ、相手の回復を待つわけにもいかないか。ここは攻め時だ。

「いくぞ、ボーマンダ！『ドラゴンクロー』！」
　ボーマンダが前足でドラゴンクローの構えをしながら、エアームドに突っ込む。しかし…
「今だ！エアームド、『こごえるかぜ』！」
「なに！躱せ！」
　眠っていたはずのエアームドが突如目を開き、凍てつく冷気を放ってくる。
『あーっと！眠っていたはずのエアームドがいきなり目を覚まし、攻撃をしてきた！ボーマンダ、咄嗟に回避行動に出ましたが、ダメージを受けてしまった模様です』
　…おいおい
「…『ねむる』じゃなくて寝たふりですか」
「悪いな、あまりだまし討ちの様で好きな戦法ではないのだが…君にはその様な遠慮は必要ないだろう？」
「…ええ、勿論。嫌いじゃないですよ、そういうの」
　ここまでのバトル、正面から挑んでくる奴ばかりで少し飽きていたところだ。
「ならばいい。『はがねのつばさ』だ！」
　また、『はがねのつばさ』か…なら、もう一度
「ボーマンダ、『ドラゴンクロー』で」
　しかし、俺が指示を出し終わる前に鋼の翼がボーマンダに命中する。
「なに！」
『エアームドの『はがねのつばさ』がボーマンダに直撃した！ボーマンダ、先ほど受けた凍える風の影響か？動きが遅くなっているようです」
　いや、違う。『こごえるかぜ』の影響で確かに動きは遅くなっているけど、それだけじゃない。明らかにエアームドの動きが早くなっている。
　これは…そうか！
「『くだけるよろい』か」

「なんだ、知っていたのか？正解だ」
『くだけるよろい』とは物理技を受けると、防御ランクが1段階下がり、素早さランクが2段階上がるという特性だ。
くそ！エアームドの特性は『するどいめ』か『がんじょう』だと思い込んでしまった。俺の失態だな。こんなことならドラゴンクローや『ほのおのキバ』じゃなく『かえんほうしゃ』や『りゅうのいぶき』のような遠距離技中心でバトルをしていくべきだった。
相手が鋼の翼を多用してくるのも砕ける鎧で下がった防御を鋼の翼の効果で上げるのが狙いか。なかなか、考えてるな。
…ふぅ、まぁ反省は後にするとして、ここからどうするかだ。こちらは後2体ポケモンが残ってる。一旦交代するか？
偶然ではあるけどロトムは今、ヒートロトムになってる。相手のスピードが速いから攻撃を避けられるかもしれないし『でんげきは』をメインにして攻めて、隙を見つけたら『10まんボルト』と『オーバーヒート』を当てに行けば多分、勝てる。
「・・・・・・」
俺が交代を考えたのが伝わったのかボーマンダがこちらを睨んで来る…そんなに睨むなよ。分かった分かった。このバトルは最後までお前で行くから。
「よし、ボーマンダ一旦距離をとるぞ、全速力で飛べ！」
「逃がさん！追え！エアームド！」
『ボーマンダ、エアームドから距離をとろうとしますが、エアームド動きが早い！これはすぐにでも追いつきそうだ！』
「どうした？逃げるので精一杯か？」
確かにエアームドの早さは今のボーマンダよりも早い。スピード勝負じゃ、負けるのは承知の上だ。だったら、そこを逆手に利用すればいいだけだ。
「ボーマンダ、『ブレイク』だ！」
「…『ブレイク』？」
俺の指示を聞くと、ボーマンダは急激に曲線を描くようにして進路を変える。

「なに！」
『おっと！ボーマンダが空中にて急旋回を決めた！エアームド、ボーマンダの突然の行動に対応できず、ボーマンダを追い越してしまった！』
　このブレイクとは本来はポケモンの技ではない。航空機が空中で行う機動の一つだ。ポケモンの事に詳しいトレーナーでも、というよりトレーナーだからこそ知っている人は少ないだろう。だからこそ、相手のトレーナーにもポケモンにも一瞬の隙ができてしまう。
「背後をとれ！」
「っ！しまった！エアームド後ろに注意しろ！」
　飛行ポケモンとはいえ、空中で急ブレーキはかけられない。あのエアームドの早さならターンをして体勢を立て直すのにそれ程時間はかからないだろう。今しかないな。
「ボーマンダ、『かえんほうしゃ』だ！」
「くっ！『エアスラッシュ』で迎え撃て！」
　ボーマンダの口から放たれた『かえんほうしゃ』とぎりぎりの所で体勢を立て直したエアームドの翼から空気を切り裂くように様に放たれた『エアスラッシュ』がぶつかり合う。その結果、巨大な爆発が起こり、２体を煙りが包み込む。
『火炎放射とエアスラッシュが相殺し、巨大な爆炎が起きています！一体中では何が起こっているのか？』
　徐々に爆炎が消え去り、中の様子が見えてくる。そこには、爆炎でダメージを受けたエアームド、そして…
「…！」
『おや、爆炎が消え去りましたが、ボーマンダの姿がどこにもいない？これは一体？』
「どこに消えた？」
　野村選手とエアームド、それだけでなく審判や実況までもボーマンダの姿を見失っている。
　今だ！
「行け！ボーマンダ、『ほのおのキバ』だ！」

「なに?……上か!」
そう、今までバトルしていた空中よりもさらに上、ボーマンダは爆炎が起こっている内に上昇を続け雲の中
に隠れていた。そして、爆炎が消え去り、エアームドの位置を把握すると最後の攻撃の為に最高スピードで降りてきた。
凍える風で素早さは下げられたが、高度からの降下により勢いが付いている。今のスピードは通常時のボーマンダよりも早い。
「く!『ドリルくちばし』で迎え撃て!」
野村選手も回避が不可能と判断したのか、迎え撃つ体制に入る。
炎の牙とドリルくちばしがぶつかり合う。両者、互いにダメージを受けながらも先に相手を倒すことにのみ集中し、技をぶつけ合う。
その結果、1体のポケモンが先にダメージの限界に達し地面に落ちる。
「エアームド戦闘不能!ボーマンダの勝ち!よって勝者真田選手!」
『決まったーーーーー!激しい空中戦を制し、最後はボーマンダの『ほのおのキバ』が炸裂!真田選手、勝利をもぎ取りました!』
ふぅ…なかなか強かったな。中学や高校リーグではもっと楽に勝てたのに、流石に長年、プロで活躍してる選手のエースポケモンとなると簡単には倒せないか。
『真田選手、ここまでポケモンを一体も失わずに勝ち進んでいます。この勢いはどこまで続くのかー!』
…いや、単純にここまでの対戦相手に犠牲が必要な相手がいなかっただけで必要になったら、犠牲を厭わずに勝ちを狙いに行くつもり満々なんだけどな。
まぁ、いいか。俺のやることは変わらないし、ここまで来たら優勝して皆に言い報告をしたいな。

横浜カップ（後編）

「それじゃあ、父さん交換よろしく」
『ああ、任せろ』
　ここは、横浜スタジアムにある通信施設だ。俺は手待ちのポケモンを入れ替える為にここに来ている。
　通信相手は俺の父親で、東京の郊外でポケモンの育て屋を経営している。普段、俺のポケモンたちを預かってもらって、必要な時にはこうして転送してもらっている。
『よし、確かに届いたぞ』
「こっちも届いた。それじゃ、バシャーモのことよろしく」
　今回は、手持ちにいたバシャーモとあるポケモンを交換してもらった。相手との相性的にもバシャーモを出すことは恐らくないと判断したためだ。
『おう、大会頑張れよ！中継見ながら応援してるぞ！』
「ああ、頑張るよ。……って仕事中じゃないの？いくら経営者でもサボってるとまた怒られるじゃね？」
『またって言うなよ。それなら気にするな！うちでは、お前のバトルはＢＧＭって扱いになってるから』
「おいおい」
『職員たちもお前のポケモンたちもバトル見たがってるからな。普段口煩い秘書も特別に許してくれるんだよ』
「…また、秘書さんの悪口言ってるよ。いい人じゃんあの人」
　あの人は、何年か前から偶にうちに来るけど俺にとっては、色々と面倒を見てくれた優しいお兄さんっていう印象だ。
『お前は仕事の時のあいつを知らないからそんなことが言えるんだよ。あいつと来たらちょっとした書類ミスまでネチネチネチネチと、そのくらいお前の方で直しておけってんだ！』
　父さんが、秘書さんの悪口で一人盛り上がっていると画面の奥の扉が開きそこから眼鏡をかけた顔見知りの男性が入ってくる。
『おい、聞いてるか？それ以外にもあいつには色々と言ってやりたあ

ことがあってだな。口煩いし、細かいしで本当に苦労してて』
「あーごめん。父さん、そろそろ戻って作戦たてないといけないからさ」
『うん？そうか…じゃあ、頑張れよ。さっきも言ったけど皆応援してるからな』
「了解、皆によろしく言っておいて」
『おう』
「それから、秘書さんも父のことよろしくお願いしますね」
『おい、待て……ひょっとして後ろに居るのか？』
「じゃあ、俺忙しいから」
『待て！まだ切るな！』
「応援ありがとう！必ず優勝するから！」
俺はそう言って通信を切る。
ふぅ、父よ、どうか安らかに……
さてと、それはさておきバシャーモと交換したこのポケモン、状況次第だけど、こいつが次のバトルの要になるかもな。
「控え室戻って、作戦立てるかな」

準々決勝を終え、次の準決勝でも危なげなく勝利し次の決勝戦の相手である谷阿坤選手の情報を纏めている。
谷阿坤選手
プロ歴２２年のベテランのプロのトレーナーであり北海道に本社を持つ鉱山企業の社長をしている。「鉱山王」の二つ名を持っていて、その業界では有名人らしい。この大会の主催者とは古い付き合いで毎年招待されている。
地面タイプのエキスパートでバトルのスタイルは正面からの力押しが多い。よくいるタイプではあるけど、プロで長年活躍している所から、そこらのトレーナーよりはるかに優れているのは間違いない。
ここまで、使用したのはフライゴン、ガマゲロゲ、ワルビアルの３体のみでエースとされているドリュウズは一度も使用していない。
「できたら、生でドリュウズのバトルを見ておきたかったけど仕方な

いか」
映像を見る限りエースのドリュウズは他の個体より大型で自慢のパワーと見た目以上のスピードで押してくるタイプだ。どれほどの物なのかは戦いながら判断するしかないか。
それで、他のポケモンたちでは、どんなバトルをしていたかな？

「丈一郎、そろそろ時間だ」
「うん。準備完了、いつでも行けるよ」
今回の大会に出てきた相手のメンバーへの対策はある程度できあがった。まぁ、準々決勝の時みたいにデータがないポケモンを出されたら臨機応変に対応するしかないけど

＊＊＊

『さぁ、いよいよ横浜カップ決勝戦です。果たして優勝するのは真田選手かそれとも谷阿坤選手か、間もなく試合開始です』
「真田選手、準備お願いします」
「分かりました」
スタッフさんに返事をしながら、軽く柔軟する。
「…いよいよだな」

「プロデューサー、緊張してるの？」
「……はは、分かるか？」
「まぁね」
　それで隠せてるつもりだったのかな？丸分かりだけど
「いや…すまない。こういう大舞台は他のアイドルの付き添いで慣れてるつもりだったんだけどな」
「まぁ、俺も初めての大会の時はそうだったよ。でも、心配しないでいい。勝つのは俺だ……多分ね」
　その為の準備は既に済ませてある。後は実行するだけだ。
「…なんか、最後がちょっと不安が残るな。……まぁいいか、信じてるぞ！頑張ってきてくれ！」
「うん、行って来る」
　俺はそう言って、選手入場口からフィールドに向かう。
　どうでもいいけど、誰かに勝利を約束したのなんて幼馴染以外では初めてかもな。
『先に現れたのは、今大会において最も注目されている真田選手だ！中学、高校リーグチャンピオンとなり、今大会でも圧倒的強さでここまで勝ち上がってます。』
『続いて、反対サイドより谷阿坤選手も入場です。今大会の出場回数及び優勝回数共にトップの実力者となります。果たして２人はどのようなバトルを見せてくれるのか？目が離せません』
　さて、やっと決勝か。ここまで来た以上、ちゃんと優勝しないとな！
「よろしくお願いします」
「……ああ」
　……なんか、間があったな？
「あの？なにか？」
「……フン、はっきり言っておくぞ。俺はお前のことが嫌いだ！」
「…え？」
「お前のバトルは相手を状態異常にしたり、妙な変化技で相手を混乱させるようなことをよくするだろう。そういうのが好かんのだ！そ

の曲った根性叩き直してやる！」
　あーそういうことね
「…望むところです」

「これより決勝戦を開始します。両者、同時にポケモンを出してください」

「さぁ、仕事だ！」
「頼むぞ！」
　互いにモンスターボールを投げると谷阿坤さんはフライゴンをそして俺はバシャーモと交換して手持ちに加えたエルフーンをフィールドに出す。
　やはり、エキスパートタイプの地面タイプのポケモンで来たな。父さんに頼んで入れ替えをして正解だった。だけど…
「エル♪」
　エルフーンはモンスターボールから出ると、その場で一回転し観客に向かってポーズをとりながらウィンクをする。
「「「『キャアーーーーーーーーカワイイ!!』」」」
　…こいつ、いきなり観客に向かって『メロメロ』使わなかったか？技はともかく、あのポーズを教えたの絶対雛菜だろ。
　しかもエルフーンの『メロメロ』を使った瞬間に女性の歓声に合わせて実況の野太い声も聞こえてきたような気がするんだけど
『…た、大変失礼いたしました。谷阿坤選手はフライゴン、真田選手はエルフーンでのバトルです！』
　気のせいじゃなかったよ。
『フライゴンとエルフーン、相性ではエルフーンが有利ですが果たしてどのようなバトルになるのか！』
「フン、相性だけではバトルは決まらんさ」
「…ええ、その通りです」
　まぁ、それでもこちらが有利な状況になったことは事実だ。俺は、それを最大限利用すればいい。

「それでは、横浜カップ決勝戦、試合開始！」
審判のコールと共に、まず、谷阿坤さんが動く
「ドラゴン技だけがフライゴンの技じゃない！行け『かえんほうしゃ』だ！」
「エルフーン、『ひかりのかべ』だ」
フライゴンの口から放たれる『かえんほうしゃ』をエルフーンが作り出した『ひかりのかべ』が防ぐ。
「ちっ！小癪な！ならば『はがねのつばさ』だ！」
「今度は『コットンガード』だ」
エルフーンは背中の綿毛が体全体を包み込む。
フライゴンはエルフーンに正面から突っ込み、『はがねのつばさ』をぶつける。
ぼんっ
そんな音と共に見た目は完全に綿毛となっているエルフーンは『はがねのつばさ』の衝撃を吸収してフライゴンを弾き返した。
「何だと！」
『おおーっと！フライゴンの連続攻撃を、エルフーン『ひかりのかべ』と『コットンガード』で完璧に攻撃を防いでいます！』
『かえんほうしゃ』、『はがねのつばさ』確かにエルフーンには効果抜群の技だけど、所詮はタイプ不一致の副砲だ。ダメージは多少あるけど防御に徹すれば防げないものじゃない。
それに、エルフーンの特性『いたずらごころ』によって、変化技を相手より優先的に使える。変化技を多く持つエルフーンには理想的な特性だ。
「…だが、守ってばかりでは勝負には勝てんぞ！」
「もちろん、分かってますよ」
だけど、相性のお陰でドラゴン技は封じているわけだし、もう少し色々やっておきたいな。
「では、今度はこちらから行きますよ。エルフーン、『しびれごな』だ！」
「そうはいくか！フライゴン、ふきとばせ！」

フィールド全体にばら撒かれる『しびれごな』をフライゴンは自身の翼を羽ばたかせ、吹き飛ばそうとする。
それなら
「エルフーン『おいかぜ』だ。そのまま押し返せ！」
直後、フライゴンにとって向かい風となる強力な風が巻き起こる。フライゴンは対抗しよう翼を必死に動かすが、風の勢いに負けてしまい、そのまま風に乗った『しびれごな』が命中する。
「なに！」
この結果もある意味当然かもな。そもそもフライゴンは『ふきとばし』を覚えない。さっきやっていたのは『ふきとばし』みたいなものであり正確には技ではない。
それに対し『おいかぜ』は攻撃技ではないが、自然に働きかける技だ。いくら強いポケモンでも一匹で自然そのものに勝てるやつは決して多くはいない。
『エルフーンが起こした『おいかぜ』に乗り『しびれごな』がフライゴンに命中した――！真田選手が得意とする相手を状態異常に追い込む戦法が見事に決まりました！』
…まぁ、得意というか単純に状態異常が好きなんだよね。バトルやりやすくなるし、状態異常にさせたら気持ちいいし
「気に入らん！小癪な戦法ばかり使いやがって、男なら正面から来い！」
「…それは失礼」
こういう反応も慣れてきたな。まぁ、やる方は楽しいけど、やられるのは嫌だよな。
「それじゃ、次はリクエストに応えて攻撃技で行きますよ。エルフーン突っ込め」
「フライゴン、『かえんほうしゃ』で迎え撃て！」
フライゴンは突撃してくるエルフーンを『かえんほうしゃ』で迎え撃とうとする。だが
『エルフーン早い！早い！見かけ以上のスピードです！』
さっき使った『おいかぜ』の本来の効果が出て素早さが上がってい

るからな。そのまま、エルフーンは『かえんほうしゃ』を避け攻撃の射程圏内まで近づく。
「エルフーン『じゃれつく』だ」
エルフーンはフライゴンへと飛び移り、そのまま激しいスキンシップを行いもみくちゃにする。
…この技、言葉にして説明すると全然怖く感じないけどフライゴンの様子を見ればどれほど強力で恐ろしい技なのかが伺えるな。
「しっかりしろ！振り払え！」
谷阿坤さんの声に応えるようにフライゴンは力を振り絞りエルフーンを振り払おうとするが、麻痺状態が邪魔をして上手く体を動かせていない。麻痺状態＋効果抜群の技をくらっている状態から抜け出すのは簡単じゃない。
暫くすると、フライゴンは目を回して地面に倒れ込む。戦闘不能だな。

「フライゴン、戦闘不能！」

「くそ！くそ！くそ！」
おぉ、リアルで地団駄踏んでる大人なんて初めて見た。
「猪口才な小僧め！ワシはお前の様に小細工するバトルは好かんのだ！」
「…なんと言われようとこれが俺のバトルですから」
そう、恥じることなんて何もない。出来ることの全てやり、バトルをする。ただ、それだけのことだ。
『フライゴン敗れました！やはり、相性の差には抗えなかった模様です。決勝戦の初戦は真田選手が取り、選谷阿坤手のポケモンは後２体、果たして次のポケモンは？』
「渇を入れてやる！仕事だ！ワルビアル」
『ヤーコン選手２体目のポケモンはワルビアルだ！しかし、これは…』
相性が悪すぎる。ワルビアルは地面・悪タイプのポケモンだ。草・フェアリータイプの攻撃を受ければ大ダメージを受けるのは免れな

い。
「相性の差など無理やりひっくり返すだけだ！」
「…面白い。受けて立ちますよ」
「それでは、試合再開！」
「エルフーン『エナジーボール』」
「受け止めろ！」
ワルビアルは手をクロスし『エナジーボール』を正面から受け止める。
まだ、『おいかぜ』の効果が残ってるうちに攻めに行くべきか。
「一気に行くぞ！『じゃれつく』」
「『あなをほる』で地面に潜れ！」
さらなる攻撃の為に接近してきたエルフーンをワルビアルは地面に潜り回避する。
やっぱり、そう来るよな。
ワルビアルはエルフーンの前方、左右、後方の様々な場所に穴を掘り、一瞬だけ顔を出しすぐに身を潜める。まるでモグラたたきだ。
『エルフーンの攻撃を警戒したのか、ワルビアル地面の中に退避しました。はたしてどこから現れるのか』
ここまでの展開はある程度予想通りだ。既に倒す算段はついてる。問題は、どのポケモンで実行するのかだ。
相手の最後のポケモンが絶対的エースのやつだとすると、エルフーンにはまだ、無理をさせたくないな。
それなら、ここは
「もどれエルフーン」
『真田選手、エルフーンを戻します。今大会初のポケモン交換となります』
だから、そういうの別に拘ってないって
「なんだ？戻すのか？」
「ええ、1体のポケモンや戦術に拘っていたらバトルが手遅れになり

ますから」
「…フン」
俺の事は気に食わないようだが、俺の意見には賛成なのか先ほどの様な悪態をついてこないな。
『さぁ、真田選手の次のポケモンは？』
そうだな。この状況ならやっぱりこいつだろ。
「行け！ゲッコウガ！」
「コウガ！」
『真田選手、２体目のポケモンはゲッコウガだ！真田選手の絶対的エースとして知られるポケモンをここで出してきました！』
「…もう出してきたか」
「頼むぞ！ゲッコウガ」

「試合再開！」

「ゲッコウガ！『みずしゅりけん』」
「地面に隠れろ！」
ゲッコウガの『みずしゅりけん』を先ほどと同じように地面に潜り回避する。
「そう来ると思ってましたよ。ゲッコウガ、お前も穴に入れ！」
『ゲッコウガ、ワルビアルが潜った穴に自分も入りました。これは、一体？』
、
狙いは一つだ
「ゲッコウガ『ハイドロポンプ』だ」
「い、いかん！穴から出ろ！」
狙いに気づいたみたいだが、もう遅い！
穴の中でゲッコウガの放った『ハイドロポンプ』がフィールド上にあった全ての穴から一気に噴き出し、穴の中に潜んでいたワルビアルも一緒に外に飛び出してくる。
「見つけた！ゲッコウガ『みずしゅりけん』」

『ハイドロポンプ』が命中し、穴から無理やり追い出されぐったりしている所に追い打ちをかけるように『みずしゅりけん』が襲う。
「ワルビアル！」
　ワルビアルは避けることができずに効果抜群の技を連続で受け、目を回しながらワルビアルは倒れてしまう。
「ワルビアル戦闘不能！」
『ワルビアル倒されました！ゲッコウガの『ハイドロポンプ』と『みずしゅりけん』の連続攻撃は耐えられませんでした。これで、真田選手は残り3体に対して谷阿坤選手のポケモンは後1体のみ、もう後がありません！』
　よし、追い詰めた。相手は残り1体で恐らくエースのあのポケモンだ。勢いはこっちにある。行けるかな？

「はははははは」

……なんだ？
「…何か？」
「いや、ななかなか根性のある攻めだったと思ってな。お前とこんなバトルができるとは思ってなかったから嬉しいと思ったまでよ」
　遠回しに貶されてる？…いや、この人はそんなことしないか。これは、この人なりの誉め言葉なのかも
「だが、最後のこいつは今までのポケモンとは比べ物にならんぞ。行け！休日出勤だ！ドリュウズ」
『谷阿坤選手、最後のポケモンはやはりエースのドリュウズだー！』
　…予想通りだからいいけど、休日出勤って出さずに勝つつもりだったのか？
「真田選手のゲッコウガ、谷阿坤選手のドリュウズ、最後の戦いは両者の絶対的エースでのバトルだ！果たして勝利の女神はどちらに微笑むのか！』

……うーん
「さぁ！存分にやろうじゃねぇか！」
…うん。気合入ってるところ申し訳ないんだけども
「…戻れ、ゲッコウガ」
俺は若干のためらいを感じながらもゲッコウガをモンスターボールに戻す。
「な、なんだと！」
『真田選手、ゲッコウガを戻してしまいました！』
…全く、やりにくいな。実況が盛り上げたせいでゲッコウガを戻しにくいったらないよ。
「てめぇ！どういうつもりだ！」
「いや、どういうつもりも何も…一応作戦がありまして」
「何が作戦だ！ここは互いのエースポケモン同士を戦わせる流れだっただろうが！」
「…そっすね」
俺だって、そういう流れだったのは分かってますよ！でも、空気に流されてらしくないことをするのにも抵抗があるしなぁ
「だったら、ゲッコウガで戦わんか！自信がないのか！」
「…自信はありますよ。そうしてもいいんですけど、まず、そのドリュウズがどれくらいの強さなのかある程度見極めてから勝負したいんですよね」
この大会では谷阿坤さんはドリュウズを使っていなかった。そのせいで直接その強さを見ることも出来てない。過去のデータを見た限り、かなりパワーファイトが得意という印象が強いけど、あくまでそれは過去のデータだ。
どうせなら、今のドリュウズのデータも参考にしたい。折角、ゲッコウガを含めて3体も残してるんだ。この数の差を利用しないのはあまりにももったいない。
「この！この！この！どこまでも生意気な小僧だ！全く気に入らん！」
本日2度目の地団駄踏んでるよ。この人、俺とは色んな意味で相性

が悪いのかもしれないな。でも…
「俺は谷阿坤さんのこと、結構好きですよ」
「……ば、馬鹿にしやがって！さっさと次のポケモンを出さんかー！」
「はいはい」
　別に馬鹿にはしてないんだけどな。…でも、なんでだろう？何か嫌いになれないんだよなこの人、説教臭い大人って嫌いなはずなのに…まぁ、いいか。後で考えよう。
「悪いな。もう一度頼むぞ」
　次に出したのは1試合目と2試合目でフライゴンとワルビアルとバトルを行ったエルフーンだ。
『真田選手、続いて出したのは、またしてもエルフーンだ。先ほどフライゴン相手に見事なバトルをしていましたが、今度はどのようなバトルを見せてくれるのか！』
　予想よりも早くワルビアルを倒せてしまったから、あまり休めてないかもな。本当は、もう少し休ませてあげたかった。だけど、次のバトルにつなげる為にはここはエルフーンが適切だ。
「エルフーン」
「エル？」
「…頼んでいいか？」
「エル！」
「そうか…ありがとう」
　エルフーンは自分の役割を分かってくれている。だったら、こっちも変な遠慮はしない。俺たちにできる全ての手をうって勝ちに行くだけだ。
「そいつで俺のドリュウズに勝てると思ってんのか」
「さぁ、やってみないと分からないですよ」
「…生意気な小僧め」
「それでは、試合再開！」
「攻めるぞ！『エナジーボール』だ」

「『こうそくスピン』で防げ！」
エルフーンの『エナジーボール』をドリュウズは両手を回転させた『こうそくスピン』で防ぐ。
「…成程、大したパワーだ」
「フン、当然だ！」
攻撃は最大の防御か、正にそれを体現してる感じだな。『エナジーボール』を完全に受けきっていたし、あれじゃ、ほとんどダメージが入っていないな。
「今度はこっちの番だ！『ドリルライナー』」
ドリュウズはドリルのように体を回転しながら体当たりをしてくる。パワーだけじゃなくスピードもあるみたいだな。
「『コットンガード』、そしてそのまま『わたほうし』だ」
エルフーンは『コットンガード』で綿毛状態になり、突っ込んでくるドリュウズを正面から受け止め、体中の綿毛からフワフワの胞子をドリュウズに纏わりつかせる。

「ぶちかませ！」
エルフーンはドリュウズのパワーに押し負け弾き飛ばされる。
「エルフーン！」
「…エ…エル…」
エルフーンは立ち上がるが、そろそろダメージが危険ゾーンに入ってきた。効果が今一つである筈の『ドリルライナー』でこの威力か。
「…だけど、想定の範囲内だ」
確かにエースと言うだけの事はある。フライゴンやワルビアルとではパワーもスピードもまるで違ったが、このままゲッコウガでバトルしても倒せない相手じゃない。
しかし、その上であらゆる手を打ち勝ちに行く、それが俺たちのバトルだ。
「とどめだ！『スマートホーン』」
ドリュウズは自身の角を突き立てるように突進してくる。あのパワーで効果抜群の攻撃が当たったらエルフーンは確実に倒される。

それなら…

「『おきみあげ』」

ドリュウズの『スマートホーン』が命中し、エルフーンはフィールドの外まで吹き飛ばされる。

「エルフーン、戦闘不能！」

『エルフーン敗れました！やはりバトルのダメージが残っていたのか！真田選手、今大会において遂に初めてポケモンを失いました！』

「戻れ、エルフーン…ご苦労様」

…充分だよ。よくやってくれた。

「フン！当然の結果だ！」

「ええ、本当に凄いパワーとスピードでしたね」

「やっと分かったみたいだな！さぁ、次はどうする」

次か…下準備は出来た。

「行け！ゲッコウガ」

『真田選手、再びゲッコウガを投入だ！両者のエース対決！果たして勝つのはどちらになるのか！！』

「フン…それで、作戦はもういいのか？」

「ええ、勝つ準備は出来ました」

「…言ってくれるな、小僧め。やれるものならやってみろ！」

「それでは、試合再開！」

「ゲッコウガ『ハイドロポンプ』」

「ドリュウズ『こうそくスピン』で防げ！」
ゲッコウガの口から放たれる『ハイドロポンプ』をドリュウズの『こうそくスピン』で防ごうとするが、貫通してドリュウズを吹き飛ばす。
「な、なんだと！」
谷阿坤さんは驚愕している。彼はエルフーンの『エナジーボール』と同じように防ぎきれる自信があったんだと思う。『こうそくスピン』で技を防ぐあの戦法は強い攻撃力があるからこそ成立するが、今のドリュウズは攻撃が2段階下がっている状態だ。
これもエルフーンが倒れる前に最後に使った技『おきみあげ』のおかげだ。あの技は自分が戦闘不能になる代わりに相手の攻撃、特攻を2段階さげることができる。バトル中に自分のポケモンを使いつぶす技の為、トレーナーが指示することは滅多にない。だけど、だからこそ、使う価値があの場ではあった。現に今のドリュウズの攻撃が下がった状態では、効果抜群の技を防ぐことは出来ていない。
「追い込めゲッコウガ！『みずしゅりけん』」
「穴に逃げ込め！」
『みずしゅりけん』がぶつかる寸前にドリュウズはワルビアルが掘った穴の中に逃げ込む。
でも、どうして穴に？その戦法はもう通じないと分かってるはずなのに、ただ逃げ場をなくすだけだぞ
「ドリュウズ『すなあらし』だ！」
ドリュウズの入った穴から、大量の砂と一緒にドリュウズが飛び出しフィールドを砂嵐が覆う。
「…これは」
『ドリュウズによってフィールド全体が砂嵐で覆われてしまったー！これでは互いに相手の位置の特定ができません！』
いや、たぶん違う。
確かに、視界が悪くてこちらからはドリュウズの場所の特定は難しいけど、わざわざ『すなあらし』を使用してこの状況を作る辺り相手にはこっちの居場所が分かってると思った方がいい。
「ドリュウズ『ドリルライナー』だ！」

姿は見えないが、ドリュウズはゲッコウガに向かって突っ込んできているはずだ。
それなら…
「ゲッコウガ、地面に向かって『ハイドロポンプ』だ」
『ハイドロポンプ』を地面に向かって放つことでゲッコウガは、フィールドの上空へと上がっていきドリュウズの攻撃をかわす。
『なんとーー！ゲッコウガが空へと飛んだーー！』
さて、まずはこの面倒なフィールドからどうにかするか
「ゲッコウガ『かげぶんしん』そしてそのまま地面に向かって『みずしゅりけん』を叩きつけろ！」
『かげぶんしん』により、１０体近くに増えたゲッコウガたちが全員『みずしゅりけん』を地面に叩きつける。その結果…
「こ、これは…」
複数の『みずしゅりけん』が叩きつけられたことで、大きな水しぶきが上がりフィールドを覆っていた砂嵐は水しぶきとともに消え去る。
『何という力技だ！『かげぶんしん』をしたゲッコウガの『みずしゅりけん』によって、『すなあらし』を無理やり封じ込めました！』
「…やってくれたな」
「相手に有利なフィールドならフィールドそのものを作り変える。ただ、それだけですよ」
単純に『あまごい』を使って、天候を変えることも出来たけど…そうなると、互いに有利な天候になるまで何度も天候を変えあう根比べみたいな展開になったかもしれない。さすがに、それは面倒だしね。
「くそ！ドリュウズ『つのドリルだ！』」
『『くさむすび』で足を止めろ」
形勢逆転を狙い、ドリルを回転させながら突撃してこようとするが、直前で足元に草が生え足を絡ませ、そのまま転倒してしまう。
「てめぇ！」
谷阿坤さんの性格上、ここまで追い込まれれば突っ込んでくることは予想できた。どれだけ強力な技でも来ることが分かってれば技が

当たる前に防ぐことは簡単だ。
そして、俺たちは一瞬でも隙を見せたら絶対にそれを逃したりはしない

「決めるぞ！最大パワーで『みずしゅりけん』だ！」
通常の倍以上のサイズとなった『みずしゅりけん』を今だに倒れているドリュウズに向かって投げつける。ドリュウズは防御も回避することも出来ずに正面から食らってしまう。

「ドリュウズ戦闘不能！よって勝者真田選手！」

『決まったーーー！最後はゲッコウガの巨大な『みずしゅりけん』が見事にドリュウズを捉え、勝利をもぎ取りました！』
ワーーーーーーーーーーー！！！！！！！
実況に続くようにスタジアム中の観客たちが声援が上がる。
俺は、片手を上げその声援に応える。幼馴染みたちが勝利を喜んでくれること以上に嬉しいことはないけど、ファンの声援も悪くないな。

＊＊＊

決勝戦が終わり、次いで閉会式が終了し、俺は控室で着替え少しだけ休憩をしていた。
ポケモンバトルで戦うのポケモンたちだが、バトルが終わった後はトレーナーの俺にも疲れはたまる。まぁ、作戦をたてるときには頭を使うし実際にバトルをすると精神面でも結構消耗するから仕方ない。
「準備できたか、丈一郎」
「ああ、いつでも行けるよ」
「じゃあ、車回してくるから待っててくれ」
そう言って、プロデューサーが楽屋から出ようとする。

すると、扉からコンコンとノックの音がしてきた。
「はい、どうぞ」
扉が開くとそこから谷阿坤さんが入ってくる。
「失礼する」
何だろう?説教なら勘弁してほしいけど
「閉会式が終わったばかりなのにすまんな」
「構いませんよ。もう帰り支度も終わってるので」
「そうか…一つ聞きたいことがあってな。教えてくれ、お前さんは…さっきのバトルもそうだが、あの戦い方で勝ち方で満足なのか?」
「はい」
俺は迷うことなく答える。
「…躊躇いがないな」
「ええ…ここで迷ってしまったら今回嫌な役を引き受けてくれたエルフーンに申し訳ないですから」
「『おきみあげ』のことか?」
「あ、気づいてました?」
「正確にはバトルが終わって頭が冷えてから気づいたが正しいがな」
正しくは、その前に使った『わたほうし』や『おいかぜ』にもちゃんと意味がったけどね。
さっきのバトル、エルフーンが谷阿坤さんのエースであるドリュウズの能力を大いに削ってくれたからこそ、あの勝ち方ができた。
もちろん、最初からゲッコウガを出して万全のドリュウズと戦う選択肢もあった。正面対決でも負ける気はしない。だけど勝つために可能な限りの手を打つのはバトルの相手への礼儀だし、何よりそれを実行する能力があるエルフーンに申し訳ない。
「フン…だが、やはり気に入れん」
「…そうですか」
まぁ、こればっかりは仕方ないな。自分のポケモンに戦闘不能になる技を指示するなんて普通はしないだろうし
「ああ…お前は若いくせに本物の実力を持っとる。」
「・・・・・・・・」

「しかも、自分のバトルを見出し、誰に何と言われようとそれを貫く心の強さもある。認めるのは癪だがお前に可能性を感じ、期待する奴がいるのも分かるってもんだ」
…何だろう？貶すような言い方なのに滅茶苦茶褒められてる？
「一度しか言わねぇからよく聞け…優勝おめでとう、こからも頑張んな」
「！…ありがとうございます」
「フン」
俺が俺を言うと谷阿坤さんは顔をそらしてしまう。あれ？この感じどこかで覚えがあるような気がする。どこでだ？なんか普段からよく見てるような気がする。
「あ！」
そうだ、円香だ。そうか…この人、どことなく円香と似てるんだ。容姿とかではなく性格…いや、この場合、本質かな？上手く言えないがツンデレの匂いがする。成程、そういう所が円香に似てる気がしたんだ。道理で嫌いになれないわけだよ。
「…なんだ？」
「あ、すいません。なんだか谷阿坤さんが俺の知り合いに似てて」
「ほー、この俺様に似てるのか？そいつはきっと逞しくい、いい男なんだろうな？」
「いえ、その子は女の子でツンデレな所がそっくりです！」
「馬鹿にしてやがんのか！」

＊＊＊

現在、俺たちはハマスタを出て車で移動している。
「…丈一郎、あれはないだろう？」
「…うん、本当そうだね。やらかしちゃった」
あの後、谷阿坤さんは俺の頭に一発拳骨を落としてからぷりぷり怒りながら帰ってしまった。
…ああいう所も円香っぽいんだよな。もう言わないけども

「まぁ、その内また会う機会もあるだろうからその時に謝っておくよ」
「そうしてくれ」
　とは言っても一発殴ったから、案外もう許してくれてるかもな。
「丈一郎、今回の大会はどうだった？」
「面白かったよ」
　プロの選手も結構出てたし、参加した甲斐があった。俺のバトルはプロでも通用する。それが、確かに証明できただけでも出た甲斐があったと思う。
「そうか、じゃあ、今後も大きな大会があったら積極的に申し込んでもいいか？勿論、出るかどうかは丈一郎が決めていい」
「その辺は任せるよ。俺も個人的に出たい大会とかあったら連絡するからさ」
「ああ、ポケモンリーグ本番までまだかなり時間がある。出来るだけ多くの大会に出てプロとの対戦の経験を積んでくれ」
「ああ、分かってる」
　こうして、俺のプロデビュー戦は無事、優勝という形で終わった。今後の事も考えるといい経験を詰めたと思う。しかし、俺のプロトレーナーとしての道は始まったばかりだ。これで調子に乗らずにもっと多くのプロトレーナーと勝負してもっと強くならないとな。

「あ、お土産買ってなかった。プロデューサーちょっとどっか寄ってくんない」

買い物

「あ～……暇だな」

プロトレーナーとしてのデビュー戦である横浜カップを無事に優勝した翌日俺は自宅で暇を持て余していた。普段なら暇な時間はポケモンたちとトレーニングをするか幼馴染みの誰かと遊んだりするけど……

『休息を取るのも大事な仕事だぞ。大会が終わったばっかりなんだから丈一郎もポケモンたちもちゃんと休んでくれ！』

プロデューサーにそんな事を言われてしまったのでトレーニングはなし。幼馴染みは皆、私用で家族と出かけたらしい。

こういう暇なときに遊べる友達が少ないと本当にやることがない。

「……買い物でもしに行くか」

何時までも部屋にいてもしょうがないしな。大会で活躍してくれたポケモンたちにも何かご褒美を買ってあげるのも悪くないかもしれない。

そう決めると部屋着から私服に着替えて外にでた。

＊＊＊

多摩デパート

今日の俺の目的地だ。ここは東京にある関東最大の大型デパートで、ここでは一般的なデパートと同じように食品、日用品、家具などの他にもトレーナーズ・ショップが存在し、そこではモンスターボールや体力回復の薬、状態異常を治す道具、技マシンなんかも売られてる。

だけど今回はトレーナーズ・ショップには行かなくてもいいな。あそこはトレーナーの為の店でポケモンへのご褒美を買うには向いてない。

取りあえず地下一階の食品売場でも見に行くか。ポケモンたち用の木の実や他の地方で売られているお菓子なんかも仕入れてたはず

だから、取り敢えずその辺から見てみるか。
「あれ？丈くん？」
聞き覚えのある声振り返ると、笑顔で手を振りながら近づいてくる小糸がいた。
「おー小糸、奇遇だな」
「うん！丈くんも来てたんだ」
「ああ、ポケモンたちに何かご褒美でも買おうと思ってね。小糸は？」
「あ！……えと…その……」
「どうした？」
「…今日は妹と来てるの」
「お！小咲ちゃんもいるの！」
「…う、うん」
福丸小咲
今年中学生になった小糸の妹だ。昔から俺の事をお兄ちゃんと言って慕ってくれている俺にとっても妹みたいな存在だ。
最後に小糸の家に遊びに行って以来だからもう何ヶ月も会ってない……やばい、めっちゃ会いたい！
「あーーーーお兄ちゃん！」
お！この声は
「小咲ちゃ「どーーーーーーーん！」んんん！」
飛び込んでくる小咲ちゃんをなんとか正面から受け止めることに成功する。小咲ちゃんの声に反応して咄嗟に振り返ってなかったらちょっと危なかったな。
……あれ？なんか前にもこんなことがあったような気もするな。
「さすがお兄ちゃん！ナイスキャッチ！」
「…お、おう」
こ、この子は見た目は小糸とあんまり変わんないのに本当に小糸の妹なのかと思わせるほどにやんちゃ…というか雛奈に似てる
「小咲！」
「うん？お姉ちゃん？何？」
「何？…じゃない！こんなところで危ないよ！」

「平気だよ～お兄ちゃんなら雛菜ちゃん直伝のウルトラ小咲アタックを受け止めてくれるって雛菜ちゃんが言ってたもん」
　あ、やっぱり雛菜経由か…どこのZ技だよ。ん？待てよ
「小咲ちゃん？雛菜直伝ならウルトラ雛菜アタックっていう名前じゃないの？」
「お兄ちゃん分かってないな～雛菜ちゃんが使う時にはウルトラ雛菜アタックでいいけど、私が使う以上はウルトラ小咲アタックじゃないと変でしょう？」
「あー…そうなの？」
「そうだよ！ここ大事だから覚えておいてね！」
　よく分からないけどなんだか強いこだわりがあるみたいだ。
　まぁ、キン○バスターも別の人が使ったら名称が変わるって聞いたことあるしそういうもんなのかな？
「分かったよ。これからは気を付ける」
「うん！よろしい！」
　これで一件落着
「よろしい！…じゃない！」
　な訳ないか
「もう！丈くん変な方向に話を逸らさないでよ！」
「別に逸らしたつもりはないんだけど」
「お姉ちゃん怖ーい」
「小咲！」
　おーヒートアップしてきたな。
　小糸って、俺たち特に妹の小咲ちゃんが何かやらかすと結構厳しくなる。だけど初対面の人たちの前だと見た目通りの小動物に変化する典型的な内弁慶なんだよね。
「小糸、落ち着いて。けが人も出なかったわけだし今日の所はこの辺でさ」
「駄目だよ！この子いっつも丈くんに甘えてばっかりなんだもん！しかも今日はこんなに人の多い所で危ないことしようとして！」
「ま、まぁ、それはそうだけどさ。…でも、ほら今回は俺みたいにきっ

ちり受け止めることのできる人がいるからやっちゃったけど普段はしないだろう？ちゃんと危険があるってことは分かってるわけだし」
「そもそも丈くんが小咲の事甘やかしてばっかりだからいけないんだよ！」
「え？そうかな？」
「そうだよ！悪いことしたときにはちゃんと叱らないと甘やかしてばっかりじゃあ小咲の為にならないよ！」
「う、うーん」
　ま、まずい…小糸の勢いがいつもより強い
「…なんかお母さんとお父さんに怒られてるみたい」
「「え」」
　お母さんとお父さん？
「なんか～子供の教育方針について揉めてる夫婦みたいだったよ」
　そう見えてのか？
　うーん……ちょっと照れくさいけど悪い気はしないかな
「ぴぇっ！ふ、夫婦って……ち、ちが！」
「お姉ちゃんめっちゃ照れてる～」
「こ、小咲ーーーーーーーーーーーーーーーーー！」
「キャー♪お兄ちゃん助けて～」
　うん、収拾がつかないな

＊＊＊

　小糸を落ち着かせ、ついでに小糸の小咲ちゃんへのお説教にかかること約２０分
　俺たちは一緒買い物を再開することにした。
「さて」
「？」
　ここで２人に…いや、小咲ちゃんに会ってしまった以上やることがある。
「小咲ちゃん何か欲しいものない？」

「え、丈くん？急にどうしたの？」
「いや、そう言えば色々あって中学の入学祝い買ってあげてないなって思ってさ」
「わぁ！お兄ちゃん何か買ってくれるの！」
小咲ちゃんは今にも抱き着いてきそうな勢いで喜んでくれる。
こういう素直な所がやっぱり可愛いって思っちゃう。
「えっと…丈くん、さっきも言ったけど…」
「分かってる、分かってる」
俺だって無制限に何でも買い与えるつもりはない。
そんなに甘やかしても小咲ちゃんの為にならないことくらいは分かってるつもりだ！
「えへへお兄ちゃん大好きだよ～♡実はお兄ちゃんに買って欲しい物があったんだ～」
「なんでもどうぞ！」
俺に買えるものなら何でも買って見せる！
「……丈くん？」
「も、もちろん……常識の範囲内でだけどね」
「ふふふ、大丈夫だよ！ちょっと買いにくいだけでそんなには高くないから」
「？」
「じゃあ、行くよ～付いてきて」
買いにくい？何が欲しいんだ？
そのまま、小咲ちゃんについてエスカレーターで上の階へと移動していく。
しかし、何が欲しいんだ？洋服やらコスメやら女の子が欲しそうな物が買える階はもう通り過ぎちゃったけど
「ここだよ～」
そんな風に小咲ちゃんの欲しいものを予想していると小咲ちゃんはある階でエスカレーターから降りる。俺と小糸もそれに続いて降りるが、ここは…
「トレーナーズ・ショップ？ここに欲しいものがあるの？」

「うん！」
俺にとっては馴染みのある場所で色々買い物に来るけど、正直ここで買えるものでプレゼントになるものがあるとは思えないけど
「あった！これこれ！これが欲しいの！」
小咲ちゃんが少し興奮気味に見ているもの、それは…
「ゴージャスボール？」
「そう！これが欲しいの！」
ゴージャスボールは黒いボディに金色の上品なラインが特徴のモンスターボールの一種だ。捕獲性能よりも居住性に力を入れたのか、ポケモンにとってこのボールに収まると居心地がいいという評判のあるボールだ。
また珍しい物が欲しいんだな。おおよそ、女の子から強請られて買うものじゃないんだけど
「お兄ちゃんには言ってなかったよね？私ね、お父さんとお母さんからポケモンを持つ許可が貰えたんだ～」
「そうなのか！おめでとう！」
「えへへ～ありがとう～」
この国ではポケモンを持つことは１０歳から許されている。ただし、成人するまでの間は親もしくは保護者からの許可を得ることが条件だ。
そのため、ポケモンを子供に持たせるかどうかは各家庭によって異なる。ポケモンの力や危険性などを考え成人するまで持たせない家もあれば幼い頃からポケモンに触れさせる家もある。これに関しては教育方針の違いとしか言えない。
それから、単純にポケモンの育成費用の問題などで持つことができない場合もある。
そして福丸家だが、今時珍しく両親ともにポケモンを持っていない上に教育に厳しい家だ。そのため、ポケモンを持つことを許すには学業で一定以上の成績を残すことを条件にしていると小糸から聞いたことがある。
「ここまで長かったな～私、勉強苦手だったから苦労したよ～」

「…うん。小咲、勉強頑張ってたもんね」
「えへへ～ありがとう！……でも不思議なんだよね～お姉ちゃんみたいに私立に合格した訳じゃないのになんで許してくれたんだろう？」
「それ私も気になってた。なんでだろうね？」
　あー……その理由は多分、小糸の中学生の時の姿が原因だと思うけど……今は言わないでおくか
「何か心境の変化でもあったんだろ。勉強だけが全てじゃないしね」
「ふ～ん？まぁ、私はポケモンが貰えるならそれでいいけどね～」
「小咲はどんなポケモンが欲しいの？」
「まだ決めてないよ～でも、やっぱり可愛いポケモンがいいかな～あ、お姉ちゃんみたいにイーブイとか欲しいかも！」
「わぁ！本当に！」
「まぁ、その辺はゆっくり考えればいいと思うよ。ポケモンをゲットする時は呼んでくれれば俺が力になれるし」
　勉強の事教えてとか言われても教えられること少ないし、ポケモンの事だったら教えてあげられるから力になってあげたい
「うん！あ、それでボールなんだけど～」
「ああ、勿論買ってあげるよ」
「やった～～お兄ちゃんありがとう！はぁ～良かった！お父さん達にゴージャスボールの事頼んでも『ボールなんてどれも同じだろう？』って言って買ってくれないんだもん」
「なんだ？おじさん達ボールに種類があることも知らないのか？」
「ま、まぁお父さんもお母さんも今までポケモンと全くかかわってこない人生だったから」
　俺からすればポケモンと関わらない人生なんてありえないけどね。
「私ね～これから出会う未来のパートナーポケモンに最高のボールを用意してあげたいんだ～」
「成程ね、だからゴージャスボールが欲しいのか」
　ゴージャスボールはゲットに向いているボールではない。だけど、その代わりゲットに成功さえすればポケモンにとって最高の住居となることは間違いない。小咲ちゃんは自分なりに色々、調べてこの

ボールの存在にたどり着いたんだろうな。
「よし！それじゃあ、取り合えずゴージャスボールを……５０個位買ってこようか」
「……え？」
そうと決まれば早速会計だ！
「丈くん!!!」
会計の為にレジに行こうとする俺を小糸が無理やり止めてくる
「小糸？どうかした？」
「どうかした？じゃないよ！さっきも甘やかさないで言ったばっかりでしょう！」
「いや、でも、いざ欲しいポケモンに出会えてもボール一個だけじゃゲットに失敗するかもしれないし」
「だからって５０個なんていくらなんでも買いすぎだよ！」
「余ったら今後も使えばいいじゃん」
「お、お兄ちゃん？流石に５０個は多いかなって…それにゴージャスボールって結構高いよ？お金大丈夫なの？」
「そんな心配は無用だ！お金はちゃんと持ってきてる！」
「それってポケモンたちへのご褒美を買うためのお金でしょう！」
「大丈夫だよ！俺のポケモンたちは自分たちの事より小咲ちゃんの事を優先していいって言うから」
「そんなの分からないでしょう！」
いや、俺には分かる！きっとそう言ってくれてるはずだ！
ポケットに入ってるボールが震えながら抗議してる様な気がするけど、きっと気のせいだ！

＊＊＊

小糸との言い争いは、俺たちの姿を見て見かねた小咲ちゃんと店員さんによって止められた。結局、ゴージャスボールを５個購入しプレゼントするってことでお互い妥協した。
その後、小糸たちは買い物を終えたみたいなのでそのまま解散し、

俺は本来の目的だったポケモンたちへのご褒美としてポケモン用のお菓子と木の実をいくつか購入して帰宅した。
しかし、改めて今日の俺の事を振り返ってみると
「…やっぱり、５０個は多すぎだったか」
Ｐｒｒｒ…
うん？電話？…小糸か、もう反省したからお説教は勘弁して欲しいんだけど
「もしもし？」
『…あ、丈くん？』
「ん。どうした？」
『…え、えっとね……さっきはごめんね』
「……え？何の事？」
まじで心当たりないんだけど
『だ、だから……折角、小咲にプレゼント買ってくれたのに…私、あんな態度ばっかりで』
「あーそのことか…良いんだよ。どう考えても小糸の言ってることの方が正しかったから」
今になって考えてみれば、ゴージャスボール５０個プレゼントはどう考えてもやりすぎだった。
あの時は、小咲ちゃんが運命的な出会いをしたポケモンをゲットできるように念のため念のためと考えすぎて、あんな行動を取ってしまったけど、あれは明らかに俺の方が悪い。気に入った人の事はとことん甘やかしてしまう俺の悪い癖だ。
『で、でも！』
「小糸」
『…う、うん』
「俺は本当に気にしてないよ。むしろ感謝してるんだ」
『…え？』
「小糸の言う通り、甘やかしてばかりだと小咲ちゃんの為にならない。分かってるんだけど、あの子を見ると無意識に甘やかしちゃいそうになるんだよ」

『知ってる…昔からずっとそうだもんね』
…そんな昔から甘やかしてましたっけ？
「と、とにかく俺がこれ以上、小咲ちゃんを甘やかすと本当に良くない影響を与えるかもしれないから小糸には俺が何か間違ってることをしてたら、止めてくれる存在でいて欲しいんだ」
『…丈くん、自分で治す気はないの』
「気負付けようとは思うけど、知っての通り俺は色々と欠点の多いやつだから、小糸に支えてもらわないと困るんだよ」
本当に俺はポケモン関連の事や体力勝負ならそこそこ自信あるけど、それ以外には出来ないことの方が多い。その位の自覚はある。
『…もう！本当に丈くんは私がいないとダメダメなんだから！』
「ああ、小糸がいないとほんとダメダメだわ」
『えへへ、そうでしょう！……え？うん分かった』
「小糸？」
『あ、ごめんね丈くん。小咲が今日のお礼言いたいって言ってるから代わるね』
お礼はさっき言ってもらったのに結構律儀だな
『お兄ちゃん！プレゼントありがとう！』
「うん。どういたしまして」
『ところで、お姉ちゃんとちゃんと仲直りできたの？お姉ちゃんってばお兄ちゃんと分かれてから、言いすぎちゃったかもとか怒ってないかな嫌われてないかなって泣きそうな顔でって…わ！お姉ちゃん！何するの…』
「……」
『も、もしもし！丈くん！』
「えっと、小咲ちゃんは？」
『もう用は済んだから大丈夫みたいだよ！』
「そうか…ところでさっき小咲ちゃんが言ってたことなんだけど」
『な、何でもないから気にしないで！』
「…ふーん」
『…な、なに？』

「いや？俺に嫌われてないか泣くほど心配だったのかなって思って」
『な、泣いてなんかないもん！もう！丈くんの意地悪！』
小糸はそう言うと、電話を切ってしまった…暫くの間はこのことをネタにしてからかってみようかな？あんまり何度もやると本当に泣いちゃうからあくまで程ほどにね。

重大発表

ここはバトルスタジアム、２８３プロが契約しているポケモンバトル専用の施設だ。
俺は学校を終えた後、透たちを２８３プロまで送り、その足でこの施設に来ていた。
「よし！出てきてくれ！」
モンスターボールを空に向かって投げると青い光と雄たけび共にその姿を現す。
「コウガ！」
しのびポケモンのゲッコウガ
「メタ！」
てつあしポケモンのメタグロス
共に俺のポケモンの中でも上位の強さを持っている自慢の仲間たちだ
「さて、始めるぞ」
俺たちの特訓だが、この施設を利用するときには実戦を意識した1対1のバトルをメインに行っている。
分かりやすく言うと、俺が片方のポケモンのトレーナーとして指示を出し、もう片方のポケモンには自分の判断でバトルを行うというものだ。
ポケモンバトルでは、トレーナーの指示がポケモンに届かない状況になることがある。
例えば、フィールドが強い砂嵐や雨の状態になった時、相手が『ハイパーボイス』や『ばくおんぱ』の様な音波系の技を使った場合などが考えられる。
そんな状態になった時に俺の指示なしでポケモンの考えのみで動けるように特訓しておくことは割と重要だと思っている。
「じゃあ、まずはメタグロスとゲッコウガでバトルしてみようか」
「メタ！」
「コウガ！」

お！両方ともやる気満々だな
「まずは、メタグロスに指示を出すからゲッコウガは自分の判断で動いてくれ」
「メタ！」
「……コウガ」
「…そんなに落ち込むなよ。ただの順番なんだから。それにいつもお前ばっかり使ってたら特訓にならないだろう？」
「…コウガ」
渋々ながらも納得する様子を見せる。
（まぁ、どんな理由でも納得してくれたならそれでいいか）
ゲッコウガとメタグロスはそれぞれフィールドに立ち対面する。
「よし！始めるぞ。かかってこい！」
「コウガ！」
ゲッコウガは合図とともに右手に水の手裏剣を出し、投げつけてくる。
（『みずしゅりけん』か…それなら）
「メタグロス『てっぺき』だ」
メタグロスは『てっぺき』で防御力を上げ、『みずしゅりけん』を正面から受け止める。メタグロスは元々防御力の高いポケモンだ。その上、防御の上がった状態なら簡単には倒されはしない。
「次はこっちから行くぞ！『バレットパンチ』」
「メタ！」
メタグロスは目にも止まらない弾丸のような速く硬いパンチを放つ。それに対し、ゲッコウガは攻撃が来た瞬間に体全体に薄い膜を張り、攻撃を受け止めるとそのまま羽を生やしたかのような軽やかな動きでメタグロスを攻撃し、その反動を利用して距離をとる。
（『まもる』で防御して、『アクロバット』で攻撃をした上で後方に退避したか。メタグロスの技が物理系の物が多い事を知っているからこその対応だな）
「…やってくれるな」
メタグロスから距離を取ったゲッコウガは、そのまま休むことなく

攻撃の態勢に出てくる。今度は口から強力な威力の水『ハイドロポンプ』を放出する。
「『いわなだれ』で受け止めろ！」
メタグロスの上空より現れた複数の岩を自身の前方に落とすことで『ハイドロポンプ』を受け止める。
「一気に攻めるぞ『こうそくいどう』からの『かみなりパンチ』だ！」
メタグロスは自身の体重を軽くし、ゲッコウガの真横に高速で移動すると前足に雷を纏わせ殴りつける。
「…こ、コウガ！」
ゲッコウガは何とか攻撃を耐え抜き、よろよろとしながらも立ち上がる。
だが、効果抜群の技を食らったことでかなりのダメージを受けている様子だ。
ゲッコウガは体をふらつかせながらも口から煙を吐き出し、フィールドを煙で覆う。
（これは『えんまく』…視界を塞がれたか）
すると、突如煙の中から、複数の影が上空に飛び出してくる。
『かげぶんしん』したゲッコウガたちは空中に飛び出した瞬間に右手を上げ『みずしゅりけん』の構えを取ろうとする。
（『えんまく』で視界を塞いだのは『かげぶんしん』の発動をばれないようにする為か…だけど甘いぞ！）
「『スピードスター』だ！」
メタグロスから発射された星形の光線がゲッコウガの本体を捉え、他の分身たちは全て消えてしまう。
「止めの『アイアンヘッド』だ！」
上空より落ちてくるゲッコウガに向かい、メタグロスの『アイアンヘッド』が炸裂しゲッコウガはフィールドの外にまで吹き飛ばされ目を回し倒れる。
戦闘不能だ。

「お疲れさん、メタグロス」
俺はメタグロスに労いの言葉をかけた後にゲッコウガに近づきポケットの中から取り出したげんきのかけらを口の中に入れる。
戦闘不能になっていたゲッコウガは元気を取り戻し、立ち上がる。
「ゲッコウガもお疲れ……さてと、さっそくだけど今のバトルは良い点と悪い点がそれぞれあったから、そこから振り返ってみよう」
俺はゲッコウガに今のメタグロスのバトルのいい点と悪い点を説明する。
「まず、良い点からだ。
『まもる』からの『アクロバット』だけど、あれは良かったよ。防御と攻撃をした上に物理技の届かない場所までの移動までこなせていた。メタグロスの特徴をちゃんと理解しての行動ができていたと思う」
「コウガ！」
まぁな！とばかりに胸を張るゲッコウガ
（…ここからは酷評だけど）
「次に悪い点だけど
やっぱり最後の『かげぶんしん』と『みずしゅりけん』の連携技だな。『えんまく』を張った後に『かげぶんしん』する所までは悪くはなかった。
…ただ、『かげぶんしん』をしたことで攻撃が当たらないと思って油断してたろ？」
「……コウガ」
やっぱり図星か
「『みずしゅりけん』を使うなら『かげぶんしん』をして姿を見せる前に準備しておいた方が良かった。こっちを『かげぶんしん』で困惑させるつもりだったんだろうけど、『スピードスター』みたいな必中技を持っていれば簡単に対応されるから注意しろよ」
「コウガ！」
ゲッコウガは了解！とばかり元気よく返事をする。
こいつは昔からそうだ、自分が強くなるための助言はちゃんと聞いてくれる。

（『かげぶんしん』で数を増やして『みずしゅりけん』でとどめを刺す。これは、俺たちの象徴のような技ではあるし、プロの舞台でも通用する。ただ、それは正しいタイミングで使えばこそだ。決して無敵の技じゃない。その事を今のうちに再確認できてよかったかもな）
「さて、少し休憩したら、再開するぞ。今度はメタグロスが自分の判断で動いてみてくれ」
「コウガ！」
「メタ！」

＊＊＊

『やは～重大発表がありま～す♡』
『丈くんの部屋で皆、待ってるから早く帰ってきてね！』
『はやくこーい』
『待ってるから』
　スタジアムでの特訓を終え、帰路についているとチェインに４人からこんなメッセージが届いていた。
「重大発表って、何だろう」
　まぁ、文面から見て悪い事ではないはずだ。少なくとも４人にとってはいいニュース何だと思う。
「…なんだか、色々考えてたら本当に気になってきたな」
　コンビニにでも寄って飲み物でも買っていこうかと思ったけど、偶にはまっすぐ帰ってみるか。

＊＊＊

「あ、丈一郎」
「…透？」
　家に向かって歩いているとビニール袋を片手に持った透と出会った。
「俺の部屋で待ってるんじゃなかったの？」

「そうなんだけど、おばさんも居なかったし折角だから皆でご飯作ろうってことになったんだ。シェフ樋口とシェフ小糸ちゃんがハンバーグ担当でシェフ浅倉とシェフ雛菜がサラダ担当ね」
「ははは、妥当な人選だ！それ、円香が決めただろう？」
「…そうですよー樋口だけじゃなくて丈一郎まで私と雛菜の事信用しないんだ？」
　透は少しむくれた顔で睨んでくる。
　信用はしている。ただ、その方が安全だと思ってるだけだ。実際、透や雛菜に料理を任せると3回に1回位の割合でちょっとした失敗することがある。安全策を取るなら円香と小糸になるってだけだ
「そんなことないよ。透たちもサラダ作ってくれたんだろう？感謝してるって」
　俺はそう言って、透の頭に手を伸ばして撫でる。
　他の3人の頭を撫でるときにも思うけど、本当にみんな髪さらさらだな。
「もっと撫でろー褒めろー」
「よーし！透サイコー！流石、俺のファースト幼馴染み！未来のスーパーアイドル！」
「えへへ……あれ？私がファースト？樋口は？」
「うん？円香はセカンドじゃない？最初に会ったのは透だったってうちの親が言ってたし」
「そっか……私が最初なんだ」
　誤差の範囲だけどね。そもそも二人とはどんな出会い方をしたのかすら覚えてない。物心ついたころには透と円香とは一緒だったから、正直どっちが最初でも特に何かが変わるってことはないんだけど…
　まぁ、透の機嫌がよくなったからいいか。
「それで、何買ってきたんだ？」
「うん？あれ？何だっけ？」
「…いや、俺に聞かれてもな。袋何が入ってるんだ？」
　透は袋の中に入っている物を確認する。

「ああ、思い出した。ドレッシングなかったから買いに行ったんだった」
「あーそりゃ悪かったな。いくら？」
「え、いいよ」
「でも、それうちに置いてくれるんだろう？だったら代金出すけど？」
「いいって、丈一郎にはいつもお菓子や飲み物買ってもらってるから」
「…そうか？じゃあ、遠慮なく」
「うん。遠慮しないでいいよ。私たちも遠慮しないから」
「遠慮？何の？」
「ミックスオレもうなくなってるから、よろしく」
「…はいはい。今度、箱買いしとくよ」
「あざっす」
全く、ミックスオレとか俺はほとんど飲んでないのに何故こうも減りが早いんだ。
偶には、おいしい水にも手を付けろよ。あれ本当にミネラルたっぷりでおいしんだから
「はぁ…早く帰ろう。重大発表の内容気になるし」
「あれ？私たちがＣＤデビューするってやつ？」
この子、なんて言った？
「え、ＣＤデビューすんの？」
「うん。プロデューサーが言ってた」
「すごいじゃん！おめでとう！」
「えへへ、ありがとう」
２８３プロに所属して約１か月にてＣＤデビューか…アイドル業界に疎いからよくわからないけどこれってかなり早い方なんじゃないか。２８３プロは大手の事務所と比べて所属アイドルの数も少ないみたいだし、これ位が普通なのかな？
って、ちょっと待てよ
「…それって、ここで言っていいやつ？小糸や雛菜が発表したがってたみたいだけど」
「え？…あー……やっべ」

全くもう、本当に全くもう…なんて言っていいやら
「どうしようっか？」
それ、俺に聞いちゃうのかよ
「はぁ、仕方ない。どうせ家に着いたら雛菜辺りがフライング気味に発表してくるだろうから、それに初めて聞いたふりして反応してみるよ」
「まじで？あざっす」
雛菜相手に俺の演技がどこまで通じるかはちょっと不安だけど、やるだけやってみよう
「…そうか、ＣＤデビューか」
「え？喜んでくれないの？」
「そんな訳ないさ。喜んでるよ…ただ」
「ただ？」
「遂にこの時が来てしまったかって思っただけ」
「？どういうこと？」
「いや、大したことじゃないんだけどさ…ＣＤデビューして人気が出てきたらテレビとかにも出たりしたらさ、ファンが大勢出来て、もう俺だけの幼馴染みじゃなくなっちゃうのかもって思うと少し寂しいなと思っただけだよ」
これが、俺の素直な気持ちだ。
彼女たちがアイドルをやるなら全力で応援する。そこに嘘偽りは一切ない。でも、それとこれは少しだけ違うってだけだ。
「…寂しいの？」
「…まぁ、ちょっとだけ」
「そうなんだー……よっしゃ！」
よっしゃ？
「ちょっと、なに今のよっしゃ！って」
「ふふふ、ごめんごめん。…でも、やっと同じ思いさせてやったから」
「…どういうこと？」
「丈一郎の今の気持ちはね、私たちは何年も前から味わってるんだよ」
「……え？」

何年も前から？
「丈一郎がポケモンリーグで優勝した時から、あっという間に有名人になっちゃったからさ。近づいてくる女の子も日に日に増えていつも不安だったんだ」
確かに、中学一年生の時に全国大会で優勝してチャンピオンになってからはその手の手合いは増えていた。靴箱にラブレターなんていう漫画みたいな展開が自分に起こるなんて当時は思ってなかった。
「……悪い。全然、気づかなかった」
「あ、やっぱり？丈一郎って意外と鈍感だよね」
鈍感、か。自分では、案外分かんないもんだな。
でも……そうか。彼女たちは何年も前から今の俺と同じ気持ちになってたのか。それなのに、彼女たちは俺みたい弱音を吐くこともなく嫌な顔一つせずに大会に参加する時には弁当を作ったりして、俺のことを応援してくれていた。
「透、やっぱり俺、お前たち４人が大好きだ」
「……え？」
「今、改めてそう思ったよ」
「な、何？本当にどうしたの？」
「前から好きだったけど、今はそれ以上に好きになったってことだよ。さぁ、円香たちが待ってるし、早く帰ろう」
「あ！…ちょっと」
俺はそう言って、透の手を握り歩き出す。
彼女たちは、色々思う所がありながらもずっと俺の事を支えてくれていた。いつも応援してくれていた。それが、俺の力の源になっていたのは間違いない。
そう、彼女たちがいたから、俺はここまで来れたんだ。
…なら、今度は俺の番か。何ができるかは分からないけど、出来ることは全てやって彼女たちの力になる。俺は改めて、心に誓った。

将来

２８３プロには６つのアイドルユニットが存在する。
『ｉｌｌｕｍｉｎａｔｉｏｎ　ＳＴＡＲＳ（イルミネーションスターズ）』、『Ｌ，Ａｎｔｉｃａ（アンティーカ）』、『放課後クライマックスガールズ』、『ＡＬＳＴＲＯＥＭＥＲＩＡ（アルストロメリア）』、『Ｓｔｒａｙｌｉｇｈｔ（ストレイライト）』、そして俺の幼馴染み４人のユニット『ｎｏｃｔｃｈｉｌｌ（ノクチル）』だ。
そして、事務所に所属して約１か月、遂に『ノクチル』のＣＤデビューが決定した。
ＣＤデビューが決定してから、彼女たちは事務所側の協力もあり、今まで以上にレッスンに力を入れるようになっていた。何事にも初めては肝心だ。２８３プロとしても『ノクチル』の初めてのＣＤデビューという事で優先的にレッスンを行えるように調整してくれたらしい。
さて、そんな中、俺はと言えば・・・
「よーし！水浴びはこんなもんでいいか」
「ミロー」、「ドラ！」、「シャワ」、「ルリ～」
ＣＤデビューすると聞いた時に彼女たちの力になると一人誓ったわけなのだが、アイドルのレッスンで協力できることなど素人の俺には当然ある筈もない。
なので、彼女たちがレッスンで忙しい時には、俺がポケモンたちを預かり世話をすることにした。
といってもやっていることは、今やっていた水浴びをさせる以外だとこの子たちの好みに合わせてポケモンフーズの調合やポロック・ポフィンを作ってあげる程度のものだ。
「流石に住宅地だとできることが少ないな」
２８３プロが契約しているバトルスタジアム、あそこにはポケモンが自由に使用できるプールがある。俺がバトルの特訓で使用できるときには連れて行って遊ばせたり、少しだけトレーニングに付き合って新しい技の習得に協力したりもしたが、如何せんうちの自宅の庭で

は出来ることが少ない。
「ルリ、ルリ」
「うん？どした？」
「ルリリ～」
今後の事を考えていると、マリルリが左手でお腹を擦りながら右手で俺の服をつまんで何かを訴えかけてきていた。
…もしかして
「なんだ？お腹すいたのか？」
「ルリ～」
うーん、今はまだ４時か…夕食まで少し時間あるし、ちょっとだけならいいかな？
「ミロ～」、「ドラ～」、「シャワ～」
「あらら、君たちもなのね」
マリルリの行動を見た３匹は俺の近くまで来て物欲しそうな顔でこちらを見つめてくる。
「は～仕方ないな。まだポフィンが少し残ってるから、それで夕食までは我慢してくれよ」
「ミロ！」、「ドラ！」、「シャワ！」、「ルリ～！」
元気よく返事する４匹…本当に進化して体は大きくなったって言うのに甘えん坊な所は変わってないんだから
「ちょっと待っててくれ」
俺はそう言うと、家に戻りキッチンに向かう。
キッチンに残ってるポフィンは全部で・・・５つか。本当は明日のおやつで上げようと思ってたけど、まぁいいか。足りない分は、今日の夜か明日の放課後にでも作れば問題ない。
俺は残りのポフィンの内４つを皿に盛りつけて、再び庭に向かう。
「ほい、お待たせ」
「ミロ～♪」、「ドラ！」、「シャワ」、「ルリ～！」
ポフィンを差し出すとそれぞれ、自分の好みのポフィンを迷うことなく選び食べ始める。
「…幸せそうに食べてくれるね～」

元々、この４匹の世話をかって出たのは、アイドルになった幼馴染み達の負担を少しでも減らすっていう目的があった。だけど、久しぶりにこの子たちと戯れたり作ったポフィンを食べてる姿を眺めてるのは思っていたよりも楽しい。
正直、ポケモンたちの世話を引き受ける程度では対して役に立てていないんじゃないかとか考えていたけど
「…ま、これはこれで楽しいからいいか」
「何が？」
「うわっ！」
考え事をしているときに背後から、声をかけられ思わず変な声を出してしまった。
振り返るとがそこにはレッスンを終えたのであろう円香が立っていた。
「…なに？どうしたの？」
「い、いや…何でもない、ただ驚いただけだよ」
「？…ならいいけど」
円香は訝し気な表情を浮かべるが、特に追及することなく一応納得する様子を見せる。
「円香、レッスンお疲れ。三人は？」
「ん…小糸は居残り練習、浅倉ももう少し付き合うって言ってた。雛菜はレッスンの後、買い物に行くって言ってそれっきり」
「そっか」
小糸の居残り練習と雛菜のレッスン後の自由行動、これはもはや恒例のパターンだな。
「円香」
「何？」
「まだ、少し早いし上がっていきなよ。お茶用意するから、あとポフィンが一つ残ってるから、食べるだろ？」
「…それじゃあ、遠慮なく」

＊＊＊

「お待たせ」
　キッチンで残っていた最後のポフィンと紅茶を入れて部屋に持っていくと、円香はテーブルの前に座りプリントに何かを記入しようとしていた。
「…ありがとう」
「あいよ、それ何のプリント？」
「進路調査票…この間配られたでしょう？」
「ああ、あれね」
　うちの学校では1年から3年まで関係なく、この時期に進路調査票が配られている。
　正直、2年や3年はともかく、1年には早すぎる気もするけど学校の方針だから、仕方ない。
「今週までに提出だけど、ちゃんと書いたの？」
「もちろん、ばっちりだよ」
「本当に？言っとくけど、去年みたいに適当に書いて先生に怒られても知らないから」
「…前回の事で流石に懲りたよ。でも、今回はちゃんと書いたから大丈夫！」
「で、なんて書いたの？」
「タマムシ大学」
　タマムシ大学
　東京都内にあり、広大な敷地と様々な学部を有している日本でも有数の大学だ。
　大学内は豊かな自然に囲まれていて、本校舎以外にもグランド（サッカー場、野球場など）、体育館（アリーナ、武道場、プール）、図書館など様々な施設が配置されている。
　そして、このタマムシ大学には大きい特徴がある。それはポケモンに関する研究・育成・バトルなどを本格的に学べる学部、通称『携帯獣学部』の存在だ。『携帯獣学部』がある大学はいくつか存在するが、環境・レベルにおいてタマムシ大学よりも上の大学はこの日本には存

在しないとさえ言われている。
「ふーん、タマムシ大学ね」
「ああ、どうかな？」
「…いいんじゃない？あんたなら、ポケモンやバトル関連の事とか勉強できて楽しいだろうし」
「いや、バトル関連の学科は選ばないよ」
「…え？」
「俺が目指すのは携帯獣学部育成学科、そこを目指そうと思ってる」
　育成学科、そこで４年間勉強をし必要な単位を取れれば国家試験を受けられ合格すればポケモンブリーダーの資格を貰うことができる。俺としては、出来るだけ早いうちにその資格を取っておきたい。
「育成学科？そこって、ブリーダーとか目指してる人が行く場所でしょう？あんたの事だからポケモンバトルの勉強するつもりだと思ったんだけど？」
「まぁ、それはそれで面白そうなんだけどね」
「じゃあ、どうして？」
「少し前まではバトルの事を学べる大学に行こうと思ってたよ。だけど、今は２８３プロに所属するプロのポケモントレーナーになって、バトルする機会はいくらでもある訳だから大学でまでバトルの事ばかり考える必要はないかなって」
「…そう」
「それにさ」
「？」
「俺の両親、口には出さないけど多分、ブリーダーの資格を取って欲しいって考えてると思うんだよね」
「…ちょっと分かるかも」
「それに心配なんだと思う。今はいいけど俺がバトルで勝てなくなってプロを引退しなくちゃいけなくなった時の事をさ」
「…それって、ポケモントレーナー雇用問題？」
　ポケモントレーナー雇用問題
　それは幼い頃から、プロのポケモントレーナーを目指していた人た

ちが義務教育を終えた後、進学せずにバトルの特訓ばかり行うもプロという狭い門に入れず磨き上げてきたポケモンとトレーナーとしての能力を生かせる仕事に就職できず、無職のまま過ごしてしまう。
　近年、プロのポケモントレーナーによるバトルがブームとなり人気を集めているが、その陰で問題になっているのがこの問題だ。
「まぁ、子供のころからバトルしかしてこなかった連中がいきなり、他の仕事しろって言っても難しいよな」
　ポケモンに関する仕事って言っても決して多くはない。中には大道芸をやりながら日銭を稼いでる人もいるらしいけど、それだって楽じゃないはずだ。
　その点、ブリーダーの資格を持っておけば育て屋やポケモン専用のホテルなど就職先はいくらでも見つけられる。
「…以外」
「ん？」
「あんた、意外と将来の事考えてるんだ」
「ははは、考え出したのは割と最近だよ」
　２８３プロに所属して高校生ではあるけど税金やら確定申告の事とか色々、面倒な手続きが増えた。
　そうすると、嫌でも現実が見えて将来の事とか考えることが増えてくる。
「円香も一緒の大学にしない？タマムシ大学なら色んな学部があるから円香の気に入る学部もあると思うし、透も誘ってさ、３人でキャンパスライフを楽しむっていうのもいいと思うんだけど」
「…まぁ、考えておいてあげる」
　俺としては、それが理想だな。
　小糸や雛菜も俺たちがいれば多分、次の年に同じ大学に来るだろうしそうすれば、また５人で一緒だ。
「っと、長話しすぎたな。紅茶、さめる前にどうぞ」
「ん」
　円香は紅茶をひとすすりした後、ポフィンを食べ始める。
「…おいしい」

「ははは、だろう？」
俺の作ったポフィンを一口食べると、円香は一言そう呟く。
ポロック、ポフィン作りについてはちょっと自信があるのだ。小学生の低学年の頃から、やり始めたこともあってそこらのトレーナーが作るものよりもいい出来であるという自負もある。
「はぁ、どうしてポロックやポフィンは得意なのに他の料理は全然できないの？」
「ぜ、全然ってことはないだろう！カレーだって作れるぞ！」
「それ以外は？」
「……」
「ほら、言い返せない」
…そうなんだよな。何故だか分からないけどポロック・ポフィン・カレーだけは人並み以上のものが作れるのに何故か、他の料理は一切できない。
例を出すとおにぎりを作ろうとしても、普通の手順で作ったはずなのに不思議な力が働いて最終的に見た目は普通なのに口に入れた瞬間、吐き出してしまいそうな程まずいものが出来上がってしまうのだ。
「はぁ～そんなことで大丈夫なの？」
「何が？」
「大学生活、タマムシ大学はここから少し離れてるし家を出たら一人暮らしになるでしょう？」
「あ」
完全に盲点だった。大学生になったら実家を出るのはほぼ確定してる。
特定の料理しか作れない俺じゃ、コンビニ弁当やスーパーの惣菜を買うしかなくなる。
「一応言っておくけど、コンビニ弁当だけじゃ健康に悪いからね」
ですよねー
しかし、そうなってくると
「…透に誘われたあの話、そろそろ真剣に考えてみるかな」

「浅倉に？」
「ああ、高校卒業したらシェアハウスしないかって誘われてるんだ」
「……え？」

＊＊＊

「ああ、高校卒業したらシェアハウスしないかって誘われてるんだ」
「……え？」
……え？シェアハウス？透と丈一郎が？一緒に暮らす？
……何で？待って……何時の間にそんな事に？……そんなの聞いてない
「円香？」
……駄目だ。頭の整理が追いつかない。
「おーい」
「……いつ」
「？」
「…いつの間に決めたの？と…浅倉とシェアハウスするって」
自分の声だけど、震えながら言っていることは自覚できた。
まさか、こんなに動揺するなって……透と丈一郎がそういう関係になるかもしれないってずっと分かっていた筈なのに
「あれ？透から聞いてない？」
「聞いてない」
「そっか…去年の進路指導の後だよ。二人で先生に怒られた帰りに卒業後どうしてるかなって話になって大学にしろ就職にしろ通う場所が近いなら一緒に暮らさないかって話しになったんだよ」
去年……そうか……そんなに前から
「まぁ、具体的には何にも決まってないけどね」
何も決まっていない……だけど、透は冗談で一緒に住もうなんて提案はしない筈だ。この2人には一緒の場所に暮らす意思は既にある。
あとは、住む場所や家具なんかを揃えれば特に問題なく一緒に生活を送るだろう。普段から部屋の中で抱き着いたり、外でも手をつない

で歩いたり平気でする2人の事だ。一緒の家に住めば自然とそういう関係になっていくことは間違いないと思う。
「円香はどう思う？」
…なんで、そんなこと私に聞くんだろう。
これは、透と丈一郎の将来の問題……そこに、私の居場所なんてないのに
「…いいんじゃないの？2人で決めたことなんでしょう？…知らないけど」
そう、私は何も知らない。これだけ長い付き合いなのにそんな大事な事すら教えて貰えなかった。
ずっと…ずっと…一緒だった。子供の頃から一緒に過ごして、一緒に遊んで、これから先もずっと一緒に居られる。そう思っていたのに
「うん。俺と透はそれでいいから、円香はどうしたい？」
「……え？」
どうしたいって？
「…どういうこと？」
「いや、だから円香はどんな所に住みたいかなって思ってさ？」
「……」
……もしかして……こいつ
「……私も一緒に暮らす事を前提に話しを進めていた？」
「うん？そうだよ。透もどうせシェアハウスするなら円香も一緒がいいって言ってたし」
「……」
…何だろう、この気持ち
透と丈一郎が私を置いて行かないことに対する安堵、中途半端な情報だけ先に言って不安にさせた目の前の馬鹿への怒り、人の意見を聞かないうちからシェアハウスすることを決めていた馬鹿たちへの怒り
色んな感情が混ざり合って、逆に頭がすっきりしてきたような気がする。
…取り合えず、私が今やらなくちゃ行けないことは一つだけだと思

う。
「やっぱり、3人で住むってなると場所や広さも大事だと思うんだよね。それぞれ、希望もあるだろうから、その辺も考慮して物件選ばないと行けないし…って、あの円香？」
この言葉の足りない馬鹿に渾身の『からてチョップ』を落としてやったが、私は悪くない。

＊＊＊

「…痛い」
会話の途中にいきなり立ち上がった円香は、俺の頭上に向かって思いっきり『からてチョップ』を放つと不機嫌そうにそっぽを向いてしまった。
「何で、『からてチョップ』すんのさ」
「自分で考えれば」
うーむ、円香がなんかいつもより冷たい。
また、何か怒らせることしちゃったかな？
「えーっと、そのー、で、シェアハウスの件なんですけど」
「……」
「あ、はい。駄目ですよね」
はぁ、どうするかな？
透と二人でシェアハウスするか？いや、だけど円香一人だけ仲間外れっていうのも少し違う気がするし…一人暮らしも視野に入れておいた方がいいかもしれないな。
「ま、待って！」
俺がシェアハウスをあきらめかけると、円香は慌てた様子で待ったをかけてくる。
「……い、言ってない」
「？」
「…だから……だ、だめとは言ってないから」
「…え？」

「だ、だから、シェアハウスのこと…だめとは言ってないから」
……え？
「え、まじで？」
「あ、あんただけじゃ、浅倉の事とことん甘やかして駄目にしそうな気がするから仕方なく、本当に仕方なくだから！」
「それでもいいよ！やべぇ！めちゃくちゃ楽しみになってきた！」
そうなると、順調にいけば今から約２年後か
…ごめん、雛菜。やっぱり留年はなしの方向で行かせてください。
「…真田、言っとくけど私が一緒にいる以上、あんたにも浅倉にも自堕落な生活は遅らせないから」
「ああ、当然できることは手伝うよ」
「…そう、言質取ったから。ポケモンたちの世話以外にも掃除とかやってもらうから覚悟しておいて」
「お、おう」
手伝う気はちゃんとあるけど、言質取ったって実際に言われるとちょっと怖いな。
「それから、住む場所だけど、私たちが一緒に住むってなったら雛菜や小糸も来たいって言うの目に見えてるし、それも踏まえてしっかり場所決めないといけないから、今度１回全員で話し合う場を作る。真田も自分の意見纏めておいてよ」
「りょ、了解」
な、なんか次々と色々決まっていく。
さっきまでは、将来そうできたらいいね程度の話だったのに円香が仕切りだしてからなんか現実的な話になってきた。
…でも、なんか円香ってば生き生きしてるな。
シェアハウスは仕方なく引き受けるって言ってたのに、今じゃあ俺以上にノリノリで色々決めてる。
「真田！ちゃんと聞いてるの？」
「お、おう。もちろん、ちゃんと聞いてるよ」
「しっかりしてよ。後、真田の両親はともかく、私たちの両親…特にお父さんたちの説得には真田も協力してもらうから」

「…それ、一番難題だな」
２年後の将来への楽しみが一つ増えた。その代わりにとてつもない不安材料が一つ増えてしまった。
「ま、まぁ、おじさん達とも長い付き合いだし、最終的には許してくれる…よな？」
「…いきなりグーはないと思うから大丈夫」
「パーはあり得るってことかい！」

居残り練習

先日、透と円香と高校卒業後にシェアハウスをすることが一応決定した。色々、乗り越えることが多くて大変そうだけど…主におじさん達の説得とか

ちなみに翌日に小糸と雛菜にも俺たちが高校卒業後にシェアハウスをする予定である事を話した。

その時の反応だけど

『え～～～3人だけずる～い！雛菜も入れてよ～！』

『わ、私も！私も一緒がいい！…だ、駄目かな？』

と予想通りではあったけど2人も一緒に住みたいという事だったので将来的には5人で暮らせる家を探すことになる。

父さんに、相談したら知り合いの不動産屋さんに相談して、いくつか候補を探してくれるって言っていたので大人しく甘えさせてもらおうと思う。

だけど、それはもう少し先の話だ。

今は差し迫った彼女たちのCDデビューの一件が優先される。

今日も今日で彼女たちは学校後にレッスンに向かった。俺は何時ものように事務所までは一緒に行き、そこで彼女たちのポケモンたちを預かり、自宅に帰宅していた。

それが数時間ほど前の事だ。そして、現在

俺の目の前には少し前にネットで注文した家庭用大型プールで気持ちよさそうに泳いでいる2匹のポケモンがいる。

「どうだ？なかなか気持ちいだろう？」

「シャワ～」、「ドラ～」

プールにつかりながら、気持ちよさそうに返事をするシャワーズとキングドラ

やっぱり水ポケモンには定期的に出来れば毎日でも水浴びだけじゃなく、こうして水の中で少しでも泳げる環境があった方がよさそ

うだな。
「……真田？」
「おー円香、レッスンお疲れさん。キングドラーお迎えがきたぞー」
「ドラ！」
円香を見るとキングドラは嬉しそうに近づいてくる。
ポケモンたちのこういう素直な所は本当に可愛らしいと思う。
「……ねぇ」
「うん？」
「…その大きいプールどうしたの」
円香はキングドラをモンスターボールに戻すとプールに目を目を向けながらおそるおそる聞いてくる。
「ああ、ロトムがネット通販で見つけてくれたから買ったんだ」
「ふーん。なんか見るからに高そうなんだけど？」
「ま、そりなりの値段だったかな」
「…無駄遣いしてない？」
「こういうのは必要経費って言うのだよ」
実際、少し前から水ポケモンたちが少しでも泳げるような大きい家庭用プールを探していた。
彼女たちのポケモンたちの世話をするためにも、この買い物はちょうどいいタイミングでできたと思ってる。
「必要経費って、このプールが？」
「ああ、水ポケモンたちにはただ水浴びをさせるだけじゃなくて、こうやって水の中で体を使わせる機会を与えた方が体にいいんだ」
「…そう。ポケモンについてはあんたの方が詳しいから任せるからね」
「ああ、任せてくれ。キングドラたちの世話をするのは俺にとってもいい予行練習になるしね」
「予行練習？なんの？」
「二年後に透と円香と一緒に暮らすときのための練習だよ。ポケモンたちの世話とかやれることは手伝うって約束したからね」
「っ！」

ポカ！ポカ！
「…円香、効果音の割に地味に痛いんだけど」
「……うるさい」
円香は顔を赤くしながら、弱々しく呟く。
……暴力系ヒロインは認めないって言う人も最近は多いけど俺は円香の暴力なら全て受け止めたいって思っちゃうんだよな。
あれ？俺ってもしかしてドＭ？
しかし、前回の幼馴染み会議であれだけノリノリにシェアハウスについて話してたのにいまだに照れるのか。
「…そもそも、シェアハウスの前に私たちお父さんの説得どうするのかちゃんと考えたの？」
「うぐ！」
い、痛い所ついてくるな。
実はまだ、何も考えてない。こういう時の挨拶のやり方なんて学校で教わってないし！全く！こんな大事な事を教えないなんてこの国の教育制度はどうなっているんだ！
……現実逃避しても仕方ないか
今は俺に出来ることを増やして、おばさんたちの協力も密かに取り付けて、父さんに不動産屋さんを紹介してもらって条件に合う物件を見つけてからおじさんたちに話そう。
そう、逃げている訳じゃない。外堀から埋めていくだけだ。
繰り返し言うが怖くて逃げている訳じゃない！
「そ、そういえば、小糸は？また居残り練習？」
ちなみに、透と雛菜は少し前に迎えに来た。
この間、円香にだけポフィンを上げたのが円香経由で全員にばれて（若干自慢げに）、最近じゃ透と雛菜はうちに来るたびにポフィンを食べさせてとねだってくる。
「露骨に話題反らしすぎだから……多分ね。まだ、練習してるんじゃない？」
「マジか？相変わらず、頑張るねー」
「…真田、この後時間あるなら小糸の事迎えに行ってあげて」

「うん？別にいいけど、事務所ならプロデューサーが送ってくれんじゃない？」
「…お願い」
「…ふぅ、了解」
…プロデューサー、まだまだ、好感度低いぞ
「…じゃあ、お願いね」
「あいよ。……ああ、円香」
「なに？」
「明日は確かみんな練習ないんだよな？」
「そうだけど？」
「じゃあ、学校終わったら家にこない？この間のハンバーグのお礼にカレーでも作ろうかなって思ってるんだけど、どうかな？」
「…なら、お言葉に甘えて」
「そうか！透と雛奈も来るって言ってたから小糸も来れば全員集合だな」
「小糸には真田から伝えておいてね」
「了解！」
「…じゃあ、また明日」
「ああ、また明日ね」
円香は別れを済ませると自宅に向かっていく。
よし！明日は久々に気合い入れて作るとするか！
「…シャワ」
俺が一人気合いを入れていると、少しだけ弱々しい鳴き声がプールから聞こえてきた。
一人残されたシャワーズは帰っていく円香を寂しそうに見つめる。
…先にお迎えが来て一人だけ残った幼稚園児みたいだな。
「なぁ、シャワーズ」
「シャワ？」
「こっちから小糸を迎えにいこうか？」
「シャワ！」
賛成！とばかりに元気よく返事をするシャワーズ

やっぱり人間よりポケモンの方が素直だよな。

＊＊＊

「てん、てん、てててん」

ここは２８３プロダクションレッスン室、今ここで新人アイドルで俺の幼馴染みの一人でもある福丸小糸が一人で居残り練習を行っていた。

元々、努力家の彼女ではあるが他の幼馴染みたちが帰宅した中、一人残って練習しているのは、恐らく彼女たちのユニット『ノクチル』のＣＤデビューが決定したことが大きな理由だろう。

（…しかし、集中力がすごいな。俺達がレッスン室に入ってきたのに全然気づいてない）

（…シャワー）

そう、かれこれ数分前から俺と小糸のシャワーズはレッスン室にこっそり入り、小糸の練習模様を見学していたのだが、小糸がそれに気づく気配がない。

うーん。ここまで頑張ってるともう少し、練習させてあげたい気持ちにもなるけど流石にこれ以上は体力的にもきつそうだな。

（シャワ！）

（分かってるよ。そろそろ止めようか）

「はぁ、はぁ、も、もう１回…」

小糸は、息を切らせながらも更に練習を再開しようと準備する。

流石にこれ以上は見過ごせないな。

（シャワーズ）

（シャワ？）

（ちょっと驚かせやろうか？すごい弱い威力で小糸の首筋に『みずでっぽう』うってやれ）

（シャワ！）

シャワーズは小声で了解！と返事をすると小糸の後ろへとゆっくり移動して、首筋に向かって『みずでっぽう』を発射する。

「ぴぃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

首筋に水が当たると、小糸はあまりに予想外だったのか『とびはねる』を使用したかのように大ジャンプをしながら驚く。

「よっし！シャワーズ、ナイスコントロールだ！」

「シャワー♪」

「…え？…え？…丈くん？にシャワーズ？…は！」

小糸は最初こそ動揺していたが、俺とシャワーズがハイタッチしているのを見て状況を理解できたようだ。

「も、もう！丈くんもシャワーズも何やってるの！」

「いやー小糸がなかなか気づいてくれないからちょっと悪戯してやろうかなって」

「シャワー」

「だ、だからって…もう、服びしょびしょだよ」

元から汗でびしょびしょだろうに

「だったら、ちょうどいい。練習終わりにして帰ろうか」

「え？…で、でも」

「これ以上はいくら何でもオーバーワークだよ。それにさっき、プロデューサーともすれ違ってさ、そろそろ無理やりにでも帰らせようかって話してたんだ」

時間的にも練習量的にもそろそろタイムアップってことだな。

「……うん、分かった」

「それじゃ、汗流してきなよ。家まで送るからさ」

「う、うん。ちょっと待っててね」

「シャワー！」

小糸は、そういうとシャワー室へと向かっていく。

「待て」

「シャワ？」

小糸について行こうとするシャワーズの尻尾を掴み呼び止める。

「この床を見たまえ」

「……」
シャワーズの撃った弱めの『みずでっぽう』は確かに小糸の首筋に命中した。しかし、小糸の予想外の『とびはねる』により、水は床中に飛び落ちてしまっている。
まぁ、要するに何が言いたいかと言うと
「小糸がシャワーを終わらせる前に2人で掃除しようか？」
「……シャワ～」
「そんなに嫌そうな顔すんなって、2人やればすぐ終わるから」

数十分後

「えと…丈くん待たせてごめんね」
シャワーを浴びた小糸が着替えを終えて戻ってきた。
俺も掃除用具を片付け終わったばかりだったから、ちょうどいいタイミングだったな。
「あれ？シャワーズは？」
「ボールの中だよ。ちょっとお疲れだったみたいでさ」
「そうなの？…待たせすぎちゃったかな？」
待たせすぎたっていうか…こき使いすぎたっていうか
レッスン室のバケツを出したときに水を汲みに行くのが面倒でシャワーズに『みずでっぽう』を使ってもらって蛇口代わりにしたり、雑巾がけ手伝わせたから、ちょっと怒ってボールの中に逃げちゃった。
…明日は、シャワーズの好きなポフィン作ってあげよう
「丈くん？どうかした？」
「いや、なんでもないよ。それより早く、帰ろう」
「う、うん？」
プロデューサーに小糸を連れて帰ることは伝えてあるし、このまま帰って問題ないだろう。
そう判断した俺たちは事務所を出て外に出る。
今の時間は…19時30分か、ここから小糸の家まで送るとちょっ

と遅くなるな。
「よし、ショートカットして帰るか！」
「え？」
「出てきてくれ、ボーマンダ」
俺はポケットからボールを一つ取り出して空に向かって投げる。
ボールは空中で開き、そこからボーマンダが飛び出してくる。
「ギャア！」
ボーマンダはボールから出ると俺たちの隣にゆっくり着陸する。
「……え？……丈くん？なんでボーマンダ出したの？」
「今から、電車に乗って帰ると遅くなるからね。後は分かるだろう？」
俺はそう言うと、小糸を脇に両手を入れて抱える。
「ぴぃえっ！丈くん！も、もしかして！」
「空を飛んでけばあっという間だからさ」
そのまま、小糸を抱えてボーマンダにまたがる。
ボーマンダなら小糸と俺を乗せても余裕だろう。
「よし！ボーマンダ、ゴー！」
「まままままま待ってーーーーーーー」
小糸の願いもむなしくボーマンダは上空に上昇し、一気にスピードを上げて飛行していく。
「ぴぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ」
暫くの間、空の上で小糸の特徴的な悲鳴が轟いていた。
…あんまり、大声出してると舌噛むぞ。

＊＊＊

ボーマンダに乗って、空を飛んで移動したことによって時間を大幅に節約することに成功し、福丸家の目の前に到着した。
だが
「もう！もう！もう！もう！」
「ケンタロス？」
「ちっがーーーーう！」

ぷんぷんという効果音が聞こえそうな程に小糸は激怒していた。
本人の了解を取らずに上空飛行はやりすぎだったかな？
しかし、不思議だ。小糸は怒っていてもあんまり怖くない。むしろ、可愛らしくすら感じる。
「丈くん！聞いてるの！」
「うん？あー聞いてる聞いてる」
「もう！」
うーん、小糸怒ってるなー
でも大丈夫かな？この時間に福丸家の前で大騒ぎしていたら
「小糸！こんな時間に何騒いでるの！」
「ぴぃ！お、お母さん」
外で小糸が大騒ぎをしているのが聞こえたのか小糸のお母さんが玄関から飛び出してきた
「あら？丈一郎君もいたのね？」
「こんばんはー」
おばさんは俺が一緒にいるのを見ると顎に手を当て何かを考える様子を見せる。
「…そう、原因は丈一郎君なのね」
「……」
…事実だけど、その納得のされ方はなんだか不本意です。
「ほら、小糸もその辺で、丈一郎君に常識が欠けているのはあなたもよく知ってるでしょう？」
「そ、それはそうだけど」
「だったら、許してあげなさい。丈一郎君に最初からそういうことを求めることのほうが間違っているわ。それよりも今後どうしたら改善できるのかを考えたほうがいいわよ」
俺が悪いのは流石に分かってるけどその説得の仕方は…いや…甘んじて受け入れるしかないけども
…話題を俺の事から少し変えたいな
あ、そうだ。おばさんがいるならちょうどいいかも
「小糸、おばさん、プロデューサーから今後のアイドル活動の件で話し

たいことがあるって言ってたんだけど」
「っ！」
小糸？
「…ねぇ、丈一郎君？小糸？」
「はい？」
「……」
「プロデューサー？アイドル活動？一体何の話しかしら？」
「…え？」
あれ？俺、もしかして何かやっちゃいました？

家族会議

「プロデューサー？アイドル活動？一体何の話しかしら？」
「…え？」
小糸がアイドル活動をしていることを知らない？
そんな馬鹿な……いや、待てよ。そういえば、以前、宣材写真を撮った帰りにファミレスで
『ははは、まぁ俺だけじゃなくて皆の親たちもライブとか見に行きたがるだろうしね。その辺の連絡はちゃんとしておかないと』
『っ！』
あの時の小糸は明らかに動揺していた。何か隠し事があることは全員が察していたけど小糸が話したがっていないみたいだったからあえて気にしないようにしていた。
しかし、おばさんが小糸がアイドル活動をしていることを知らないこの状況や小糸の態度から見ても、多分、間違いないと思う。
「まさか…小糸？」
「……」
参ったな…どうやら、当たりみたいだな。
小糸があの時から隠していた秘密…それは親に内緒でアイドル活動をしていたという事か。
「小糸、どういうことか説明しなさい」
「……え、えっと……」
おばさんに詰め寄られ、秘密がばれた恐怖からか罪悪感からか見ていて可哀そうになる程に小糸は動揺していた。
「…はぁ、いいわ。取り合えず中に入りなさい。話はそれからよ」
「……」
「小糸、早くしなさい」
おばさんに催促されるが、小糸は顔を下に向け、俺の服を掴みながら一歩も動けずにいる。
…駄目だな。この状態の小糸を一人にしておくことは俺には出来そうにない。

「おばさん、俺も上がらせてもらっていいですか？」
「…丈一郎君、小糸を送ってくれてありがとうね。悪いんだけど今日は帰ってもらってもいいかしら？」
「そう言わずに、お願いしますよ。それに、俺と小糸は同じ事務所に所属していますから色々、小糸の知らないことや把握していないことにについてもお答えできると思います」
　これは、嘘じゃない。ＣＤデビュー前でレッスンばかりの小糸よりも実際にプロデューサーと一緒に大会に赴いたり、取材などを受けいくつかの仕事をこなした経験のある俺の方が理解している点もある筈だ。
「それに」
「？」
「俺がこの状況で小糸を置いて一人で帰らないことはおばさんも分かってるでしょう？」
　俺が真っすぐ、おばさんの目を見ながら言うと、おばさんも俺の目を見つめてくる。互いに目を逸らすことなく数秒程黙る。
　そして
「は～～分かったわ。二人とも上がりなさい」
「！」
「あざっす！」
　よし！取り合えず第一関門突破！
　いや～よかった！これで駄目なんて言われたら、最悪の場合、小糸を俺の家まで連れていくか、家の前で一晩中迷惑行為を繰り返してでも話し合いに参加させようと画策するところだった。
「…丈くん」
　不安そうに俺を見つめる小糸の頭を軽く撫でる。
「あぅ」
「大丈夫だよ。聞かれたことに正直に答えればいい」
「…でも」
「話し合いの結果どうなっても、最終的に小糸が納得できるまでは何も決めさせない。それは約束するよ」

「う、うん！」
俺は小糸の味方だ。例え、どんな隠し事があってもそれは変わらない。
「そこの２人！イチャイチャしてないで早く入りなさい！」
「ぴゃっ！」
「へ～い」
さて、どうなるかな？

＊＊＊

そんな訳で福丸家のリビング、今、ここで福丸家の家族会議が行われようとしていた。参加者は、今回の議題となってしまった小糸、そして小糸の母、最後に特別参加の俺だ。
おじさんはまだ、仕事から帰ってきていないし小咲ちゃんは友達の家に泊まりに行っているから不参加らしい。
「小糸、まずはあなたの口から説明してちょうだい」
「…うん」
小糸はアイドルに始めることになった経緯を一つ一つ説明し始める。
まず、透がアイドルにスカウトされたことから始まり、その監視と言う名目で円香もアイドルになりそして俺もプロトレーナーとして２８３プロに所属したこと、それを追う形で雛菜と一緒に面接を受け合格したこと。
そして
「事務所の人から貰った承諾書類に勝手にサインを書いてしまったという訳ね」
「……はい」
「小糸、あなた自分のした事のの重大さをちゃんと分かってるの？」
…褒められた行動ではないな。
小糸のした事は書類を渡したプロデューサーに…いや、２８３プロ全体に迷惑をかけることになるかもしれない。

「…まぁ、今はそのことはいいわ」
「……え？」
お？
「…何で私達に許可を取ろうとしなかったの？」
…なるほどね。おばさんが今、一番聞きたいことはそれなのか
「そ、それは……お、お母さんにアイドルになるなんて言ってもいいよっていう訳ないと思ったから……」
「……そう」
小糸の素直な思いを聞き、おばさんはゆっくりそう答えた。
「…毎日、学校が終わって…みんなで事務所に行って…レッスンを受けるのが…楽しかった。中学はみんなと違ったし、あそこに行けばわたしも、みんなと一緒に特別になれたみたいで…そしたら、どんどん言い出せなくなって……本当に、ごめんなさい」
「……」
「そ、それで…わたし」
小糸はまだ何か伝えたいことがあるみたいだ。
だけど、秘密にしていたことへの罪悪感からかなかなか切り出せずにいる。
「…小糸」
俺は小糸の手をそっと掴む。
「…丈くん」
「大丈夫だ」
俺がついてる。だから、小糸の思ったようにすればいい。
小糸は数秒間、こちらを見つめた後、改めておばさんに顔を合わせ自分の本心を伝える。
「わたし、まだ、ちゃんとした理由とかどうなりたいとか、まだ全然ないけど、それでもアイドルやってみたい。だ、だから…アイドルをやることを許して！」
…これが、小糸が今抱いている気持ちの全部か。
みんなと一緒にいたい。根底にあるものは変わっていないみたいだけど、小糸なりにアイドルっていうものに対して思う所が出来つつ

あるみたいだな。
「…そう、気持ちは分かったわ」
「……」
「気持ちは分かったけど、それではい、どうぞって許可を出すわけにはいかないわ」
…まぁ、そう簡単にはいかないよな
「まず、確認したいんだけど最近、帰りが遅かったのはアイドルの練習をするためだったのよね？」
「う、うん」
「それじゃあ、その間のポケモンの世話はどうしていたの？」
「…それは」
小糸の目線が俺に傾く。
「そう、丈一郎君ね」
「ええ、シャワーズの事はお任せください。俺が預かっている内は適切な運動、栄養のある食事、好みの味のおやつまで用意してますから」
おばさんは今までの人生でポケモンと碌に関わってきていないからな。親が育て屋でポケモンのプロトレーナーの俺の方が遥かに知識と技術があるのを知っている。だから、俺が面倒を見ているから大丈夫と言えば否定はしてこないはずだ。
「でも、シャワーズの食事代とかは」
「それも、大丈夫ですよ。その辺り２８３プロは割と寛大でポケモンたちの食事代はある程度、負担してくれているんで大してお金はかかってないですから」
まぁ、偶にいい木の実を使ってポロックやらポフィンやらを作り過ぎて２８３プロの負担金を超えて赤字になることもあるけど、基本的には問題ない。
「…そう、まぁ、いいわ」
よし！
ここまで、なかなか喋る機会がなかったからな。いても居なくても同じだったんじゃね？とか一瞬思ってたけど来てよかった！
「成績については…これも今はいいわ。まだ、テストも始まってない

から、少し様子を見るしかないし」
お！いい流れだ！
小糸は俺と違って休みの日やレッスンのない放課後とかでちゃんと勉強してるし、そんなに極端に成績が落ちることはないと思う。
「でもね」
…まだ、あるのか？
「そもそも、私には小糸がアイドルに向いているとは思えないのよ」
うん？
「何で？小糸はアイドルに向いてるでしょう？」
「え？」
２人は同時に驚いたようなリアクションを見せると俺の事を凝視してくる。
うーん、２人同時に真っすぐに見つめられると少し照れるな。
「丈一郎君、照れてないで、どうして小糸がアイドルに向いていると思うのか教えてくれないかしら？」
…俺って、そんなに分かりやすいかな？俺の身近な人って、みんな俺の考えてること簡単に当ててきて少し怖いんだけど…って、いやいや、今は小糸の事だな。
「小糸たちがアイドルになってから、俺なりにアイドルの事を調べてたんです」
俺がアイドル活動で対して役に立てるとは思わなかったけど、それでも何か出来ることはないかと思って、せめてアイドルについての知識だけはつけようと最初は考えた。知識は武器になる。それはどんな業界でも同じはずだ。
「それで、俺なりにアイドルの事を色々、調べてどんな子がアイドルに向いてるのかアイドルに求められてることは何なのか考察した結果なんですけど」
「……」
注目している２人に俺は堂々と自分の考えを告げる。
「正しい答えなんて分かりませんでした！」
「……は？」

…一瞬、２人がこおり状態に陥ったのかと思った。
やだなーおばさんは兎も角、小糸のこんな冷たい声聞きたくなかった。
「ちょっと待って！ここまでの会話一体何だったの！」
「ああ、すいません。言い方が良くなかったかな？」
いくら何でもちょっと、端折り過ぎたか？
「アイドルについて調べて見ると、世の中には色んなアイドルがいることを知ったんですよ。他事務所ですけど、ネコミミやらウサミミを付けた動物みたいなアイドル、厨二全開のアイドル、教会のシスターに忍者アイドルなんてのもいました」
ポケモンバトルでもトレーナーによって違いはある。パワーでごり押ししてくる人もいれば、防御に徹してカウンターを狙う人もいる。それぞれに個性があるのはどこでも一緒なんだろう。
「でも、そんなアイドルにも一つ共通することがあると思ったんです」
勝ち負けを要求される時もあるとは思うけど、ポケモンバトルの様に勝ち負けだけを競うのがアイドルじゃない
「それは…そのアイドルを見ていたい応援したいって素直に思わせてくれるところだと思います」
それが、俺なりに考えたアイドルに求められている事だ。
正直言うと、この事が分かった時、アイドルって面倒だとも思った。
ポケモンバトルはどんな勝負をしても最終的に勝ちさえすれば色々な人に褒めてもらえる。現にプロにデビューする前は色々言われていた俺がプロでも活躍すればそれだけでアンチ意見がめっきり減ったのが証拠とも言えるだろう。
「小糸は、その見た目や努力家な所を含めて見ていると凄く応援したいって思わせてくれるところが凄い魅力だと思うんです」
「…それは…」
おばさんはそれを否定できない。それはそうだ。だって、家族として俺よりも近くでその姿を見てきたはずなんだから
「それって、アイドルにとって凄い武器になると思います」
「……」

大きな声では言えないけど俺は四人の幼馴染みの中で誰を一番応援したいかって言われると、どうしても小糸の名前を一番にあげてしまう。
他の三人が努力していないってことじゃないけど、目に見えて一番頑張ってるのは間違いなく小糸だ。そんな姿を見てると、どうしても頑張って欲しいと思ってしまうのが人情だ。
「そんな訳で改めて最初の結論に戻ります。俺は小糸がアイドルに向いていると自信を持って言えます。それに小糸もアイドルをやってみたいと思ってるなら、俺は応援したい」
小糸がどんな理由であれ、アイドルやってみたいと思っているなら俺はそれを応援し、支えたい
「だから、どうか小糸がアイドルになるのを許してあげて下さい」
その為にも、ここは譲る訳にはいかない
「……」
おばさんは長い沈黙の後、ゆっくりと話し出す。
「勉強を疎かにしないこと、これが絶対条件です」
「そ、それって！」
「まだ決定じゃないわ。お父さんにも話さないといけないしね。…小糸、今度そのプロデュサーさんに合わせて、その上で判断します」
「う、うん！」
おばさんはそう言うが、おじさんは小糸に甘いから、おばさんの許可が出ったてことは実質来なＯＫサインと同様だ！
「…ふぅ」
やれやれ何とかなったか…
まぁ、何とかなったって言ってもあくまでもこの場はってことで、これから事務所の社長やプロデューサーに改めて説明とか色々やることは残ってるんだけどね。
「丈くん！」
満面の笑みを浮かべた小糸が俺に抱き着いてくる。
「おっと！」
最近、すっかり人を受け止めるのに慣れてきたな。

「本当にありがとう！」
「…どういたしまして」
…報酬がこれなら、また同じようなことが起こってもいいかな？
「あなた達、仲がいいのは結構だけど、あんまり親の前でイチャイチャするのは感心しないわよ」
抱きしめあってる俺達を見ながらおばさんはにやにやしながら、たしなめてくる。
…いや、あれは楽しんでるな
「ぴぃえっ！じょ、丈くん！離して！」
えー
「小糸から抱き着いてきたんじゃん」
「そ、そうだけど！お母さんが見てる！見てるから！」
「…じゃあ、後３０分だけ」
「長すぎるよ！お父さんも帰ってきちゃうから！」
「おっと！それはまずいな」
俺は小糸を離すとそのまま椅子から立ち上がると玄関の方へと向かう。
「え？じょ、丈くん？」
「そろそろ帰るよ。後は頑張って！」
「え！一緒にいてくれないの！」
いやーそれはお勧めできないかな？
この状況で俺が小糸と同じ事務所に所属してるなんて伝わったら、変な反抗心に火をつけてしまうことになるかもしれない。
「おばさんが味方に付いてくれたんだ。後は小糸の気持ちをぶつければ大丈夫だよ！結果はチェインで送ってくれよ！」
「じょ、丈くーーん！」
軽く手を振って、振り返えらずにその場を離れる。
「お邪魔しましたー」
実際、これ以上、俺がいても大して役には立たないだろうし、逆に足を引っ張る可能性すらある。そうなる前に撤退だ。

＊＊＊

ピコーン！

「お、来たな」

福丸家を出て、そのまま真っすぐ自宅に戻った俺は自室で小糸からの連絡を待っていた。

そして、たった今、運命の……運命ってのは言い過ぎか？ほとんど答えの分かってる内容だし

『お父さんからもアイドルやる許可もらえたよ！全部、丈くんのお陰だね！』

全部ね…あの子は少し、俺の事を過大評価しすぎだし自分に対しては過小評価しすぎだな

『全部ってのは大袈裟だ。小糸が勇気を出して自分の想いを伝えたから許してくれたんだと思うよ』

『…うん。ありがとう！』

それはそれとして

『明日、プロデューサーにアポ取っておいたからまずは、プロデューサーと出来たら社長にもちゃんと謝りに行こうか？』

これは、できるだけ早くやらないと本気でシャレにならない。小糸が私文書偽造等罪に問われる前に話をちゃんとしておかないとな。

『そ、そうだった！ありがとう！』

まぁ、まだデビュー前だし何とかなる筈だ。

念のために明日は俺も行くし、誠心誠意心を込めて謝れば許してくれるだろう

Ｐｒｒｒ…

電話？誰だ？…え？

『こんばんは、さっきぶりね丈一郎君』

俺に電話をかけてきたのは、さっきまで福丸家で一緒だった小糸のお母さんからだった。

「こんばんは、どうしたんですか？」

珍しすぎる…普段、向こうから電話をかけてくることなんてほとん

どないのに、用事があるとしても小糸か小咲ちゃんを経由してくるのが基本だ。俺に直接かけてくるなんて、もしかして初めてかもしれない

『…お礼が言いたくてね』

「お礼ですか？」

『ええ、丈一郎君がいてくれなかったら、小糸と本気で話し合うことは出来なかったかもしれないから』

「…考えすぎですよ。俺は少しきっかけを作っただけですから」

しかも、話し合いのきっかけは単にタイミングよく口を滑らせたことが原因だったし…今にして思うと、我ながら素晴らしすぎるほど駄目な状況で口を滑らせたもんだ。

『それでもよ。あなたが近くにいてくれたから小糸は勇気を出せたんだと思うの』

俺がいたから、小糸が勇気を出せた…それは、悪い気はしない。

「だけど、それは俺も同じなんですよ」

『え？』

「俺の知ってる小糸は、物凄い努力家で感情豊かでなんにでも一生懸命に、真っすぐに頑張り続けることができる。そういう姿に俺は勇気を貰えるし、本気で憧れているんです」

俺は、嫌いなことや面倒なことに対しては本気で努力することも向き合うこともできないからな。小糸の真っすぐな所は本当に憧れてしまう。

『……』

うん？

「…おばさん？」

『ああ！ごめんなさい！ちょっと、ぼーっとしてたわ』

電話中にぼーっとしてたって大丈夫なのか？

『そうそう！さっきは小糸の事ばかりに集中していたから、気づかなかったけど丈一郎君は大丈夫なの？』

「と言いますと？」

『余計なお世話なんじゃないかとも思ったんだけど…シャワーズたち

の面倒まで見ていたら丈一郎君の練習時間が取れないんじゃないかなって思って』
「ああ、そういう事ですか」
　要らない心配…とは言えないか。おばさんなりに小糸だけでなく俺の事も心配しての質問なんだろうし
「俺の練習がある日はシャワーズたちもバトル用の施設に一緒に行って施設内にあるポケモン用のプールなんかで自由に遊んでもらったりしてますから、練習時間も大して取られてないですし問題ないですよ」
『そうなの？』
「それに自分以外のポケモンの世話をするのは将来、ブリーダーの資格を取ろうと考えてる俺にとっては、いい練習になりますから、ＷＩＮＷＩＮの関係だと思ってくれていいです」
　実際の所、割と楽しいんだよね。シャワーズたちの世話をしたり、好みの味のポロックやポフィンを試作したりするの
　折角、楽しくやっているのにここで辞めたりしたら、かえって調子を下げるような気さえする。だから、今はこのままでいいと思う。
『でも、もし、もしもよ？丈一郎君が小糸たちやシャワーズたちの面倒を見ていたことが原因でバトルに負けたなんて事態になったらって考えると…』
　そうなった時、俺達の関係が壊れてしまうかもしれないってことかな？
　だけど
「ありえない、絶対あり得ないことですけど、もし、俺が負け始めてそれを小糸たちのせいにするような事を言い出したら、例えどんな手を使ってでも俺から小糸たちを引き離してください」
『…本気なの？』
「もちろんですよ。自分のふがいなさを人のせいにするような奴は彼女たちの傍にいるべきじゃない」
　そんな奴といても不幸になるだけだ。彼女たちを傷つけ悲しませる、それだけは絶対にしたくない。

「だから、俺は絶対負けませんよ」
今の状態で俺が負ければ、誰がなんと言おうときっと彼女たちは責任を感じてしまうだろう。だから…絶対に負けない。彼女たちに悲しませないためにも勝ち続けて見せる。
『……はぁ～分かったわ。決意は固いみたいだし、もう何も言わないわよ』
「あざっす！」
『まぁ、母親としては丈一郎君が娘たちの事を第一に考えてくれてるみたいで素直に嬉しいしね…これからも小糸たちの事お願いね』
「ええ、勿論です」
それこそ、今更言われるまでもない事だ。
小糸だけじゃない透、円香、雛菜、例え何があっても彼女たち４人の味方でいることだけは絶対に変わらない

通学路

福丸家での臨時家族会議に参加した翌日、俺は何時ものように朝のトレーニングの為に近所の公園まで来ていた。
「バシャ、バシャ！」
「まだだ！最後まで力を抜かずに打ち込んで来い！」
両手にミットを付けた俺に向かってバシャーモは休むことなく連続で拳をぶつけてくる。左右の拳をそれぞれ左右のミットで受け止めるが、威力が強く体が後ろ下がりそうになるが何とか踏ん張る。
「ラストだ！回し蹴りで決めろ！」
「バシャ！」
バシャーモは体の外側から弧を描くように蹴り上げ、俺は両手のミットを前に出し、受け止める。流石にジャブの時の様に踏ん張ることは出来ず、体ごと数歩分後方へと下がってしまった。
「よし！いい感じだな」
「バシャ」
バシャーモの調子も良さそうだ。これなら次の大会は相手のタイプ次第ではあるけどバシャーモを中心に編成してもいいかもしれない。
「…ふぅ」
しかし、ミット越しとはいえ手が痛いな。一つ一つのジャブが強力だし、最後の回し蹴りの威力は強く、本気で吹き飛ばされるかと思ったぞ。受ける側はたまったものじゃないだろうな。
「…そろそろ、いい時間だな。朝のトレーニングはここまでにするか。一旦ボールに戻ってくれ」
「バシャ！」
そう言って、バシャーモをボールに戻す。
それにしても
「…珍しく、いい時間に終われたな」
いつもなら、トレーニングし過ぎで学校開始の時間ギリギリになったりすることが多いのに、今日は切りのいいタイミングでしかも割り

と余裕のある時間にトレーニングを終えることができた。
「まぁ、いいか」
あんまり遅刻しすぎても問題だし、偶にはちょっと早くゆとりをもって学校に行くのも悪くないか。

＊＊＊

トレーニング後にシャワーを浴びて汗を流し朝食を終えて今は学校に向かっている。
いつもなら、家から学校までも遅刻ギリギリでランニングみたいになるけど、今日は違う！
時間に余裕を持ち通学路の景色をのんびり楽しみながらここまで来れた。
……余裕を持つ事も大切だな。見慣れたはずの景色なのにのんびり歩いていると走っているときには見えない物が見えてきそうだ。
それにこの時間に行けば遅刻もしないから、俺の内申点的にも助かる。いい事ずくめだ。
「あ！丈くん！おはよう」
おっと！更にいい事が連続で起きたな
「小糸、おはよう」
「えへへ♪」
小糸は笑顔を浮かべながら俺の隣に並んで来る。
…いつもより、若干距離が近い気がするけど気のせいか？
「ご機嫌だね～何か良いことでもあった？」
「だって、朝から丈くんに会えたから！」
…え？なにこの子かわいいんですけど
「……」
「…？……ぴぇ！」
俺が無言で見ていると小糸が自分の発言を思い返したのかいつもの特徴的な悲鳴を上げる。
「ほ、ほら！丈くんって朝はバトルの練習とかで会えない事の方が多

いから！そ、それに何だか昨日の今日だし、改めてお礼が言いたいなって思ってたら普段通学路じゃ会えない丈くんがいてびっくりみたいな感じがして、だ、だから」
「あー小糸、一旦落ち着いて」
「……うぅ」
　俺はそっと、小糸の頭に手を置き優しく撫でる。
「俺も朝から小糸に会えて嬉しかったよ。小糸も同じってことでいいかな？」
「……う、うん」
　小糸は少しだけ顔を赤くしながらも頷く。
　何だか今日の小糸は、いつも以上に可愛く感じる。それにいつもなら、外で頭を撫でたりしたら恥ずかしがることはあっても、こんな風に喜んだりはしない筈なんだけどな…
　アイドルを親公認で正式に続けて行くことが決まって何か心境の変化でもあったのかな？
「…えっと丈くん？どうかしたの？……そ、そんなに見つめられたら、ちょっと恥ずかしいよ……」
　…やばい…上手く言えないけど何かやばい……小糸の可愛さもやばいけど……俺の理性が変な気を起こしそうになってきてる。
「…小糸、本当に何もなかった？小糸はいつも可愛いけど何か今日はいつも以上に可愛い気がするんだけど？」
「ぴぇ！な、なんにもないってば！」
「いや、でもな…」
「ほ、ほら！そんな事より早く学校行こう！折角、早く出たのに遅刻しちゃうよ！」
　そんな大袈裟な…まだ、時間にかなり余裕があるのに
「大丈夫だよ。いざとなったら、先生たちにバレない程度の場所までボーマンダでそっとんで行けば余裕余裕」
「あれは！二度と！しないから！」
「ははははは」
「本気だからね！今度やったら本当に怒るよ！」

うーん…仕方ないな。小糸の悲鳴とか面白かったんだけどなぁ。
きっと何度か繰り返して行けば、小糸の特徴的な悲鳴を聞いた人々によって、この近隣に『空飛ぶピィの伝説』として語られていくんじゃないかと微かに期待してたんだけど
「分かった分かった。もうやらないよ……多分ね」
「絶対だから！」
やっぱり、小糸は怒っても可愛いだけで怖くないんだよな
「2人して、朝から何騒いでるの？」
「ふふ…めっちゃ注目されてるよ」
小糸と戯れていると後ろから声をかけら、振り返るといつの間にか透と円香が来ていた。
本当、偶には早く出るのもいいもんだなぁ。朝からこうやって皆に会えるなら今後は遅刻しない様に注意するのも悪くないかもしれない。
「あ、透ちゃん！円香ちゃん！」
「うっす」
「おっはー」
「おはよう」
ていうか、そんなに注目されてたのか？
それとなく、周りに目を向けると何人かの人と目が合ったが直ぐに逸らされてしまった。本当だ。結構色んな人に見られてたみたい。
「何だ？いつの間にか俺の知名度上がってたのか？」
ここが地元ってこともあるだろうけど、プロになって横浜の大会以降も何度か大会に出て優勝して将来有望なアマチュアのトレーナーから連続勝利記録を更新する期待の新人として名も売れてきている。その影響かな？
「いや、単純に騒がしかっただけだと思うよ」
「あんまり、調子に乗らない方がいいんじゃい？ミスター自意識過剰」
…一瞬で夢から覚めて現実に戻された気がする。俺の幼馴染み容赦ねぇな
「と、ところで雛菜は見なかった？」

「わたしは見なかったよ」
「うーん、私も見てないかな？樋口は？」
「見てない」
　ありゃりゃ、こりゃ雛菜だけ遅刻みたいだな。
　うーん、特に約束したわけじゃないけど何か一人だけ裏切ってしまったような妙な気分だ。
「そうか…折角なら、全員で登校したかったけど難しそうだな」
「…まだ、分からないでしょう？」
「え？」
　こりゃ珍しい、円香が雛菜の弁護をするなんて、滅多にない事だぞ。
「遅刻魔コンビの片割れが珍しくここにいるんだから、案外雛菜も近くにいるかもしれないでしょう？」
　遅刻魔コンビの片割れってひょっとしなくても俺の事かな？雛菜が遅刻していないかもと弁護をしているようで俺達２人へのダメ出しをされているような変な感覚だ。
「それじゃあ、電話してみるか」
「い、いいのかな？通学時間だけどまだ、朝早いよ？」
「学校に向かってれば電話に出るだろうし、まだ寝てるならモーニングコールの代わりになるから問題ないだろう」
「そう……かな？」
　小糸も一応納得したような反応を示す。
　うーん、どうせなら少し面白くしたいな……そうだ！
「折角だし、雛菜が遅刻するかしないか賭けてみないか？負けた方は勝った方に昼飯おごりってことで」
　まぁ、ちょっとしたゲームだ。負けたところで大して痛くもない。
　そんな俺の提案に対しての３人の反応だけど
「いいね」
「望むところ」
　透と円香は乗り気みたいだな。となると
「だ、ダメだよ！賭けなんて！」
　はは、やっぱりか

「硬い事言うなって、昼飯代を賭けるなんてこと学生なら大抵はやってると思うぞ」
「そ、そうかもしれないけど、賭けの対象になる雛菜ちゃんにも悪いし…」
「それじゃあ、雛菜には結果にかかわらず、俺が昼飯を奢るって条件ならどう？」
「え？」
　これなら、雛菜が遅刻していようといなからろうと無条件で今日の昼飯代が出る。彼女には損が一つも発生しない、おいしい話だ。
「どうかな？雛菜には損もないし、そもそも賭けの対象にされたくらいでどうこう思うタイプでもないと思うよ」
「……そ、そうだね」
　よし！小糸陥落！
「それじゃあ、どっちに賭けるかだけど「「遅刻の方で」」」はや！」
　早すぎるよ！まだ、聞いてる途中だったのに３人とも一切の躊躇いもなく雛菜が遅刻してる方を選びやがった。
「……小糸」
　さっきまで、雛菜に悪いとか言ってたのに
「あ、あはは」
　可愛いから許すけど！
「てか、円香もそっちなの？」
「私は、まだ分からないって言っただけ。確率の高い方に賭けるのは当たり前でしょう？」
　ぐう正論だな。そりゃ、雛菜の普段の生活態度から考えれば、そうなるよな。
「じゃあ、遅刻してない方は丈一郎一人だけってことで」
「……おぅ」
　いつの間にか透に締め切られてしまったので、一応これで賭けが成立した。
　元から雛菜が遅刻してないっていう大穴に賭けるつもりだったからいいけど、なんか釈然としない。

「それじゃあ、私が電話かけるから」
色々と考えてる間に円香が雛菜に電話をかけ始めていた。俺がかけようと思ってたけど、まぁ、どっちでもいいか。
『う～～～～ん……なぁ～に～円香せんぱ～い』
電話をかけ始めてから数十秒後、スピーカーにしたスマホから雛菜の眠たそうな声が聞こえてくる。
うん、これは完全に今、起きたな。
「雛菜、今どこ？」
『ベット～』
でしょうね
「雛菜、ありがとう」
「え～？なにが～？』
「あんたのお陰で今日の昼食代が浮いたってこと」
『???』
ははは、雛菜混乱してるな。
「詳しくは本人から聞いて」
円香はそう言うと、俺にスマホを渡してくる。
おぅ、ぶん投げられたな。
「えっと、雛菜おはよう～」
『え？丈先輩？え～～～～何で丈先輩が円香先輩と一緒なの～？』
「何でって、学校行く途中で会ったから。後、透と小糸もいるけど」
『透先輩も！…じゃなくて、どうして丈先輩がこんな早い時間に登校してるのって聞いてるの～」
「ああ、今日は特訓がいい時間に切りのいいとこまでやれたから、いつもより少し早く出れたんだよ」
『そんなの聞いてない！言ったでしょう～雛菜と丈先輩の遅刻同盟は永遠不滅だって～！」
おい、いつ作ったんだ。そんな同盟、初めて聞いたぞ。
「真田が遅刻しなくなったら、同盟を抜けて雛菜一人だけが遅刻することになるんだ」
だからそんな同盟入ってないって

『え～？』
「そしたら、私たちはこれから毎日４人で登校していくから、雛菜はこの先も一人で頑張ってね」
いや、今日は珍しく早く終わったけど、流石に毎日この時間に来れるかは俺としては少し怪しい。
そうすれば、この間みたいに雛菜とのんびりコンビニとかによりながら登校するのも全然ありかなって思うんだけど
『円香先輩と丈先輩のいじわる～～～～～』
俺がその事を雛菜に伝える前に雛菜は電話を切ってしまった。
てか、俺もなの？フォローするつもりはあったんだけど
「……円香、こうなるって分かってた？」
「まぁ、なんとなくはね。何年の付き合いだと思ってるの？」
「御見それしました」
やっぱり、円香は敵に回したくないな。
それはそうと雛菜の遅刻は確定か…ということは
「やれやれ、俺の一人負けか」
「いぇーい」
「ま、当然の結果でしょう？」
「ご、ごめんね！」
まぁ、仕方ないか。
ほぼほぼ負ける予感のしていた賭けだったし、そこそこ楽しめたから良しとしよう。
「それじゃあ、４限が終わったら購買に買いに行くけど皆、何が欲しいんだ？」
昼休みの購買は、それは学生たちの戦場だ。いかにして早く辿り着き、相手を出し抜き、目的の物を手に入れるのかフィジカルの強さと戦略が試される。
１年と数か月通ったことで購買のどの位置に何が置かれるのかは既に把握している。だからこそ、何を手に入れるのかを確認しておく必要があるのだ。それによってたてる戦略が大いに変化してくる。
「じゃあ、メロンパンで」

「クリームパンお願い」
「えっと、チョココロネがいいかな？」
全部、菓子パンか。どのパンもほぼ同じ場所に置かれているから、戦略も立てやすいな。
しかし、毎度思うけど、女子って本当にそれだけで足りるのかな？俺だったら絶対持たないぞ
「了解。雛菜の分は後で確認するとして、俺もその時に２～３個パンでも買っていくか」
やっぱり、男子的にはそれくらいないとね。
さて、俺は何を買おうかな？多分、雛菜も甘い菓子パンを欲しがるだろうから、甘いパンのエリアから一つ選ぶとして、その後メインの総菜パンのコーナーに行って適当に何かを買えればいいんだけど、あのエリアは直ぐに人が一杯になるからな。さて、どうするか？
「じょ、丈くん！」
購買戦場での戦略を頭で練っていると小糸が声をかけてくる。
でも、何だろう？さっきより少し顔が赤いし、緊張してる様子にも見える。
「じょ、丈くんの為にお弁当作ってきたの……食べてくれる？」
小糸はそう言うと、カバンの中から弁当箱を出して、俺に渡してくる。
「お、マジで！ありがとう！勿論、もらうよ」
小糸から弁当箱を受け取り、一旦、カバンにしまう。
というか、最初から弁当の事を言ってくれてたら、賭けなんてしなくても昼食代出したのに
「「……」」
小糸から弁当箱を受け取る俺を透と円香が冷たい目線で眺めていた。
「あ、あれ？ひょっとして今日のは皆で作った奴じゃないの？」
てっきり、また、いつもみたいに４人で作ってくれたもんだと……
あ、それだと、雛菜は遅刻してないか
「今日は、作る予定じゃなかった」

「小糸ちゃん抜け駆け？」
「ご、ごめんね！昨日の事もあったから、丈くんに何かお礼がしたくて、それで」
「昨日？」
「真田、昨日、私が帰った後に小糸の事、迎えに行ったんでしょう？その後、何かあったの？」
「あー……色々あって、一言では説明しずらい感じで」
「短く簡潔に」
　有無を言わさぬって感じだな。しかも、嘘は許さないみたいなオーラが見え隠れしてる。
「「……」」
　うぅ、無言の圧力って嫌だなぁ
　簡潔に簡潔にね。えーっと、小糸を家まで送って、俺が口を滑らせて、アイドルについて話し合って、何とか解決して、それで最後に……
　ああ、そうだ！
「色々話し合いして、おばさんから小糸の事をこれからもよろしくって頼まれた」
「ぴぃえっ！」
「「……」」
　あれ？く、空気が……俺、また何か口滑らせた？
「丈一郎、本当に小糸ちゃんに何したの？ちゃんと話して、具体的に詳しく」
「……私のお父さんにはシェアハウスの話し、いつまでも切り出さないくせに小糸のお母さんとはそういう話しするって事？へーそうなんだ」
「……こ、小糸？ちょっと一緒に説明を…」
　一縷の望みをかけて小糸の方を見るが
「えへへ……もう、お母さんってばちょっと気が早いよ…でも、もう少ししたら一緒に暮らし始めるんだし、そう考えたら…うん」
　あ、駄目だ。なんか自分の世界に入ってるっぽい。現状じゃあ、戦力にならなそう。

「ねぇ、早く話して」
「逃げようとしても無駄だから」
この後、透と円香の尋問が始まり、俺達４人とそして、この場にはいなかったけど雛菜も含めて全員仲良く遅刻しました。

２８３プロにて

ここは、俺や透たち5人の所属する事務所２８３プロダクション
本来なら、今日はノクチルメンバーはレッスンがなくここに来る予定ではなかったのだが、今朝の通学路で透と円香の尋問を受けて仕方なく昨夜の出来事と放課後にプロデューサーに会いに行く予定だと伝えた結果、５人一緒に来ることが決まった。

そして、たった今、小糸が親に無断でアイドル活動をしていたことや書類を偽造したことなどの全ての事情をプロデューサーに説明を終えたところだ。
「……なる程、事情は分かったよ」
「「「「……」」」」
俺達は、プロデューサーの言葉を待つ。
ここまで、勝手なことをしたんだ。ある程度の罰は仕方ないとも思ってる。でも、出来ることなら、小糸一人ではなく全員で背負えるものだとありがたい。
「小糸、すまなかった」
「…え？」
プロデューサーは一言、謝罪をすると小糸に向かって頭を下げた。
「な、何で？プロデューサーさんが謝るんですか？」
小糸は、困惑しながら聞き返す。
困惑するのも分かる。俺から見ても今回の一件でプロデューサーには落ち度があるようには見えないけど
「俺がちゃんと小糸の話しを聞いておくべきだったんだ。それを怠ったせいで小糸に嘘までつかせてしまった。だから、すまない」
「……」
…なるほど。そういう考え方もあるのか。
プロデューサー、この人はアイドルの事を第一に考えている。優しく、そして自分に厳しい、そんな人だ。
「これから、小糸の親御さんとはしっかり話し合わないといけない。

その前に確認させて欲しい。小糸はこの先もアイドルを続けたいか？」
　プロデューサーは頭を上げると小糸の目を真っすぐに見つめ、小糸の意思を確認する。
「はい！昨日、ちゃんと話し合って決めました。わたしは、アイドルを続けたいです！」
　そして、小糸も躊躇うことなく、真っすぐに答える。
「よし！分かった！小糸、改めてよろしく頼むよ」
「は、はい！よろしくお願いします！」
　ここが、小糸の本当の意味でのアイドルとしてのスタートラインだ。小糸はここから今まで以上に全力でレッスンに取り組んで実力を上げていく、そうすれば結果はその内ついてくる筈だ。
　……まぁ、この間みたいに練習のやり過ぎにならない様に適度に見張っておく必要はあるかもしれないけど
「プロデューサー、小糸の書類の方は大丈夫そう？」
　良い感じの雰囲気になってるけど、一応これだけは確認しておかないとな。ここまで来て、やっぱり駄目でしたなんてことには流石にならないとは思うけど
「ああ、任せてくれ。何とかするよ」
「本当に、大丈夫なんですか？」
　プロデューサーの言葉を聞くと、円香が再度確認をとる。
「こう言ってはなんだけど、ＣＤデビュー前に分かって良かったよ。今ならまだ、何とかこっちの方で処理できると思うよ」
「…分かりました。あなたの事を信じます。ただし、もしも失敗して小糸がアイドルを辞めなきゃいけないことになったら、私はあなたを許さない。それも覚えておいて下さい」
「え？ま、円香ちゃん？」
　おっとプロデューサー、チャンスだぞ。ここで約束を実行することができれば、円香の好感度が３程上昇する。失敗すれば、そこで信頼関係は終わりっていう割に合わない約束だけどね。
　好感度が上がりすぎるのは俺としては複雑だけど、せめて普通に会

話できるくらいにはなって欲しい所だな。
「お願いね。プロデューサー」
「小糸ちゃんが辞めることになったら、雛菜も一緒に辞めちゃうから、頑張ってね～」
「透と雛菜もか…それじゃあ、俺が残る理由もなさそうだし、その時は俺も辞めようかな」
「え？・え？・え？・」
　プロデューサーの事は結構好きだけど４人程じゃないし、皆がいないなら残ってもあんまり意味ない。
　幸い、プロになってからちゃんと結果を残してるし、今なら以前ほど条件の厳しいスカウトも少なくなっている筈だ。
「ま、待ってくれ！・」
「そ、そうだよ！・これ以上、迷惑かけちゃ駄目！・」
　プロデューサー、そして自分が引き金となり、この事態を生んでしまった小糸が慌てて止めに来る。
　まぁ、そこまで本気で言ったわけじゃないんだけど……２人してそこまで、いいリアクション取ってくれると、もうちょっとからかいたくなるよな。
「あー大丈夫、大丈夫、契約金は、いざって時の為に手を付けてないから。ちゃんと全額返せるよ」
　２８３プロが透たちにとって良くない場所だった時にいつでも連れ出せるようにと思って、念の為に手を付けないでいた。まさか、それがこんな形で活用できるだなんて思ってなかったけど
「い、いや、そういう事じゃなくてだな…」
　プロデューサー、本気で焦ってるな……ちょっと、面白いかも。こんなに人をからかって楽しいと感じるのは、小糸以来かもしれない。
「も、もう！・皆、いい加減にして！・特に丈くん！・わざとやってるでしょう！」
　何故、俺だけ名指しなのよ。円香と透はともかく、雛菜は俺と同じようにちょっと遊んでる感じがしたけどな
「そ、そうなのか？・勘弁してくれ…」

まぁ、結構楽しんだことだし、このくらいでやめてあげるか
「まぁまぁ、プロデューサーが約束を守ってくれたら、何も問題ないから大丈夫だよ」
「わ、分かった。任せてくれ！」
そうだ！頑張れ！プロデューサー、アイドルユニット『ノクチル』の未来は…未来があるのかどうかはプロデューサーの手にかかっているぞ！

お祝い（前編）

２８３プロでプロデューサーをからかった……いや、事情説明をした後、俺達は自宅付近のスーパーまで来ていた。
「よし、じゃあ、俺は基本的な食材取ってくるから、カレーに入れたいものや欲しいものどんどん持ってきていいぞ」
昨日、円香がキングドラを引き取りに来た時に話した、先日のハンバーグのお礼とＣＤデビューのお祝いを兼ねてカレーをご馳走するために材料を買いに来ていた。
「やは～いいの？丈先輩太っ腹～」
「それじゃあ、何かないか探しに行ってくるね」
透と雛菜はそう言うと、スーパーの中へ駆けていく。
こらこら、危ないぞー走るんじゃない
「２人は行かなくていいのか？」
「わたしはいいかな。それに、今回の事でみんなにも迷惑かけちゃったから」
「私も別にいい。それに、私がいない間に浅倉と雛菜が持ってきたものをあんたが何でも買っちゃいそうだから、ここで見張ってる」
「いやいや、俺だって何でも買ったりはしないよ……多分」
「「……」」
やめて！そんな呆れた目で俺を見ないで！
「確かに丈くん、わたし達のことすぐに甘やかしちゃうもんね。この間も、多摩デパートで小咲にとんでもない数のゴージャスボールをプレゼントしようとしてたし」
「また、そんな事したの？あんまり、皆のこと甘やかさないようにって前にも言った筈だけど」
「い、いや、あれは折角のお祝いだし、小咲ちゃんとも久々に会ったからつい…もう、小糸から散々怒られたし反省もしたから勘弁して」
「…分かった。じゃあ少し様子を見てあげる」
有罪判決、ただし執行猶予付きってところだな。
でも、いい加減俺も学習しないと駄目だな。ただ、甘やかしてばか

りだと良くないのは間違いない。分かってはいるんだけどなぁ。それでも無意識にやってしまう……仕方ないよ、人間だもの

＊＊＊

「丈くん、材料揃った？」
「ああ、大体はね」
カゴの中にはにんじん、じゃがいも、玉ねぎ、豚肉とカレーに使う基本的な食材が揃っている。あとは、折角お祝いと言う形で作る訳だし普通のカレーとはちょっと違う感じのカレーを作りたい。何か特別な食材でもあればいんだけど、どうするかな……家にヤドンの尻尾が人数分あるけど、量的にも見た目的にもあんまり４人から受けが良くないしな。
「ただいまー」、「おまたせ～」
おっと、２人も戻ってきたか。４人の意見を聞いてみるか
「おう、おかえりー…って、滅茶苦茶持ってきたな！」
声のした方に振り向くと結構な量の木の実をかごに入れた雛菜と透が戻ってきていた。
「ちょいちょい、なにそのたくさんの木の実」
ざっと見た限りでもモモンの実、マゴの実、ソクノの実……見事なまでに全部甘い木の実ばっかりだな。取り合えず、甘口カレーになるのは確定したな。
「これ～？甘い木の実だよ～丈先輩が好きなもの持ってきていいって言ってたから、たくさん取ってきた～」
い、いや、流石にこの量はちょっとな。絶対、今回のカレーじゃ使いきれないしポロックやポフィンに使うにしてもこの数が多すぎる。
どうするかな？確かに何でも持ってきていいって言ったけど……いや、甘やかし過ぎないって決めたばかりなんだし、ここははっきりと言うべきだよな。
「えへへ～丈先輩、ありがとね～雛菜、甘い木の実大好きなんだ～」

「よし！じゃあ、これ全部買いに」
　ギロッ！
「い、いや流石にちょっと多いかな？雛菜、悪いんだけど１０個位に絞ってくれないか？」
「え～」
「半分はカレーに入れて、残りでポフィン作るとそれくらいがちょうどいいんだ。頼むよ」
「う～分かった～」
　ふぅ、危ない危ない。円香の『にらみつける』がなかったら、早速やらかす所だった。
　本当に無意識で甘やかそうとしてしまうな…
「それで、透が持ってきたのは…おー『ボブのかんづめ』か」
「うん。この間食べてさ、すっごく美味しかったから。行けるかなって思って」
　ボブの缶詰とは、イギリスにある『ボブのレストラン』というステーキハウスから売り出された缶詰だ。イギリスでかなりの人気を得て、日本にも何年か前から売り出されていた。
「いいな。面白い」
「でしょう？」
　よし、これが食材が決まったな。でも『ボブのかんづめ』を使うなら豚肉はいらないな。あの缶詰だけでも結構ボリュームあるし、後で返してこよう。
「ちょっと待って、それもカレーに入れるの？」
「え、駄目？」、「駄目か？」
「その缶詰、私も食べたことある。実際、美味しかったけどカレーに入れるなんて聞いたことないんだけど」
　ああ、そういう事ね。
「これは、なかなかカレーに合うんだよ」
　実際に、既に何度か作ったことがある。レストランのシェフ兼オーナーのボブ秘伝の食材で驚きのボリュームと強いコクが楽しめるカレーとなることは既に実証済みだ。

「本当に？」
「ああ、ちゃんと美味しいカレーを作るからさ」
「…はぁ、あんたがカレー作り上手なのは知ってるからいいけど。ちゃんと食べられるのを作ってよ」
「了解！任せてくれ！」

＊＊＊

「それじゃあ、俺はカレーの準備してるから部屋でのんびりしてていいぞ」
「…何か手伝う？」
「今日は４人のお祝いなんだから、俺に任せてくれ」
「それじゃあ、任せたー」
「美味しいカレー作ってね～」
　買い物を終えた私たちは、そのまま丈一郎の家に来ていた。
　特に家に戻ってもやることがないし、丈一郎の部屋は私達のたまり場所のような面もあって、漫画、映画やアニメのブルーレイディスク、ゲームなど丈一郎が個人で買った物から私たちが全員で遊ぶために持ってきたものまでかなりの数存在している。暇をつぶすなら自分の部屋よりもこっちだ。
「本当に何も手伝わなくてよかったのかな？」
「真田がいいって言ったんだから構わないでしょ、カレーなら任せても問題ないし」
　ポロックやポフィンもそうだが、本当に丈一郎はカレー作りが上手い。
　私もあいつのお弁当なんかを作るようになってから料理の腕はかなり上達した自負はある。それでもカレーだけは勝てる気がしない。
「…まぁ、それ以外は全然だけど」
「あ、あはは」
　ほら、小糸ですら否定できない。長い付き合いだけど、あいつの謎すぎる料理スキルが解明される日はこの先も来ないのかも

「あー……でもさ」
「？」
「なんか…新しく出来るようになったって言ってた」
「なんかって、何？」
「うん？えっと……何だっけ？」
「……」
「ごめん、ごめん。すぐ思い出すからにらまないで」
「……別ににらんでない」
　本当ににらんでるつもりはない。ただ、少しイラっとして見つめただけだから
「円香先輩、目つき悪いからそう見えちゃうんだよ～」
「…雛菜」
「あは～怖ーい、小糸ちゃん助けて～」
「ぴぇ！雛菜ちゃん」
　余計なことを言い出した雛菜を見るとそのまま小糸の背中に隠れてしまう。……全然隠れられてないけど
「え、えっと…円香ちゃん、落ち着いて…ね」
「だから、別に怒ってないから」
　小糸は純粋なんだから、あんまり悪ノリしすぎると本気で信じちゃうんだからやめて欲しい。
「あ、思い出した。サンドイッチ作れるようになったって言ってた」
　透は透で本当にマイペース過ぎる……まぁ、今に始まった事じゃないけど
「…サンドイッチ？あいつが言ってたの？」
「うん、少し前から出来るようになったって言ってた」
　何でサンドイッチ？
　いや、確かに作るだけなら簡単だけど、今までおにぎりもろくに作れなかったのに何で急に出来るようになるんだろう
「私たちの知らない所で練習でもしてたの？」
「練習はしてないらしいよ。なんか、ある日急に出来るようになったんだって」

…まぁ、最近じゃ、バトルの特訓にポケモンたちの世話、休みの日は私たちと過ごす、これを繰り返してた丈一郎にそんな料理の特訓をする時間があったとは思えないから嘘はついてないと思う。
「そういえば、『あと、何年かしたらまた、新しい料理かお菓子が作れるようになる気がする。よく分からないけど、そんな予感がする』とか言ってた」
「…どういう意味？」
「分かんない」
透もそうだけど丈一郎も時々、よく分からないことを言う。
ポケモンに関することだと、種族値、個体値、努力値、特性とかの話しは単純に私の知識が足りてない面があるから仕方ないこともあるけど今回は本気でよく分からない。
「ね～透先輩、ついでに円香先輩もゲームしようよ～」
私たちが話している間に雛菜はいつの間にかゲームの準備をしていた。あの子も負けず劣らずの自由さだ。
「透先輩は雛菜と同じチームね～」
「ふふ、いいよ」
勝手にチームを作るな
「じゃ、じゃあ円香ちゃんよろしくね！」
「…うん、よろしく小糸」
…まぁ、小糸と同じチームになることに対して不服がある訳じゃないし別にいいけど

お祝い（後編）

俺は今、幼馴染みたちのＣＤデビューの為に一人で黙々とカレー作りに勤しんでいた。
一人で自分用のカレーを作るときは基本中辛だけど、今日は彼女たちの好みに合わせて甘口カレーで行く。
「よし、そろそろだな」
煮詰めたカレーに一口サイズにカットした木の実とボブの缶詰をカレーに投入し、かき混ぜる。
「まぜる♪まぜる♪こがさないように　こぼれないように～っと」
ゆっくり過ぎるとカレーが焦げるし、逆に早く混ぜすぎるとカレーが飛び散る。なので、ちょうどいいスピードで混ぜて白くはっきりした湯気と一緒にキラキラが出現してくる（幻覚）ので、その状態をキープする。
これが、カレー作りのコツだ。
「そして、最後にとびっきりの真心を注入する」
これによってカレーは完成を迎えるのだ！
「……我ながらちょっときもいな」
うん…真心注入とかないわ。
「絶対に人前ではやらないようにしよう」
「その方がいいと思うよ～」
「うわっ！」
振り返ると透、円香、小糸、雛菜がいつの間にか台所の外から、こちらを見ていた。
「ふふ、丈一郎の真心も美味しく貰うね」
「あ、あはは」
「……」
透と小糸のリアクションは想像通りだから、まだいいけど……あの、円香ちゃん。その「…うわ」みたいな目でこっち見るのやめて！
それが一番傷つくから！
「…部屋にいたんじゃないの？」

「うん～円香先輩が様子見にいくっていうから、全員でついてきたの～」
「あんたが、カレー以外に何か変な物作ったりしないか不安だったから念の為ね」
　読まれてたか…確かに、こっそり付け合わせになるものでも作ろうかなとか考えてはいたけどさ……それにしたって
「変な物はないでしょうよ」
　いや、変な物かな？特定の料理以外だと作った本人の俺でさえ、口に入れることも出来ないような料理が出来たりするし
「とにかく、カレー以外は作らなくていいから」
「でも、折角だしさ…」
「だめ～丈先輩は今日はカレー以外作るの禁止～」
「えっと、ごめんね…」
「真田家の食卓は私達が守るよ」
　全員から変な物って認定されてる。事実だけどちょっと複雑！

＊＊＊

「そんな訳で、台所から追い出されちゃった訳なんだけどひどいと思わない？」
「……コウガ」
　ドンマイとばかりに俺の肩に手を置いてくれるゲッコウガ……俺はいい相棒を持ったな。しかし、それとは対照的に明らかにほっとした表情を浮かべている４匹
「お前たちには明日からポロックもポフィンも作ってやんない」
「ミロ！」、「ドラ！」、「シャワ！」、「ルリ！」
　驚愕の表情を浮かべると、４匹は俺にすり寄ってくる。
　ミロカロスは体に巻き付き、キングドラとシャワーズは足にしがみつき、マリルリは正面から抱き着く。
　昔は、それこそこの子たちが進化する前だったら４匹同時でも余裕で受け止めることができた。だが、進化することによりポケモンたち

の体は大きくなり、体重もそれに倣って何倍にも増えている。
　つまり、何が言いたいかと言うと
「お・・・!!……重い」
「「「!!!」」」
　思わず出てしまった本音を聞き、ポケモンたちは離れるどころか先ほどよりもさらに体重をかけてくる。
「ごめん！うそ！冗談だから！明日からも皆さんの為に一生懸命ポロックもポフィンも作るから許して！」
「丈くん、ポケモンたちの分のご飯の準備てつだ…ぴぃえっ!!ななななにやってるの？」
　数十秒後、小糸の指示でなんとか解放された。いまだにぷりぷり怒っているみたいだが、ゲッコウガが仲介してくれたおかげでカレーの大盛と明日以降のおやつを作ることを条件に許してもらえた。
　そういやあの子ら、ゲッコウガが頼めば大抵素直になんでも話し聞いてくれるんだよな。ひょっとして、俺が知らないだけでいつの間にかハーレムとか作っちゃってる？
「そ、それで、あんな状態になってたんだ」
「…まぁ進化してから体が大きくなったから仕方ないけど」
「でも駄目だよ～丈先輩、みんな女の子なんだから～」
「そうそう体重の話題はＮＧだよね」
「……はい」
　女性が体重の事を気にしているのは人間もポケモンも同じという事か。ゲッコウガ以外はみんなメスだもんな。気を付けよう
『ご飯が炊けたロト、ご飯が炊けたロト』
「お！ご飯できたみたいだな」
「あんた、炊飯器にまでロトム入れてるの？」
　だって、色々な電子製品に入れるしバトルから日常生活まで様々な面でサポートしてくれて便利なんだもん。
「まぁ、いいじゃないか。お疲れさん、ロトム。外に飯の用意してあるからゲッコウガたちと食べてきてくれ」
「ロト！」

炊飯器から出たロトムはそのまま窓から外に出ていく。日頃の感謝を込めて大盛で用意してるから味わって食べて欲しいな。
「それじゃあ、ご飯も炊けたしカレー食べようか？」
「食べる～♡」
「じゃあ、準備するから座っててくれ」
人数分の皿を取り出し、そこにご飯とカレーを注ぐ。今日はみんなレッスンもしてないし、普通盛りでいいな。
「お待たせ、本日のカレーはボブの缶詰と甘めの木の実を大量に使った『あまくちジューシーカレー』だ」
「おー待ってました」
「いい匂い～」
「お、美味しそう……こうやって美味しい物食べる時に良いコメントできた方がいいのかな？」
「何？食レポの練習？」
「私たちの初仕事って食レポなの？」
「初仕事で食レポやるなんてあるのか？」
食レポってある程度の知名度ないと回ってこなそうな印象があるし、最初の内はなかなかその手の仕事は回ってこなそうな気がする。
「え？やらないの食レポ？」
「雛菜、美味しい物いっぱい食べた～い」
「まぁ、少しくらい売れればその内あるんじゃない？」
「が、頑張ろうね！」
まぁ、俺としても折角、アイドルをやる以上は頑張って欲しい所ではあるな。ＣＤが販売すればユニットとしての初仕事もいつかは貰えるだろうし、そうすれば知名度も上がりテレビにも出るかもしれない。
「それじゃあ、小糸。このカレーの味をレポートしてくれ」
「ぴぇっ！い、今？」
「そうだよ。ほれほれ感想をどうぞ～」
テレビって、こういう無茶ぶりとかよくあるしな。きっといい練習になる。決して、小糸が困ってる反応を楽しみたいなんていう意図は

ない。
　そんな意図はないけど、一応、透、円香、雛菜にはアイコンタクトを送っておく。
「ふふ、小糸ちゃん頑張れー」
「ファイト」
「楽しみ～」
　よし！全員に通じたな。俺もそうだけど、みんな小糸をからかう時の連帯感は凄まじいよね。
「え、えっと……」
「「「……」」」
「……か、カレーの辛さと木の実の甘さが一見ミスマッチとも思える組み合わせだけど、コクとキレが両立されてて、すごく美味しい。り、リザードン級の美味しさだね！」
　……おぉ～
「…ど、どうかな？」
　小糸は、不安げな表情で俺たちを見てくる。いやいや、今の食レポのどこに不安要素があるんだ。個人的に１００点満点あげたくなるような食レポだったんだけど
「いいね、グー」
「いいんじゃない？」
「あは～小糸ちゃん食レポ上手～」
「いや、驚いたな……食レポに失敗して、滑った小糸をみんなでからかうつもりで無茶ぶりしたのに…」
　まさか、小糸があんなに食レポが上手いとは……いや、俺の作ったものだからこそ、本音で言えたのか？小糸って内弁慶だからな。初めての場所では、ここまでの事は言えないかもしれない。う～ん、その辺は実際にやってみないと分からないか。
「えへへ……うん？丈くん今、なんて？」
「何でもないよ」
「そうそう何でもない」
「…何でもないから」

「うん～何でもないよ～」
「??」
やっぱり、ちょろいなこの子

＊＊＊

カレーを食べ終えた後、みんなで自室でゲームをしたりテレビを見ながら過ごした。明日は俺も含めて全員レッスンがあるから、ちょっと早めの解散となった。
色々あって疲れたし、本当はのんびりしたいんだけど約束しちゃったしポケモンたちの明日の分のポフィン作っておくか。
「帰りに買ってきた木の実がいくつか残ってるから、それを使って何個か作るとして……後はどうしようかな？」
何を作るのかを考えていると、チャイムが鳴る音が聞こたので一旦メニュー作りを中止し、玄関に向かう。そこには円香が立っていた。
「どうかした？忘れ物？」
「……ちょっと、話がある」
「？ああ、入って」
話しって何だろうな？わざわざ、戻ってきて直接してくる所を見るとみんなには聞かれたくない類の話しっぽい。正直、嫌な予感がする。
「それで、話って？」
「ねぇ」
「うーん？」
「小糸にアイドルの才能があるって言ったの？」
「ああ、言ったよ。小糸から聞いた？」
「……小糸、あんたにそう言ってもらえたって嬉しそうに話してた」
俺の個人的な見解って感じではあるけど、あの時、言った事は本音だ。
「素人意見ではあるけどね」
「小糸はあんたの言った言葉を信じてる」

「それは、光栄だな」
「っそんな事言って、本当に大丈夫なの？」
「……何が言いたいんだ」
「だから！小糸に才能あるなんて言って、もし上手くいかなかったら、それであの子が傷ついたらどうするのかって聞いてるの！」
あ～～なるほどね。そういう事か。
円香は認めないだろうけど、彼女は基本的に誰かの為に行動を起こしている。事務所を訪ねたのは透を芸能界と言ういかがわしい世界から守るためだった。そして、今は少し先の未来で傷を負うかもしれない小糸の為にこうして怒っている。
でもな
「……それは仕方ないだろう」
「……は？」
俺の言葉を聞くと円香は睨みつけてくる。これは……防御力が二段階くらい下がりそうだな。でも、言いたいことは言わせてもらう
「小糸は……いや、成り行きとはいえノクチルの全員がアイドルっていう、新しい事に挑戦しようとしてるんだ。その結果、失敗や敗北を経験して傷を負うのはある程度は仕方ないだろう」
アイドルは勝ち負けだけが全てじゃない。だけど、オーディションでは結果だけを求められるだろうし、この先、受けるオーディションで全て合格するなんてことはまず不可能だ。
テレビに出ることになったとしても、ちょっとした発言や失敗から心無い罵声をネット上であげてくる奴は絶対にいる。
「じゃあなに？小糸が傷ついてもいいってこと？」
「そうは言ってないよ」
小糸が…いや、小糸に限らず透、円香、雛菜の４人が悲しむ姿なんて見たくはない。出来る事なら、この先一生傷を負うことなくいて欲しいとさえ思ってる。
「ただ、信じてるんだ」
「小糸を？」
「みんなの事をだよ」

「……」
「確かに、小糸は傷つきやすいかもしれない。だけど、４人が一緒にいれば小糸は頑張れる。壁だって乗り越えられる。それだけのポテンシャルをみんなは持ってる。そう信じてるんだよ」
「……でも、その先は？……いくら頑張ってもいつかは終わりが来る。その時に知るのは身の程っていう限界でしょう？……それを知った時、小糸は……私は……」
「……円香」
……そうか。小糸の事だけじゃないんだな。円香は小糸だけじゃなくこの先の自分自身の未来にも不安を抱いている。期待されるだけされて、それに答える事ができなかったとき、自分の限界を知ってしまった時に感じるであろう絶望感、彼女はそれを恐れている。
「多分だけどさ……円香が不安に感じるのは、まだ本気で何かをしたことがないからなのかもな」
円香は、どんな事にもある程度努力すれば出来てしまうだけのポテンシャルがある。だから、全力で何かに打ち込み努力をしている姿を俺は見た記憶がない。
「でも、失敗しても自分の限界を知るのも悪くないと思う。自分の大きさが分かったら次に何をしたらいいかが分かる。自分の事が分かればやりたいことがぼんやり見えてくる。そうすれば、少なくとも今、感じてる不安からは抜け出せると思うよ」
だから、円香には今は細かいことは考えずに、取り合えず全力でアイドルという仕事にぶつかって欲しい。
「……でも」
「怖いか？」
「……傷ついて、傷ついて…それでも何も出来なかったら、どうすればいいの？」
「その時は……そうだな……その時は、取り合えず好きなだけ泣いていい。俺が小糸や円香たちが泣き止むまでずっと傍にいるから」
立ち向かうことは大事だ。だけど、全力で挑んでそれでも敵わないなら逃げていいんだ。

「……え？」
「それで、円香たちがアイドルを辞める決意ができたなら、アイドルの事もプロデューサーの事も事務所の事も全部忘れて逃げ出したって構わない」
「……辞めてもいいの？」
「辞めちゃいけない理由があるのか？」
まだ、所属してからそれ程時間はたっていないけど２８３プロは嫌がる子に無理やりアイドルをやらせる場所じゃないと思っている。
仮に辞めることに反対の意思を示したとしてもその時は、俺が責任を取ればいいだけだ。俺がノクチルがいなくなっても問題ないくらいに利益を事務所にもたらせば何も問題ないはずだ。
「円香たちがアイドルを始めるきっかけを作ったのはプロデューサーかもしれない。だけど、迷っていた円香の背中を押したのは俺だ」
あの日、プロデューサーにスカウトされ迷惑がっていた円香を後押しした。円香がアイドルをやらなければ雛菜はともかく小糸はアイドルをやるとは言いださなかったかもしれない。
この先アイドルを続けていけば、きっとどこかで失敗や挫折を味わう時が来る。それが、どんな形でかは分からないけど多分それ自体は避けられない。そうなった時、責任が俺にはないなんて口が裂けても言えない。
「だから、俺にも責任はある。俺はノクチルのメンバーじゃないけどさ…皆が今後背負う責任の半分くらいは一緒に背負わせくれ」
「……どうして？どうして、そこまで…」
どうしてって、今更それ聞いちゃう？もう、何度も言ってるんだけどな
「いつも言ってるだろ？お前たちの事が大好きだからだ。他に理由なんかないよ。」
「っ！」
困ってるときには頼って欲しいし、どうしようもなく傷ついて逃げ出したくなった時に躊躇わずに逃げ込んでくることのできる、そんな彼女たちにとっての最後の居場所でいたい。俺にとってはそれが一

番大事なことだ。
「まぁ、そんな訳だ。ＣＤデビューもこれからなんだからし、気楽にやんなよ。駄目だった時の事は考えなくていいからさ」
本当に駄目そうなときは俺だけじゃなく、プロデューサーにも多少は責任取らせるから……ＣＤ売れなかったら俺がＣＤ買い占めようかな。いや、流石に駄目かな？
「……あんたって本当にどうしようもなく馬鹿」
おおう、はっきり言ったな……４人に対して馬鹿みたいに惚れていることは否定できないけど
「……でも、ありがとう」
「……」
「真田？」
「…ああ…えっと…どういたしまして？」
「ふふっ…なにそれ？」
…いや、本当に何なんだろうね…円香がお礼を言った時の顔が綺麗すぎて一瞬意識失ってた。くっ！これだから顔面６００属はずるい！
「それと…何度も言うけど、私を含めて、あんまり皆を甘やかさないで……甘いだけの人は頼れないから」
え？そうなの？ただでさえ、最近は別行動が多くなってきてるんだし必要な時に頼りにしてもらえないのは普通に困るんだけど
「……その辺は、もうちょっと努力はするよ」
「そうして…じゃあ、私も帰るから」
「送ろうか？」
「今日はいい」
「そっか」
まぁ、俺の家と円香の家は徒歩数分の距離だしな。危険があるとも思えないし、偶にはいいだろう。円香も一人になりたいみたいだしな。
「今、あんたの顔見たくないし」
「なんで‼」

結構いい感じの事言ったつもりだったんだけどな？
ひょっとして、ストレートに伝えすぎて気持ち悪がられてる？だとしたら、すごいショックなんだけど…
「……それじゃあ、気をつけてな」
「ん」
円香はそう言うとリビングを出ていく。
最後の最後に一気にテンション落ちたな……もういいや、さっさとやる事やって後はのんびり過ごすとするか。
「真田」
ポフィンを作るために台所に戻ろうとすると声をかけられる。振り返ると、リビングの外から体の半分と顔だけを出し、こちらを見つめている円香がいた。
「うん？どうした？」
「……さっき言った言葉、絶対に忘れないで」
「えっと……どの言葉？」
「っ！だから……好き…とか…責任取る……とか」
好き、責任取る、その単語を口にするたびに円香の顔はどんどん赤くなっていく。
……やばい、俺の幼馴染み可愛すぎてやばい……ついでに、俺の語彙力もやばい。物凄い低下してる気がする。
「……忘れないで」
「ああ、本心で思ってることしか言ってないからね。忘れないよ」
「っ！……はぁ～もういい……帰る」
円香はそう言うと顔を引っ込めてしまう。その後、玄関が開く音が聞こえたから、今度こそ家から出た筈だ。
「……なんか、最後諦められたような気がするな」
まぁ、いいか。考えても分からなそうだし。疲れたし、早く明日の分のおやつ作ってのんびりしよう。